

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

勘	助	野	地	遺	跡	
六	畝	町	遺	跡		
大	池	南	遺	跡		
清	水	郎	原	西	遺	跡
黒	水		遺	跡		
大	坪		遺	跡		
権	現	島	遺	跡		

1988年3月

大分県教育委員会

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(I)

勘 助 野 地 遺 跡
六 畝 町 遺 跡
大 池 南 遺 跡
清 水 郎 原 西 遺 跡
黒 水 遺 跡
大 坪 遺 跡
権 現 島 遺 跡

1988年3月

大分県教育委員会

序

中津バイパスは、大分県を南北に走る国道10号線の改良工事として計画されました。この10号線は、大分県の産業・経済発展の大動脈であり、交通混雑の解消に対する県民の期待には大きなものがあります。

ところで、この中津バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和55年度にはじまり、本年度で8年目を経ました。この間、古代の家族構成や墓制のあり方に、新事実を提供した上ノ原横穴墓群をはじめ、たくさんの遺跡が調査されてまいりました。また、こうした遺跡の取り扱いについても、大変大きな問題となりました。

これまでの発掘調査の成果につきましては、今年度より順次本報告書を刊行する予定であります。今年度は、勘助野地・六畝町・大池南・清水郎原西・黒水・大坪・権現島の7遺跡についての報告であります。この報告書を通して、埋蔵文化財に対するご理解をいただくとともに、今後の学術文化の向上に少しでも役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査には開始時から御指導いただきました別府大学学長賀川光夫先生、北九州市立考古博物館館長小田富士雄先生をはじめ調査に御協力いただきました関係者各位及び地元の方々に対し、深い敬意を表するとともに、厚く御礼を申し上げます。

昭和63年3月

大分県教育委員会

教 育 長 嶋 津 文 雄

例 言

1. 本書は、一般国道10号線中津バスバス建設に伴う事前調査のうち昭和55年から昭和61年までに調査した中津市勘助野地遺跡、六畝町遺跡、大池南遺跡、清水郎原西遺跡、黒水遺跡、大坪遺跡、権現島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、中津市、三光村の各教育委員会、並びに地元の方々の御助力を得た。
4. 出土遺物及び関係資料は、大分県教育委員会文化課に保管している。
5. 本書の執筆者は次のとおりである。

I 第一章 序 説

第1節 調査の経過

- 1 発掘調査の経過……………渋谷 忠章
- 2 調査の組織……………渋谷 忠章

II 第二章 各遺跡の調査

- 第1節 勘助野地遺跡……………村上 久和・田中 裕介・清原 史代
- 第2節 六畝町遺跡……………友岡 信彦
- 第3節 大池南遺跡……………江田 豊
- 第4節 清水郎原西遺跡……………時枝 克安・城戸 誠
- 第5節 黒水遺跡……………城戸 誠・江田 豊・友岡 信彦
- 第6節 大坪遺跡……………後藤 一重
- 第7節 権現島遺跡……………後藤 一重

III 総 括……………渋谷 忠章

6. 遺物の実測、トレース、写真は、それぞれの担当者が、吉武牧子（囑託）と、文化課資料室勤務の姫野和子、淵野玲子、丸山啓子、清原史代、井口あけみの協力を得て行った。また、遺物の整理・復原には県文化課資料室の多くの方々の協力を得た。
7. 本書の編集は、渋谷忠章を中心に各担当者で行った。



黒水遺跡B地区井戸出土漆器

目 次

序

例言

第一章 序説	1
第一節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査の組織	7
第二章 各遺跡の調査	11
第1節 勘助野地遺跡	15
1 調査の概要	15
2 遺構と遺物	19
3 まとめ	113
第2節 六畝町遺跡	165
1 遺跡の概要	165
2 遺構と遺物	166
3 まとめ	171
第3節 大池南遺跡	179
1 遺跡の概要	179
2 遺構と遺物	180
3 まとめ	186
第4節 清水郎原西遺跡	195
1 遺跡の概要	195
2 遺構と遺物	199
3 まとめ	202
4 清水郎原西遺跡集石遺構の熱残留磁気測定について	203
第5節 黒水遺跡	213
1 遺跡の概要	213
2 遺構と遺物	218
3 まとめ	251

第6節	大坪遺跡	297
1	遺跡の概要	297
2	遺構と遺物	298
3	まとめ	339
第7節	権現島遺跡	367
1	遺跡の概要	367
2	基本層序	368
3	遺構と遺物	368
4	まとめ	371
第三章	総括	377

図 版 目 次

第一章 序 説

第一節 調査の経過

- 第1図 路線内遺跡分布図…………… 3
第2図 各種遺跡位置図…………… 5

第二章 各遺跡の調査

第一節 勘助野地遺跡

- 第3図 山国川流域古墳分布図…………… 17
第4図 勘助野地遺跡位置図…………… 20
第5図 勘助野地遺跡遺構分布図…………… 21
第6図 1号方形墳実測図…………… 23
第7図 1号方形墳周溝土層図…………… 25
第8図 1号方形墳1号主体部(箱式石棺墓)実測図…………… 27
第9図 1号方形墳1号主体部(箱式石棺墓)掘り方実測図…………… 29
第10図 1号方形墳1号主体部遺物出土状態…………… 31
第11図 1号方形墳1号主体部出土櫛実測図(実大)…………… 32
第12図 1号方形墳1号主体部出土鉄器実測図…………… 33
第13図 1号方形墳1号主体部玉類出土状態…………… 35
第14図 1号方形墳1号主体部出土玉類実測図…………… 35
第15図 1号方形墳2号主体部(石蓋土壙墓)実測図…………… 40
第16図 1号方形墳3号主体部(組合せ式木棺墓)実測図…………… 41
第17図 1号方形墳3号主体部出土鉄器実測図…………… 42
第18図 勘助野地遺跡出土土器分類図…………… 44
第19図 壺形埴輪製作工程復元図…………… 45
第20図 1号方形墳周溝内出土遺物(1)壺形埴輪実測図…………… 47
第21図 1号方形墳周溝内出土遺物(2)壺形埴輪実測図…………… 48
第22図 1号方形墳周溝内出土遺物(3)壺形埴輪頸部実測図…………… 49
第23図 1号方形墳周溝内出土遺物(4)壺形埴輪底部実測図…………… 50
第24図 1号方形墳周溝内出土遺物(5)壺・高環実測図…………… 52
第25図 1号方形墳周溝内出土遺物(6)高環実測図…………… 53
第26図 壺形埴輪底部穿孔各種…………… 55

第27图	1号方形埴周溝内出土石器実测图	56
第28图	1号方形埴周溝内出土土錘実测图	56
第29图	1号方形埴周溝層序概念图	66
第30图	1号方形埴周溝内土師器出土位置(下層)	67
第31图	1号方形埴周溝内壺形埴輪出土位置(上層)	69
第32图	1号方形埴遺構形成過程想定復元图	72
第33图	3号方形埴周溝内出土遺物	73
第34图	5号土壙墓玉類出土狀況実测图	74
第35・36图	1・2号土壙墓実测图	75
第37~39图	3・4・5号土壙墓実测图	76
第40图	5号土壙墓出土玉類実测图	77
第41・42图	6・7号土壙墓実测图	80
第43图	7号土壙墓出土鉄器実测图	81
第44~47图	8・9・10・11号土壙墓実测图	82
第48图	12号土壙墓土層图	83
第49・50图	12・13号土壙墓実测图	84
第51图	1号木棺墓実测图	85
第52图	1号石蓋土壙墓実测图	86
第53图	3号石蓋土壙墓出土鉄器実测图	87
第54图	2号石蓋土壙墓実测图	88
第55图	3号石蓋土壙墓実测图	89
第56图	4号石蓋土壙墓実测图	91
第57图	5号石蓋土壙墓実测图	92
第58~60图	1・2・3号土坑実测图	96
第61~63图	4・5・6号土坑実测图	97
第64~67图	7・8・9・10号土坑実测图	98
第68・69图	11・12号土坑実测图	99
第70・71图	13・14号土坑実测图	100
第72・73图	15・16号土坑実测图	101
第74・75图	17・18号土坑実测图	102
第76图	14号土坑出土土器実测图	103
第77图	勘助野地遺跡出土石鏃実测图	103
第78图	勘助野地遺跡火葬墓群分布图	105

第79図	1号火葬墓実測図	106
第80・81図	2・3号火葬墓実測図	107
第82図	4号火葬墓実測図	108
第83・84図	1・2号火葬墓骨蔵器実測図	109
第85・86図	3・4号火葬墓骨蔵器実測図	110
第87図	5号火葬墓骨蔵器実測図	111
第88図	今光松木Ⅳ期土師器	114
第89図	今光松木Ⅴ期土師器	118
第90図	壺型埴輪編年表	119
第91図	汐井掛・平遺跡出土鉄鎌	119
第2節 六畝町遺跡		
第92図	六畝町遺跡遺構配置図	165
第93図	1号竪穴実測図	166
第94図	2号竪穴実測図	167
第95図	3号竪穴実測図	167
第96図	出土石器実測図	168
第97図	出土土器実測図	168
第98図	B地区土層実測図	169
第3節 大池南遺跡		
第99図	大池南遺跡遺構配置図	179
第100図	竪穴実測図	180
第101図	竪穴出土土器実測図	181
第102図	溝状遺構実測図	182
第103図	溝状遺構出土土器実測図	183
第104図	溝状遺構出土石器実測図	183
第105図	溝状遺構出土土器実測図	184
第4節 清水郎原西遺跡		
第106図	清水郎原西遺跡周辺遺跡分布図	196
第107図	清水郎原西遺跡遺構配置図	198
第108図	土坑実測図	199
第109図	溝状遺構実測図	200
第110図	集石遺構実測図	201
第111図	出土土器実測図	202

第5節 黒水遺跡

第112図	黒水遺跡周辺遺跡分布図	213
第113図	黒水遺跡A・B地区遺構配置図	215
第114図	黒水遺跡C・D地区遺構配置図	217
第115図	1・2号土坑実測図	219
第116図	3号土坑実測図	219
第117図	4号土坑実測図	220
第118図	5号土坑実測図	220
第119図	6号土坑実測図	221
第120図	7号土坑実測図	221
第121図	8号土坑実測図	221
第122図	9号土坑実測図	222
第123図	10号土坑実測図	222
第124図	11号土坑実測図	223
第125図	12号土坑実測図	223
第126図	13号土坑実測図	224
第127図	14号土坑実測図	224
第128図	15・16・17号土坑実測図	225
第129図	18号土坑実測図	225
第130図	19号土坑実測図	226
第131図	19号土坑出土石鏃実測図	226
第132図	20号土坑実測図	226
第133図	21号土坑実測図	227
第134図	22号土坑実測図	227
第135図	23号土坑実測図	228
第126図	24号土坑実測図	228
第137図	6号溝跡実測図	229
第138図	溝跡出土遺物実測図(1)	232
第139図	溝跡出土遺物実測図(2)	233
第140図	1号土墳墓実測図	235
第141図	2号土墳墓実測図	236
第142図	土墳墓出土遺物実測図	237
第143図	井戸実測図	238

第144图	井戸出土木器実测图	239
第145图	井戸出土遺物実测图	240
第146图	地下式土坑実测图	242
第147图	地下式坑出土遺物実测图	243
第148图	1号火葬墓実测图	243
第149图	2号火葬墓実测图	244
第150图	3号火葬墓実测图	244
第151图	4号火葬墓実测图	244
第152图	4号火葬墓出土石臼実测图	245
第153图	5号火葬墓実测图	245
第154图	6号火葬墓実测图	246
第155图	火葬墓骨蔵器実测图	247
第156图	掘立柱建物実测图	248
第157图	集石遺構実测图	249
第158图	集石遺構出土遺物実测图	249
第159图	土坑(陷穴)分布图	255
第160图	土坑(陷穴)覆土実测图	257
第6節 大坪遺跡		
第161图	大坪遺跡調査区位置图	297
第162图	旧石器時代遺物	298
第163图	大坪遺跡遺構配置图	299
第164图	2号土坑出土遺物実测图	301
第165图	2号土坑実测图	301
第166图	3号土坑実测图	301
第167图	4・18号土坑実测图	302
第168图	4号土坑出土遺物実测图	302
第169图	7号土坑実测图	302
第170图	8号土坑実测图	303
第171图	8号土坑出土遺物実测图(1)	303
第172图	8号土坑出土遺物実测图(2)	303
第173图	11号土坑実测图	304
第174图	11号土坑出土遺物実测图	304
第175图	12号土坑実测图	305

第176図	13号土坑実測図	305
第177図	13号土坑出土遺物実測図(1)	306
第178図	13号土坑出土遺物実測図(2)	306
第179図	14号土坑実測図	306
第180図	15号土坑実測図	306
第181図	その他の縄文時代遺物実測図(1)	307
第182図	その他の縄文時代遺物実測図(2)	307
第183図	弥生時代遺物実測図	308
第184図	1号住居跡カマド実測図	308
第185図	1号住居跡実測図	309
第186図	1号住居跡出土遺物実測図(1)	210
第187図	1号住居跡出土遺物実測図(2)	210
第188図	2号住居跡カマド実測図	311
第189図	2・3・4・5号住居跡実測図	312
第190図	2号住居跡出土遺物実測図(1)	313
第191図	2号住居跡出土遺物実測図(2)	315
第192図	3号住居跡カマド実測図	316
第193図	3号住居跡出土遺物実測図(1)	316
第194図	3号住居跡出土遺物実測図(2)	317
第195図	3号住居跡出土遺物実測図(3)	318
第196図	4号住居跡出土遺物実測図(1)	319
第197図	4号住居跡出土遺物実測図(2)	319
第198図	6号住居跡実測図	320
第199図	6号住居跡カマド実測図	320
第200図	6号住居跡出土遺物実測図(1)	320
第201図	6号住居跡出土遺物実測図(2)	321
第202図	7・10号住居跡実測図	322
第203図	7号住居跡カマド実測図	323
第204図	7号住居跡出土遺物実測図	324
第205図	8号住居跡実測図	325
第206図	8号住居跡カマド実測図	326
第207図	8号住居跡出土遺物実測図(1)	326
第208図	8号住居跡出土遺物実測図(2)	326

第209図	8号住居跡出土遺物実測図(3).....	327
第210図	8号住居跡出土遺物実測図(4).....	328
第211図	8号住居跡出土遺物実測図(5).....	329
第212図	9号住居跡実測図.....	330
第213図	10号住居跡カマド実測図.....	331
第214図	10号住居跡出土遺物実測図.....	331
第215図	5号土坑出土遺物実測図.....	332
第216図	5・6号土坑実測図.....	332
第217図	6号土坑出土遺物実測図.....	333
第218図	16号土坑実測図.....	333
第219図	17号土坑実測図.....	333
第220図	18号土坑出土遺物実測図.....	334
第221図	19号土坑実測図.....	334
第222図	1号建物出土遺物実測図.....	335
第223図	1号建物実測図.....	335
第224図	2号建物出土遺物実測図.....	335
第225図	2号建物実測図.....	336
第226図	3号建物実測図.....	336
第227図	4号建物実測図.....	337
第228図	5号建物実測図.....	338
第229図	1号土坑出土遺物実測図.....	338
第230図	1号土坑実測図.....	338
第231図	9号土坑実測図.....	339
第232図	10号土坑実測図.....	339
第7節 権現島遺跡		
第233図	権現島遺跡調査区位置図.....	367
第234図	権現島遺跡遺構配置図.....	369
第235図	1号溝平面図及び土層図.....	372
第236図	出土遺物実測図.....	372

第一章 序 説

第1節 調査の経過

1 発掘調査に至る経過

中津バイパスは、福岡県と境をなす下毛郡三光村佐知から、宇佐市山下に至る総延長9.9kmである。一般国道10号線の改良工事として計画された北大道路（北九州市一大分市）のうちの一つで、宇佐バイパス、宇佐・別府道路とつづき、九州横断自動車道と合流して大分市に至る。交通混雑の解消、地域経済の発展等を目的としたもので、早急な完成を県民が期待している。

一方、この北大道路に伴う文化財の取り扱いについては、昭和40年代後半から工事主体者である建設者と、大分県土木部及び大分県教育委員会の間で協議がすすめられ、中津バイパス路線内の遺跡分布調査では、28カ所の遺跡及び遺跡推定地を確認した。その後、調査の進展に伴い、遺跡数に若干の変更があったが、昭和62年度までの調査の経過は次のとおりである。

中津バイパスに伴う発掘調査は、**昭和55年度**から実施した。しかしこの頃は、路線内の用地買収の関係もあって、中津地区では試掘調査が主体となり、勸助野地遺跡で方形周溝墓、大池南遺跡では竪穴式住居跡、柱穴群を検出した。また宇佐地区では、法鏡寺交叉点の拡幅に伴って法鏡寺遺跡の調査を実施し、古墳時代の水田跡等を確認した。

昭和56年度は、上ノ原横穴墓群、勸助野地遺跡の本調査と清水郎原西遺跡の試掘を行った。その結果、上ノ原横穴墓群は、当初の予想をはるかにしのぐ大規模な横穴墓群であることが判明。また、県内では初めての5世紀代の横穴墓と、6世紀代の長い墓道をもつ横穴墓の調査となった。

昭和57年度は、上ノ原横穴墓群の本調査と、中津市大字伊藤田から野依にかけての丘陵上に所在する伊藤田古窯跡群の調査が主体となった。上ノ原横穴墓群は、調査が長期化する可能性が生じ、また遺跡の重要性や墓道の調査方法が論議されるようになった。伊藤田古窯跡群では、草場・踊ヶ迫・夜鳴池遺跡で窯跡の存在が確認された。

昭和58年度は、上ノ原横穴墓群、勸助野地、夜鳴池、瓦ヶ迫遺跡の本調査と、柳迫池東・野依・木部遺跡等の試掘を行った。上ノ原横穴墓群については、5世紀後半に築造された横穴墓群が、6世紀後半代まで継続して墓前祭祀が行われたこと、横穴墓築造にあたっては墓域に規制があったことなどが新たな問題として提起された。一方、瓦ヶ迫1号窯跡は、長さ12mと長大なもので、出土須恵器から6世紀後半代に位置づけられ、伊藤田古窯跡群中最古期に属する

ことが判明。

昭和59年度も上ノ原横穴墓群が中心となったが、柳迫池東、六畝町遺跡についても本調査を実施。上ノ原横穴墓群は、九州大学の人骨調査により被葬者の血縁関係が明らかとなり、古代の家族構成及び墓制のあり方が注目されるようになった。柳ヶ迫東遺跡は、旧地表の大半が削平されており、わずかにピット群と溝を検出したにすぎなかった。また六畝町遺跡では、ピット群と土壙などを検出したが、特に問題となる遺構は確認されなかった。

昭和60年度は、上ノ原横穴墓群の調査が最終年度となり、調査した横穴墓は81基に及ぶこととなった。また勘助野地遺跡では、バイパス進入道路の拡幅により、昭和58年度調査区の北に接する部分を急拠調査することになり、方形周溝墓と火葬墓が新たに検出され、遺跡の密度の濃さを示した。その他、柳迫池東・六畝町・大池南・黒水遺跡についても調査を行った。また、犬丸川流域の加来・森山地区では、大坪・樋多田遺跡、清水郎原西、権現島遺跡の調査を実施。特に樋多田遺跡では、弥生時代中期・後期の二時期の流路が検出され、それに伴って木器類が出土し、次年度に継続調査を行うこととなった。大坪遺跡は、犬丸川左岸の微高地上に位置し、古墳時代後期を中心とする住居跡が検出された。

昭和61年度になると、路線内の工事も急ピッチですすめられ、調査と工事が並行して行われることが多かった。調査は樋多田遺跡を中心に、清水郎原西・黒水・寺迫池・居屋敷遺跡についても実施。樋多田遺跡は、前年度につづいて木製鋏などの木器類が出土。また、黒水遺跡では陥穴状遺構が追加され、その数は約25基に及んだ。

昭和62年度は、中津市森山遺跡と10号線の拡幅に伴う、宇佐市大根川遺跡の調査を実施。森山遺跡は、犬丸川右岸の標高約55mの丘陵上に位置する高地性集落である。特に住居跡は、丘陵斜面を利用して作られており、大分県では初めての調査例となった。大根川遺跡は、中世の溝状遺構や柱穴群を調査したが、一部は未買収地のための次年度調査となった。

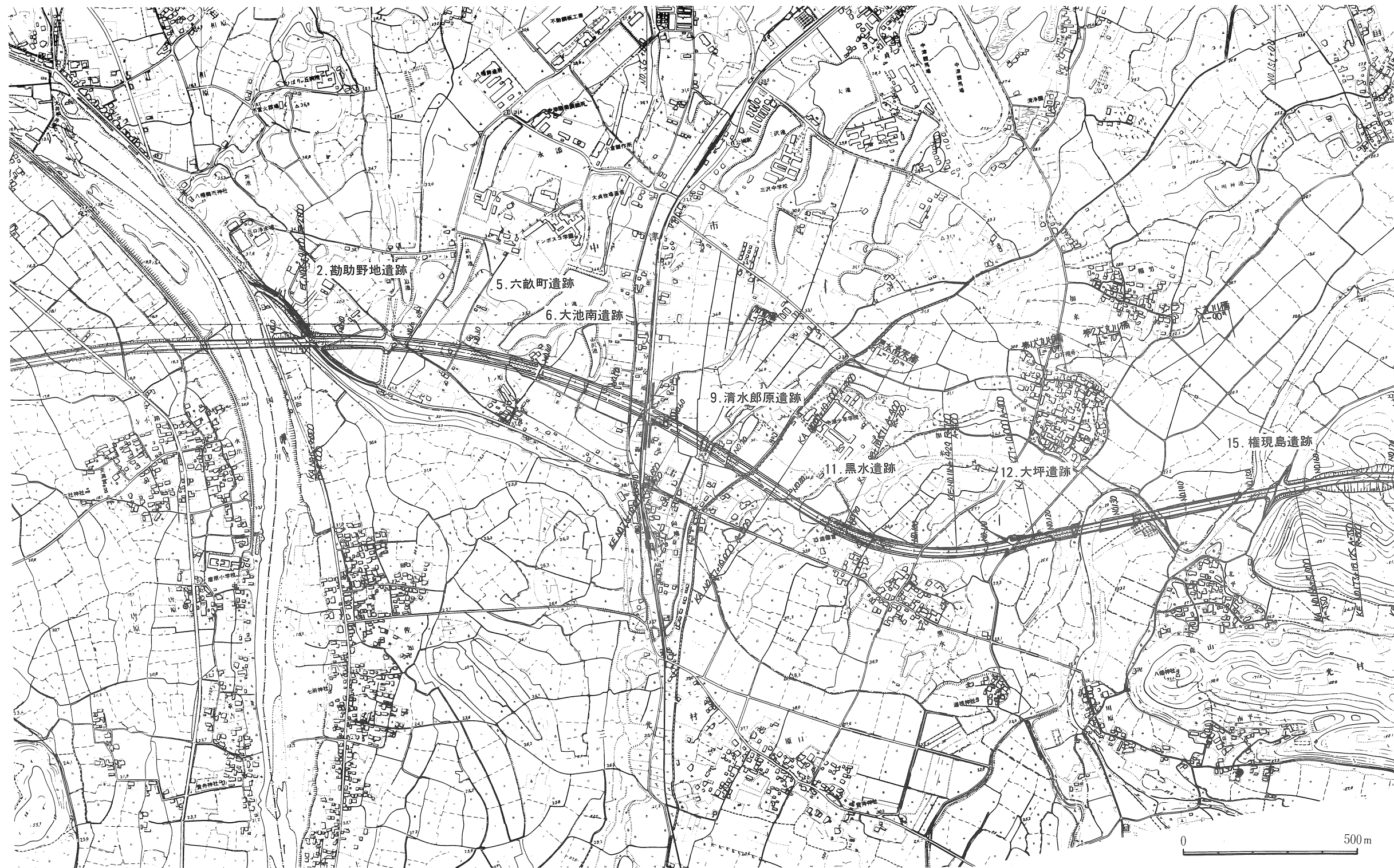
以上が、中津バイパスに伴うこれまでの発掘調査の経過であるが、調査予定遺跡のうち宇佐地区大根川遺跡の一部と向野遺跡については、次年度以降に調査が行われる予定である。



国土地理院「土佐市」(25,000分の1)地形図を使用

- | | | | | | |
|----|---------|----|-------|----|---------|
| 1 | 上ノ原横穴墓群 | 16 | 森山遺跡 | 26 | 瓦ヶ迫窯跡 |
| 2 | 勸助野地遺跡 | 17 | 森山横穴 | 27 | 木部遺跡散布地 |
| 3 | 柳ヶ迫池東遺跡 | 18 | 散布地 | 28 | 大根川遺跡 |
| 4 | 六畝町遺跡周辺 | 19 | 寺迫遺跡 | 29 | 向野遺跡 |
| 5 | 六畝町遺跡 | 20 | 安平遺跡 | | |
| 6 | 大池南遺跡 | 11 | 黒水遺跡 | 21 | 居屋敷遺跡 |
| 7 | 市ノ沢遺跡 | 12 | 大坪遺跡 | 22 | 草場窯跡 |
| 8 | 加来原遺跡 | 13 | 散布地 | 23 | 夜鳴池西窯跡 |
| 9 | 清水郎原西遺跡 | 14 | 樋多田遺跡 | 24 | 夜鳴池遺跡 |
| 10 | 清水郎原東遺跡 | 15 | 権現島遺跡 | 25 | 跡ヶ迫窯跡 |

第1図 路線内遺跡分布図



0 500m

第2図 各種遺跡位置図

2 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

昭和55年度

調査主体 大分県教育委員会
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財審議会委員）
 小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹・大分県文化財審議会委員）

大分県教育委員会

教 育 長 友田 享史
 文化課課長 尾登 一信
 文化財専門員 後藤 宗俊
 主 任 清水 宗昭
 主 事 坂本 嘉弘、村上 久和、高橋 信武
 嘱 託 原 俊一、吉留 秀敏

昭和56年度

調査主体 大分県教育委員会
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財審議会委員）
 小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹・大分県文化財審議会委員）

白木原和美（熊本大学文学部教授）
 西谷 正（九州大学文学部助教授）

調査員 田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）

大分県教育委員会

教 育 長 友田 享史
 文化課課長 原尻 実
 文化財専門員 後藤 宗俊
 主 任 清水 宗昭
 主 事 村上 久和
 嘱 託 吉留 秀敏、佐藤良二郎、永松みゆき
 補 助 員 茂和 敏、土井和幸（別府大学）北条芳隆（岡山大学）

昭和57年度

調査主体 大分県教育委員会
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財審議会委員）
 小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹・大分県文化財審議会委員）
 調査員 田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）

大分県教育委員会

教 育 長 手嶋 誠一
文化課課長 原尻 実
文化財専門員 後藤 宗俊
主 任 清水 宗昭
主 事 村上 久和、西 哲弘
嘱 託 吉留 秀敏、橋本 孝生
補 助 員 木村明史、土居和幸（別府大学）、北条芳隆、田中裕介、
藤井克昌(岡山大学)、吉田 寛(山口大学)、松永幸男（九州大学）

昭和58年度

調 査 主 体 大分県教育委員会
調 査 指 導 員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員）
水野 正好（奈良大学文学部助教授）
西谷 正（九州大学文学部助教授）
調 査 員 田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）

大分県教育委員会

教 育 長 手嶋 誠一
文化課課長 秋吉 辰郎
文化財専門員 後藤 宗俊
主 任 清水 宗昭、村上 久和
主 事 西 哲弘、小林 昭彦
嘱 託 城戸 誠、橋本 孝生、友岡 信彦
補 助 員 土居和幸、前田達男（別府大学）、吉田 寛（山口大学）

昭和59年度

調 査 主 体 大分県教育委員会
調 査 指 導 員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員）
水野 正好（奈良大学文学部教授）
伊藤 晴明（島根大学理学部教授）
時枝 克安（ 同 助教授）
調 査 員 田中 良之（九州大学医学部第二解剖講座）

大分県教育委員会

教 育 長 手嶋 誠一
 文化課課長 高塩 至
 文化財専門員兼 後藤 宗俊
 埋蔵文化財係長
 主 査 清水 宗昭
 主 任 村上 久和
 主 事 西 哲弘、小林 昭彦、江田 豊
 嘱 託 城戸 誠、橋本 孝生、友岡 信彦
 補 助 員 田中裕介（岡山大学）、吉田寛、高下洋一、柏本秋生（山
 口大学）、原田昭一（同志社大学）、平嶋文博（別府大学）

昭和60年度

調 査 主 体 大分県教育委員会
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
 小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護員審議会委員）
 佐々木 章（大分短期大学講師）

大分県教育委員会

教 育 長 藤井 義美
 文化課課長 高塩 至
 文化財専門員兼 後藤 宗俊
 埋蔵文化財係長
 主 査 清水 宗昭
 主 任 村上 久和
 主 事 西 哲弘、後藤 一重、江田 豊
 嘱 託 城戸 誠、友岡 信彦、小野 整

昭和61年度

調 査 主 体 大分県教育委員会
 調査指導員 賀川 光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
 小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員）
 時枝 克安（島根大学助教授）
 畑中 健一（北九州大学教授）
 調 査 員 田中 良之（九州大学医学部解剖第二講座）
 土肥 直美（ 同 ）

大分県教育委員会

教 育 長 藤井 義美

文化課課長 塔鼻 勝人
文化財専門員兼 後藤 宗俊
埋蔵文化財係長
主 査 渋谷 忠章
主 任 西 哲弘
主 事 江田 豊
嘱 託 城戸 誠、原田 昭一、小野 整

その他、御多忙中にもかかわらず次の方々に御指導をいただいた。記して感謝するしだいである。

任 孝宰、佐田 茂、武末純一、小倉正五、長嶺正秀、草場啓一、甲斐忠彦、
真野和夫、岩本仁蔵、山田拓伸、宮内克己、段上達雄 昭和56年度
近藤義郎、横山浩一、八賀 晋、春成秀爾、足立克己、広瀬和雄、田代健二 昭和57年度
佐原 真、西 弘海、石野博信、今尾文昭、池上 悟、佐田 茂 昭和58年度
河原純之、伊藤 稔、八賀 晋、吉留秀敏、鄭 澄元、申 敬澈 昭和59年度
高倉洋影、工楽善通、甲斐忠彦、宮内克己 昭和60年度
亀田修一、桑原幸則、後藤一重 昭和61年度

第二章

各遺跡の調査

跡 遺 地 野 助 勘

第1節 勘助野地遺跡

1 調査の概要

調査の経過 一般国道10号線バイパス関係埋蔵文化財の発掘調査は、昭和56年2月に勘助野地地区の試掘調査に始まった。この試掘調査で方形墳1基、土坑3基を確認した。その後この方形墳は、地区外であることが判明し現状保存することになった。同年7月より当地区および上ノ原横穴墓群の本調査を行なうことになった。

勘助野地遺跡の発掘調査は、梅雨あけ後の7月24日から開始した。まず、調査区全体の草刈・伐採作業を行ない調査前の地形測量・写真撮影の後ユンボによる表土剥ぎを始めた。表土を剥いだ時点で南北方向に走る数条の溝を確認した。溝中より近世以降の陶器小片が検出されたところから近世以降の畑の耕作溝と理解した。その後、人力で地山直上まで掘り下げたところ一辺18m前後の方形墳一基と周辺に土坑4基が確認された。そこで昭和56年度は、この方形墳と上ノ原横穴墓群の調査に全力を注ぎ、12月に方形墳の調査は終了した。

昭和57年度は、上ノ原横穴墓群の調査に集中したため勘助野地地区の調査は凍結した。明けて、昭和58年5月より方形墳を含む丘陵一帯の買収が完了したので、周辺の土壌墓等の調査を開始し、7月末で勘助野地区の調査は完了した。しかしながら昭和59年になって新たにバイパスへ通じる取付道建設の為、北側の3号方形墳、火葬墓等の調査を昭和60年2月に行なった。勘助野地地区の発掘調査対象面積は1,500m²である。

遺跡の立地と環境 周防灘に面する豊前平野は、主として山国川、駅館川の堆積作用によって形成された洪積世の低位台地と沖積平野で構成されている。上ノ原遺跡群は、この豊前平野の東部（中津平野）に位置し、山国川を眼下に見おろす海拔30余mを測る洪積世台地上（通称、下毛原丘陵）に立地する。この周辺の遺跡については、『垂水廃寺』などの報告書に詳細に書かれているので、ここでは古墳時代以降のみを概観する。^{註(1)}

中津平野周辺には、前期の大型古墳はほとんど存在しない。これは、京都、行橋地域や宇佐地域に比べると対称的なことである。そのなかで唯一、中津市下池永にあった亀山古墳は、全長70mの前方後円墳といわれるが昭和38年に土取りによって破壊されてしまった。対岸の山国川西岸（旧上毛郡）には、築上郡吉富町^{にりよう}楡生古墳（主体部竪穴式石室）と若干の遺物が知られている。^{註(3)} 東岸（旧下毛郡）には台地辺に箱式石棺、石蓋土壙墓などの発見が知られるが時期は明確でない。^{註(5)}

古墳時代後期になると、大規模古墳こそないが中小の群集墳は多数出現する。地域的にみると山国川西岸の丘陵地帯（旧上毛郡）と、上ノ原遺跡群を含む東岸の丘陵地帯（旧下毛郡）に二大別できる。西岸では、穴ヶ葉山古墳群、上ノ熊古墳群、巨石塚を中心とする横穴式石室墳

と百留横穴墓群に代表される横穴墓群が混在する。『福岡県遺跡分布地図』によると、石室墳は200余基、横穴墓は110余基が確認されている。この地域の墳墓の特色は、穴ヶ葉山古墳、山田1号墳に見られるように木ノ葉文・水鳥・人物などを側壁に線刻したり、百留横穴墓群のごとく、赤色顔料で円文・木ノ葉文などを描いた装飾古墳が見られることである。

山国川東岸では、相原古墳群、臼木古墳群、城山古墳群などの横穴式石室墳と上ノ原横穴墓群、城山横穴墓群、洞ノ上（岩井ヶ崎）横穴墓群などの横穴墓群があるが、圧倒的に横穴墓群が多い。

古墳時代の集落跡は、現在までのところ発掘調査による確認はないが、川下遺跡、重吉遺跡、上万田遺跡、高畑遺跡などがある。特に上万田遺跡からは、6世紀前半～中頃の須恵器が出土しており、上ノ原横穴墓群の築造時期に最も近いものである。

須恵器窯跡は、丘陵縁辺につくられる。そのなかで新吉富村山田窯跡と中津市伊藤田窯跡は著名である。現在までのところ両窯跡ともに6世紀後半までさかのぼり、奈良時代には瓦窯跡に変わっている。

律令時代に入ると、この地域に、九州の中では他の地域に比べ早い時期に寺院が建立される。垂水廃寺と相原廃寺である。ともに朝鮮系の瓦が出土している。

また文献史料では、正倉院文書の大宝二年戸籍残簡に、上ノ原遺跡の対岸の築上郡大平村唐原付近と推定される「上三毛郡塔里」のものがあり、その戸籍中に渡来系氏族としてとらえられるものがある。

以上、上ノ原遺跡付近の古墳時代以降の遺跡をみてきたが、この地域は古墳時代後期以降、めざましい発展をとげ、奈良時代前期には、豊前地域でも先進的な地域となる。これは、少なくとも文献上にあらわれる渡来系氏族との関係によるものではなからうかと考えられる。

(村上)

註(1) 島田義典「中津平野の成立」『中津市史』(1965)中津市史刊行会

(2) 森田勉・亀田修『垂水廃寺』(1976)新吉富村教育委員会

(3) 賀川光夫「亀山古墳」『中津市史』(1965)

なお渡辺重名の『豊前志』(1899)には、この古墳は「茶臼塚」とある。

(4) 築上郡吉富町直江所在の古墳。

(5) 築上郡大平村立資料館には、上ノ熊出土の須恵器Ⅰ形式の高杯がある。

(6) 中津南高校郷土部に同遺跡採集の遺物がある。

(7) 門脇禎二『古代共同体の研究』(1971)東大出版



1	黒川古墳	17	野崎横穴墓群	33	大塚古墳	49	岩木山2号墳	65	穴ヶ葉山古墳
2	城山横穴墓群	18	平原横穴墓群	34	大臣塚	50	山田1号墳	66	ガサメキ古墳群
3	城山古墳群	19	神出横穴	35	日熊1号墳	51	山田2号墳	67	鳴向山古墳群
4	洞ノ上横穴墓群	20	坂手前横穴墓群	36	日熊2号墳	52	寺村1号墳	68	向原1号墳
5	三ツ塚1号墳	21	鶴市神社裏古墳	37	雄熊山1号墳	53	寺村2号墳	69	向原2号墳
6	三ツ塚2号墳	22	坂手隈横穴墓群	38	雄熊山2号墳	54	鬼塚古墳	70	上佐井古墳
7	三ツ塚3号墳	23	相原1号墳	39	浅原古墳	55	徳並横穴墓群	71	新谷古墳
8	天神原横穴墓群	24	相原2号墳	40	向山古墳	56	穴井横穴墓群	72	尻無古墳
9	野辺田横穴墓群	25	坂手の隈古墳群	41	上桑野古墳群	57	カネツカ古墳群	73	平山1号墳
10	倉迫二ツ塚1号墳	26	幣旗邸(孤塚)古墳	42	能満寺横穴墓群	58	上の熊古墳群	74	平山2号墳
11	倉迫二ツ塚2号墳	27	上ノ原横穴墓群	43	能満寺古墳群	59	皿山古墳群	75	四ツ塚山1号墳
12	大平横穴墓群	28	廣連寺古墳	44	下野地古墳群	60	上唐原横穴墓群	76	四ツ塚2号墳
13	洗添横穴墓群	29	天仲寺古墳	45	小池古墳群	61	小山田1号墳	77	白留横穴墓群
14	森山横穴	30	鈴熊山古墳	46	桑野古墳	62	小山田2号墳	78	城の百穴横穴墓群
15	亀山古墳	31	榆生山古墳	47	宇野古墳群	63	新池南古墳	79	白杵古墳群
16	庵ノ尾横穴墓群	32	篠塚山古墳	48	岩木山1号墳	64	新池西古墳		

国土地理院50,000の1 使用

第3図 山国川流域古墳分布図

勘助野地遺跡遺構分布概要 勘助野地遺跡の位置する台地は、山国川東岸に形成された洪積世丘陵で、この丘陵上はハツ手状に鞍部台地を形成している。勘助野地遺跡は、この一つの鞍部台地に立地している。遺跡の立地する標高は、37～39mの間である。この遺跡の西側斜面には、5 C後半～7 Cに築造された上ノ原横穴墓群がある。この勘助野地遺跡と上ノ原横穴墓群を合わせ上ノ原遺跡群と総称する。東側の台地頂部には、推定径 15m 前後の千人塚古墳がある。また、谷を隔てた北西側台地上には、5 C 中頃前後の幣旗邸古墳が、同じく北側の谷を隔てた台地上には、6 C末～7 C前半頃に築造された相原古墳群（横穴式石室）があった。さらにこの丘陵の西端部には、鶴居神社裏古墳、坂手隈・坂手前横穴墓群が築造されている。このように勘助野地遺跡一帯は、山国川東岸の一大奥津城を形成しているのである。（第4図参照）

さて、勘助野地遺跡は、台地の西側端部に位置し、台地の頂部に2・3号方形墳、頂部から南側谷部にかけて1号方形墳がそれぞれ築造されている。土壙墓・石蓋土壙墓は、この3基の方形墳に付随するかのよう分布する。1号土壙墓は、1号方形墳の東側に単独で位置する。2号土壙墓と1号・2号石蓋土壙墓が1グループを形成し、1号方形墳の北西側台地端部に位置する。3～11号土壙墓と1号木棺墓が1グループを形成し、2号方形墳の西側台地端部に位置する。22号土壙墓と3～5号石蓋土壙墓が1グループを形成し、3号方形墳の西側台地端部に位置する。13号土壙墓は、単独で3号方形墳の北側に位置する。

火葬墓群は、ほぼ1グループをなし台地や北寄りの西側頂部～斜面部に位置する。

なお、台地の西側斜面部は県道建設時に削平されており、土壙墓等があった可能性は大きい。（第5図参照）

2 遺構と遺物

1) 1号方形墳 (第6図)

山国川東岸に形成された台地は、ハツ手状に鞍部を形成している。勸助野地墳墓群は、台地の頂部から南側の谷部にかけて築造されている。1号方形墳の墳頂部は標高約38.5m、水田面より比高差は約15~20m程度である。

発掘調査開始時は、畑として使用されていたため墳丘などの観察は認められなかったが、表土を除去すると周溝および中心主体部の埋土が検出された。残存度は極めて良好で、未掘墳である。墳丘規模は、東西 15.3m、南北 13.2m を測る。主体部は 3ヶ所にあり、それぞれ旧地表をカットして構築されていた。

旧地表は、斜面であるため西側に薄く東側に向うにしたがって厚くなり最も厚い所で約10cmを測る。周溝は、幅1.8~3.2m、深さ0.8m前後を測り全周するが、斜面の関係上西側が深く東側が浅くなっていた。

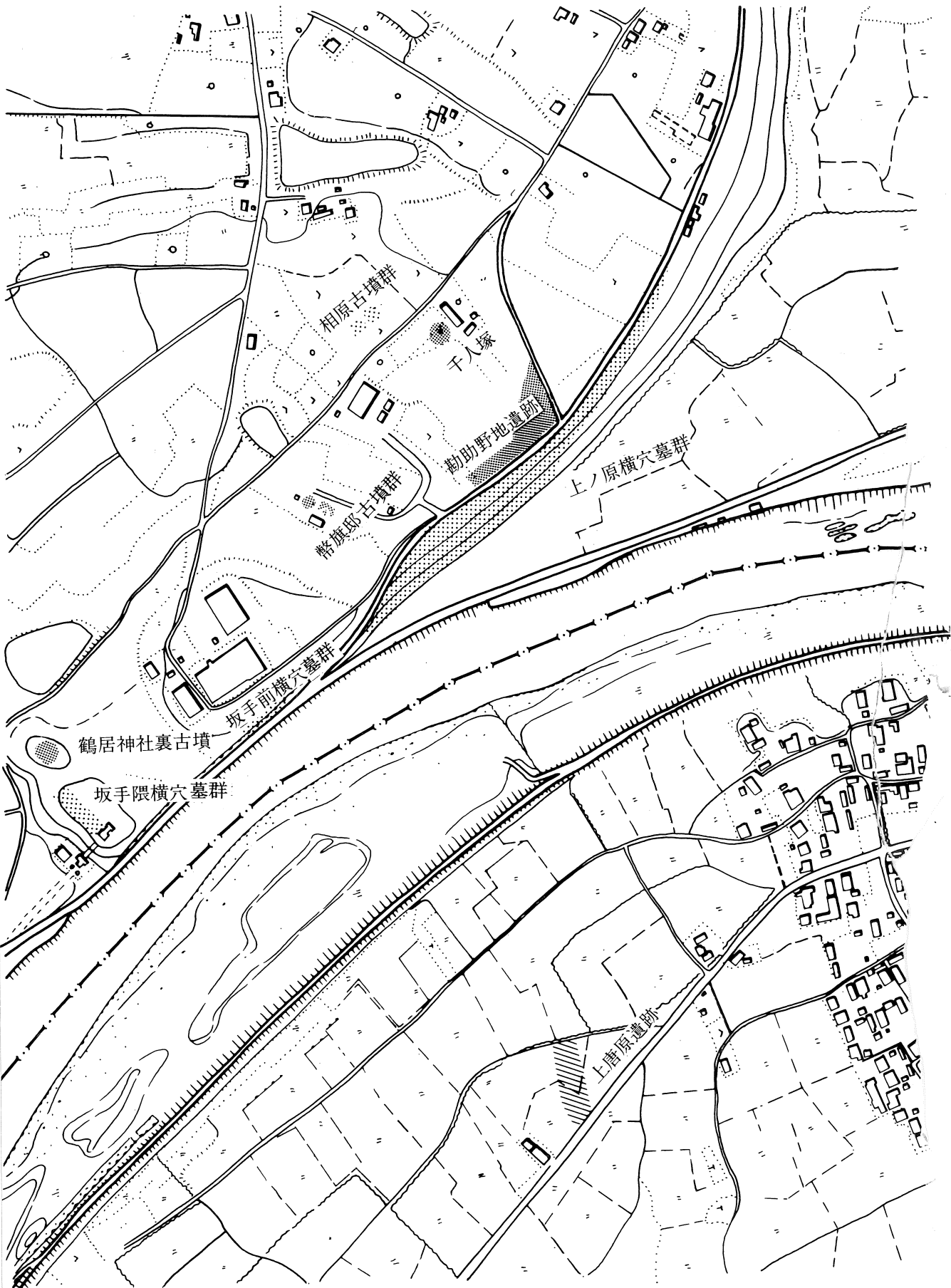
主体部は、墳丘の中央西側に石蓋土墳墓(2号主体)、その東側に箱式石棺墓(1号主体)、中央東側斜面部に組合式木棺墓(3号主体)がそれぞれ発見された。

1号主体部 (第8・9図)

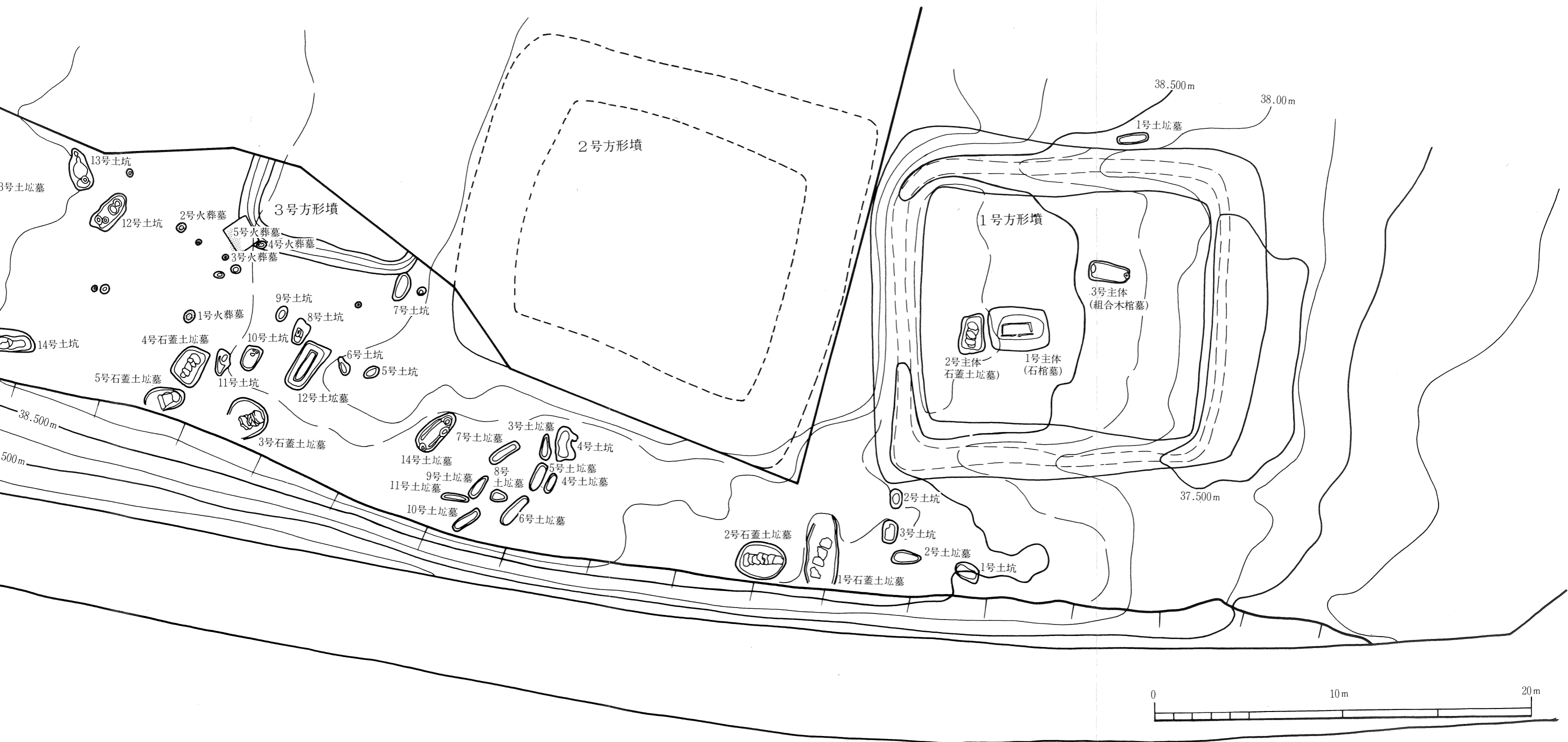
内部構造は、墳丘中央部やや西側にあって主軸を N-145°E に向けた箱式石棺である。この石棺は、現状では墳丘盛土下の表面から掘り込まれている。石棺は、略南北に長い墓壙内に位置する。墓壙は、主軸を南北に向けた隅丸長方形を示し上縁で東西長 2.40m、南北 3.42m、深さ 0.9m を呈すが、東側での掘り込み角度は約70°と垂直に近く、西側でも約65°の角度に掘り込まれていた。墓壙上面の標高は約38mを測る。旧地表面は、西側から東側へと低くなっており、東側部分では旧地表である黒色土の堆積は見られない。

墓壙内には、ベンガラ・白色粘土・黄褐色土の混じった埋土が填っている。上縁から約2cmと約50cmの所でベンガラの面が認められたことから石棺内には追葬が行なわれた可能性が大きい。また、墓壙内より、石棺材の剥片が少量出土しており、これは墓壙内に石棺を埋置する際に微調整した時にできたものと考えられる。

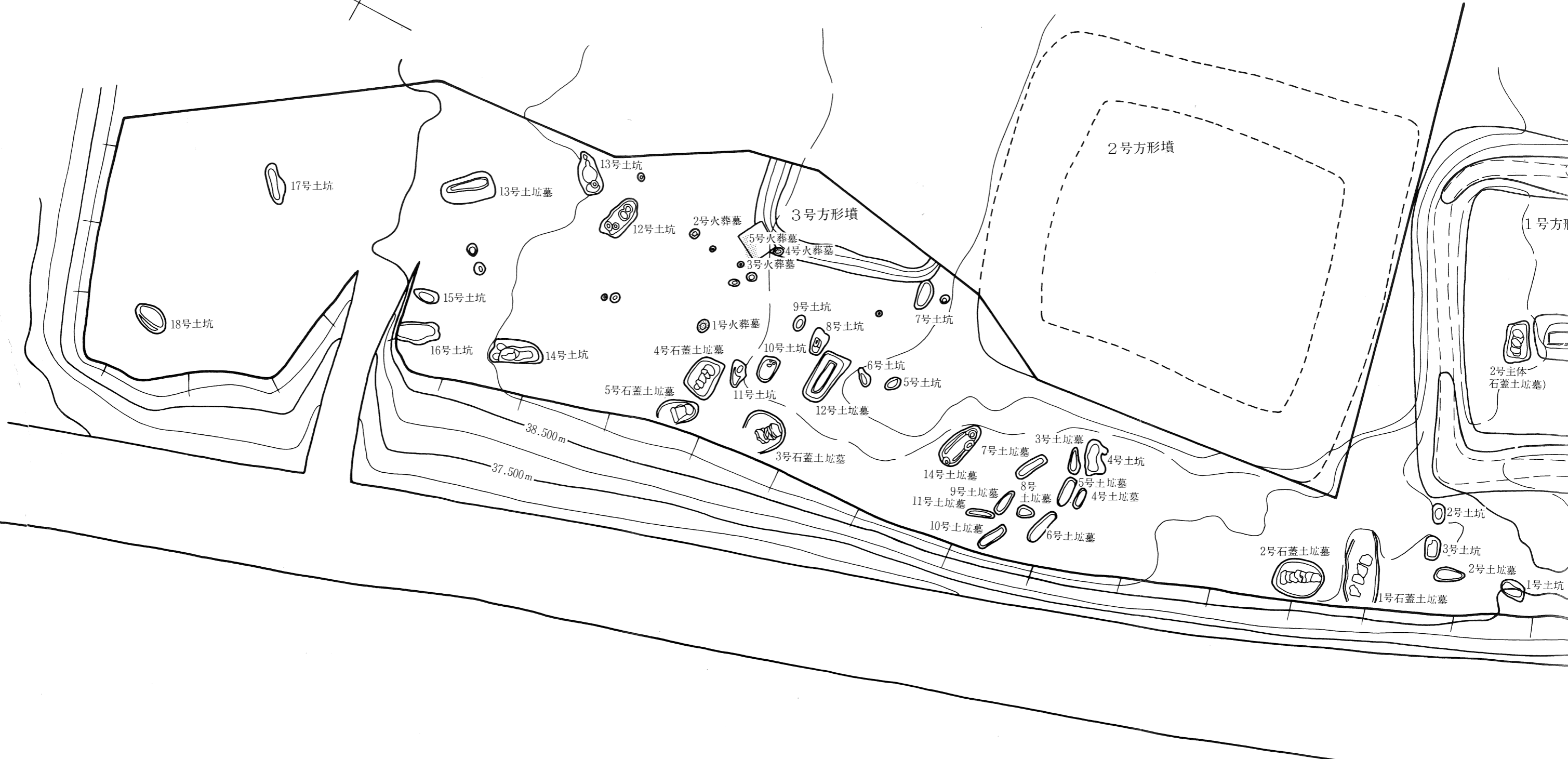
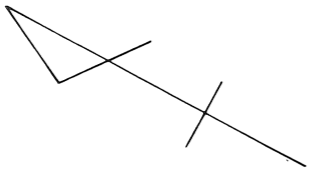
石棺は、蓋石が大形の割り石を南北に二枚置かれ、その空間を埋めるように中央に人頭大の割り石を3枚置き、その上に小型の割り石を4枚置き粘土で目張りする。棺は、8枚の肉厚な板状の板石を側壁に3枚ずつ、両小口壁に1枚ずつたて並べていた。板石上面および内面を丁寧に調整剝離しているのが特徴である。両側壁は、2枚の大型の板石を合わせ接合部にやや小型の板石を1枚裏から組み込ませていた。全体にやや内傾して立っている。両小口の石は、側石の内側に組み込まれ若干内傾する。側壁と小口の接合部には、厚さ2cm前後の断面三角形の粘土目張りが棺上面から床面まで施されていた。棺床は、粘土張りで棺内全面に赤色顔料が塗布されていた。棺内内法は、長軸長1.8m、最大幅0.6m、深さ0.67mを測る。



第4図 勘助野地遺跡位置図(1/5,000)



第5图 勘助野地遺跡遺構分布图



17号土坑

13号土坑墓

13号土坑

12号土坑

2号火葬墓

3号方形墳

5号火葬墓

4号火葬墓

3号火葬墓

2号方形墳

18号土坑

15号土坑

1号火葬墓

9号土坑

8号土坑

7号土坑

1号方形

16号土坑

14号土坑

4号石盖土坑墓

10号土坑

6号土坑

2号主体
石盖土坑墓

5号石盖土坑墓

11号土坑

12号土坑墓

38.500m

37.500m

3号石盖土坑墓

3号土坑墓

7号土坑墓

4号土坑

14号土坑墓

9号土坑墓

8号土坑墓

5号土坑墓

4号土坑墓

11号土坑墓

10号土坑墓

6号土坑墓

2号土坑

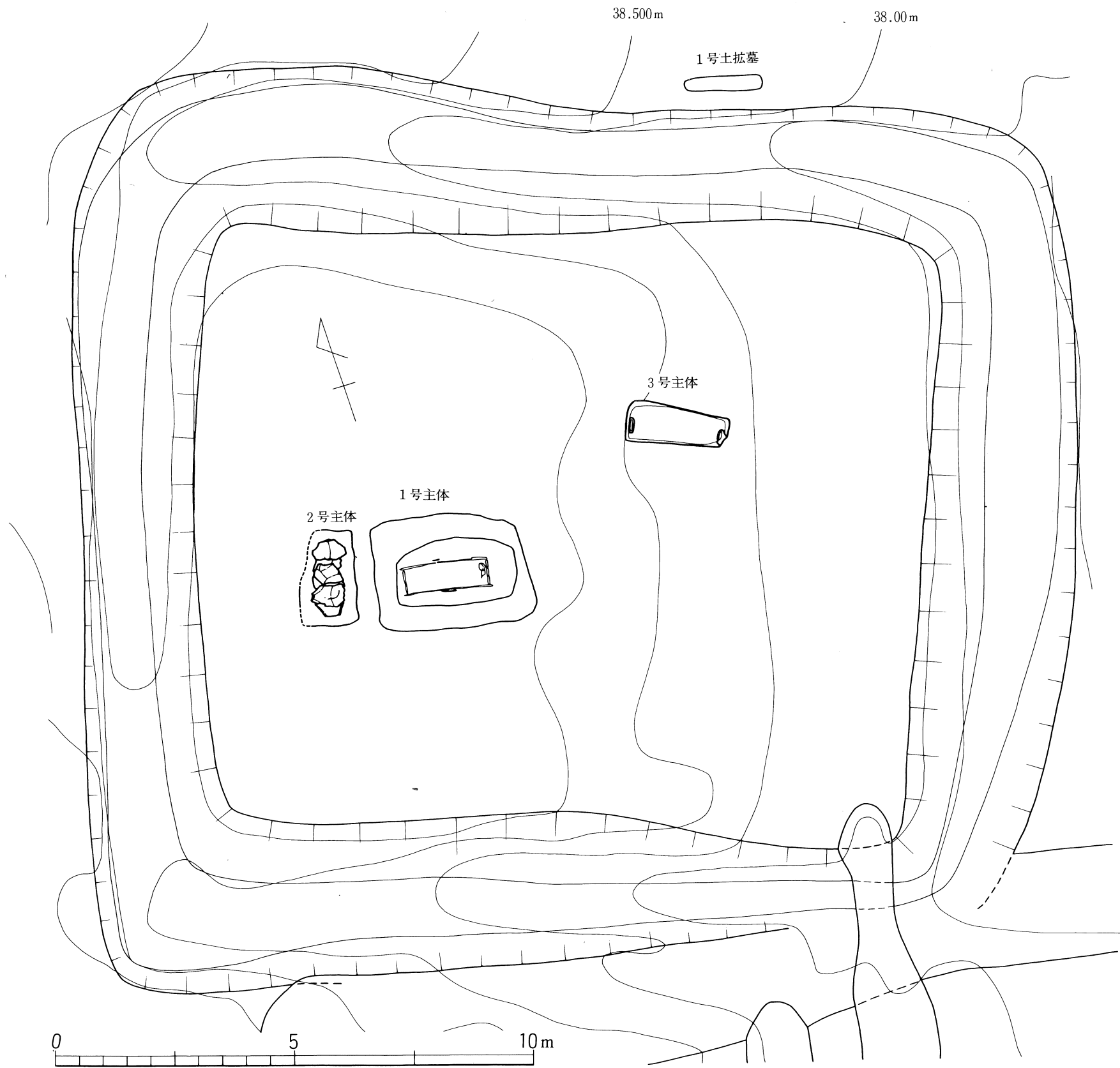
2号石盖土坑墓

3号土坑

2号土坑墓

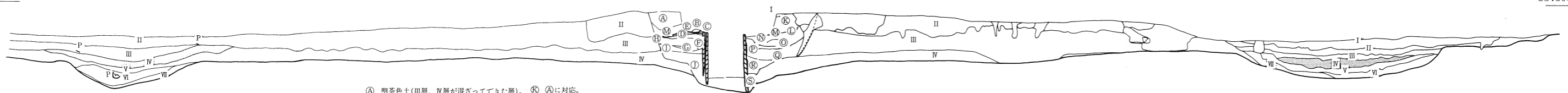
1号土坑

1号石盖土坑墓



第6图 1号方形墳实测图 (1/100)

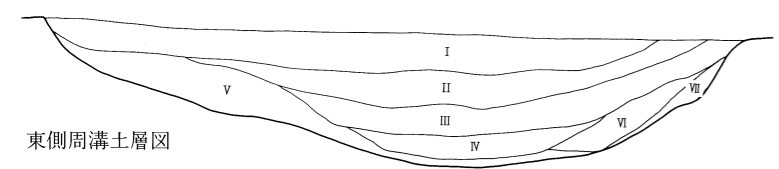
38.500m



- Ⓐ 明茶色土(III層、IV層が混ざってきた層)。
- Ⓑ II層の黒色土を多く含むためか、暗い色調。
- Ⓒ 粘土(灰色)。
- Ⓓ Ⓐと類似。
- Ⓔ Ⓐの中に薄く朱の層がみられる。
- Ⓕ Ⓐと類似。
- Ⓖ Ⓐと類似。Ⓔと同様の層。
- Ⓗ ⒶⒺより若干暗い色調。
- Ⓙ 茶色土(Ⓗ)と類似するか暗い色調。
- Ⓛ IV層と同じ。
- Ⓚ Ⓐに対応。
- Ⓛ 灰色粘土(Ⓒと同じ)。
- Ⓜ Ⓗに類似(や、硬)。
- Ⓝ Ⓗと対応。
- Ⓞ Ⓗと対応。
- Ⓟ Ⓗと対応。
- Ⓠ Ⓗと対応。
- Ⓡ III層のみで埋めている。
- Ⓢ Ⓛに対応。

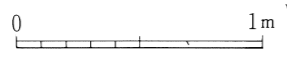


38.600m

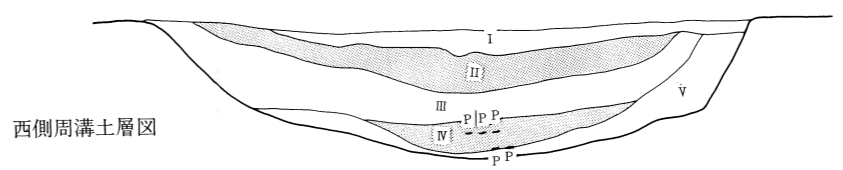


東側周溝土層図

- 東側周溝土層図
- I 茶褐色土
 - II 黒褐色土
 - III 黄茶褐色土
 - IV 黒褐色土
 - V 黄褐色土
 - VI 茶褐色土
 - VII 明黄褐色土

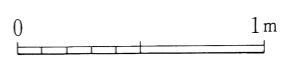


38.600m

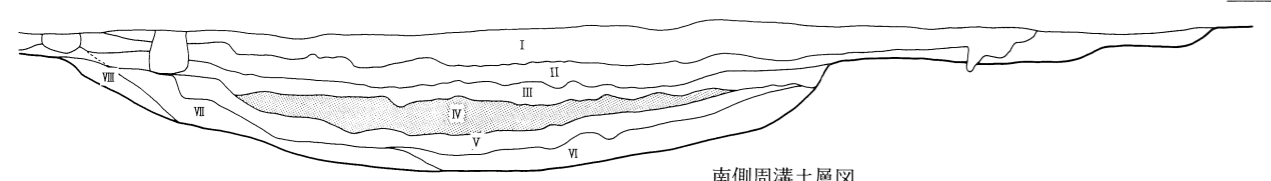


西側周溝土層図

- 西側周溝土層図
- I 黒褐色土(褐色の粒子=土器層を含む)。
 - II 黒色土(粘質。褐色気味)。
 - III 黒色土(粘質。粒子細い。土器包含)。
 - V 黄褐色土(粘質。粒子細い)。

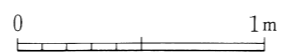


38.100m

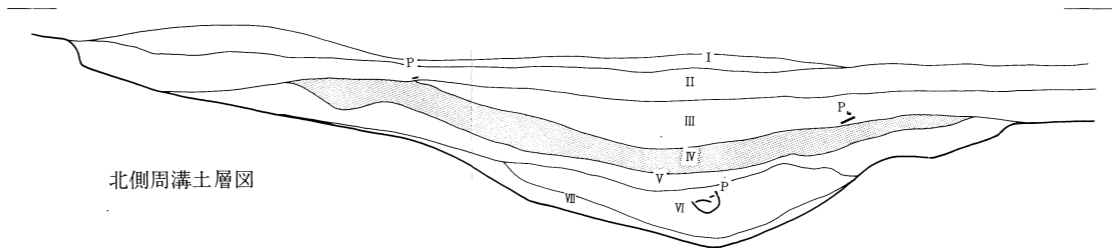


南側周溝土層図

- 南側周溝土層図
- I 黒褐色土(黄色土多量混入) } 表土層
 - II 黒褐色土(粘質。硬質) }
 - III 褐色土(粘質。粒子荒い)。
 - IV 黒色土(や、粘質。粒子荒い。軟質)。
 - V 明褐色土(や、粘質。粒子荒い)。
 - VI IV層と同じ。
 - VII V層と同じ(若干明るい)。
 - VIII 茶褐色土(粘質)。

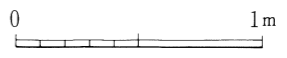


38.000m

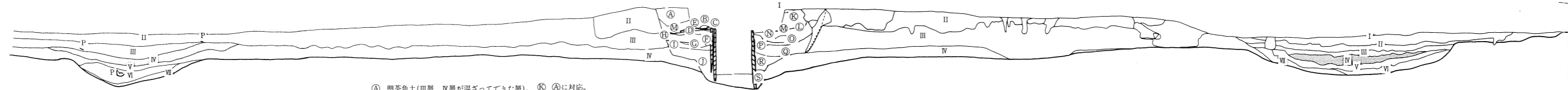


北側周溝土層図

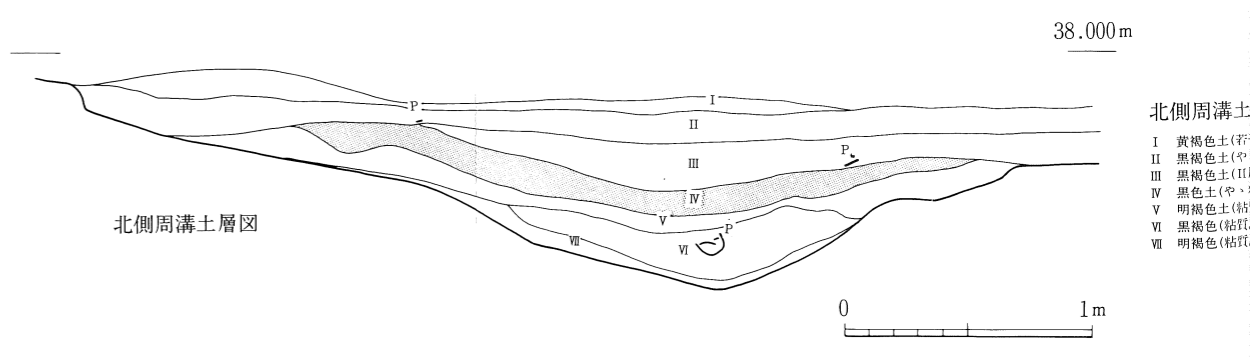
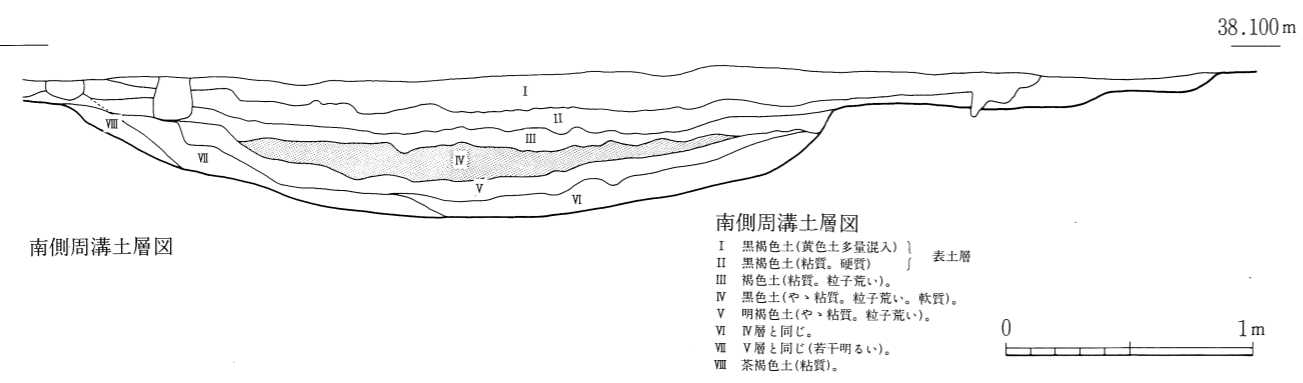
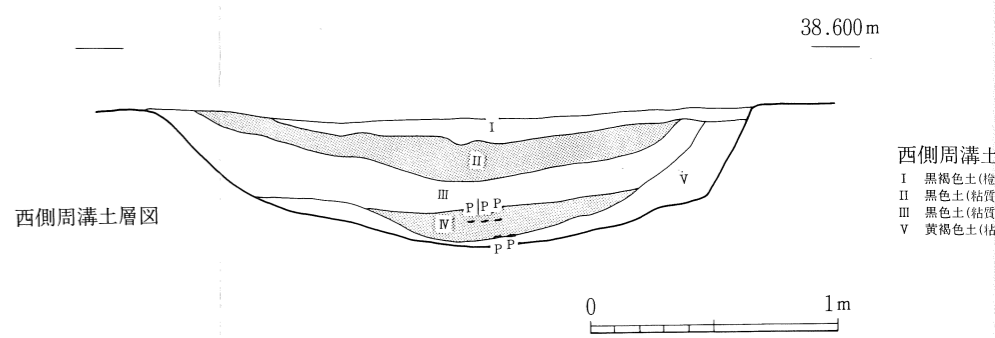
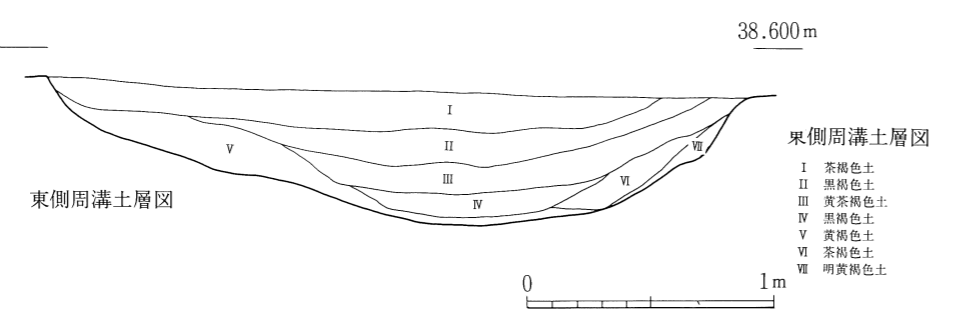
- 北側周溝土層図
- I 黄褐色土(若干炭が混入)。
 - II 黒褐色土(や、粘質。土器包含)。
 - III 黒褐色土(II層よりや、黒色。粒子細い)。
 - IV 黒色土(や、粘質)。
 - V 明褐色土(粘質。粒子細い)。
 - VI 黒褐色土(粘質。粒子荒い。土器包含)。
 - VII 明褐色土(粘質。粒子細い)。



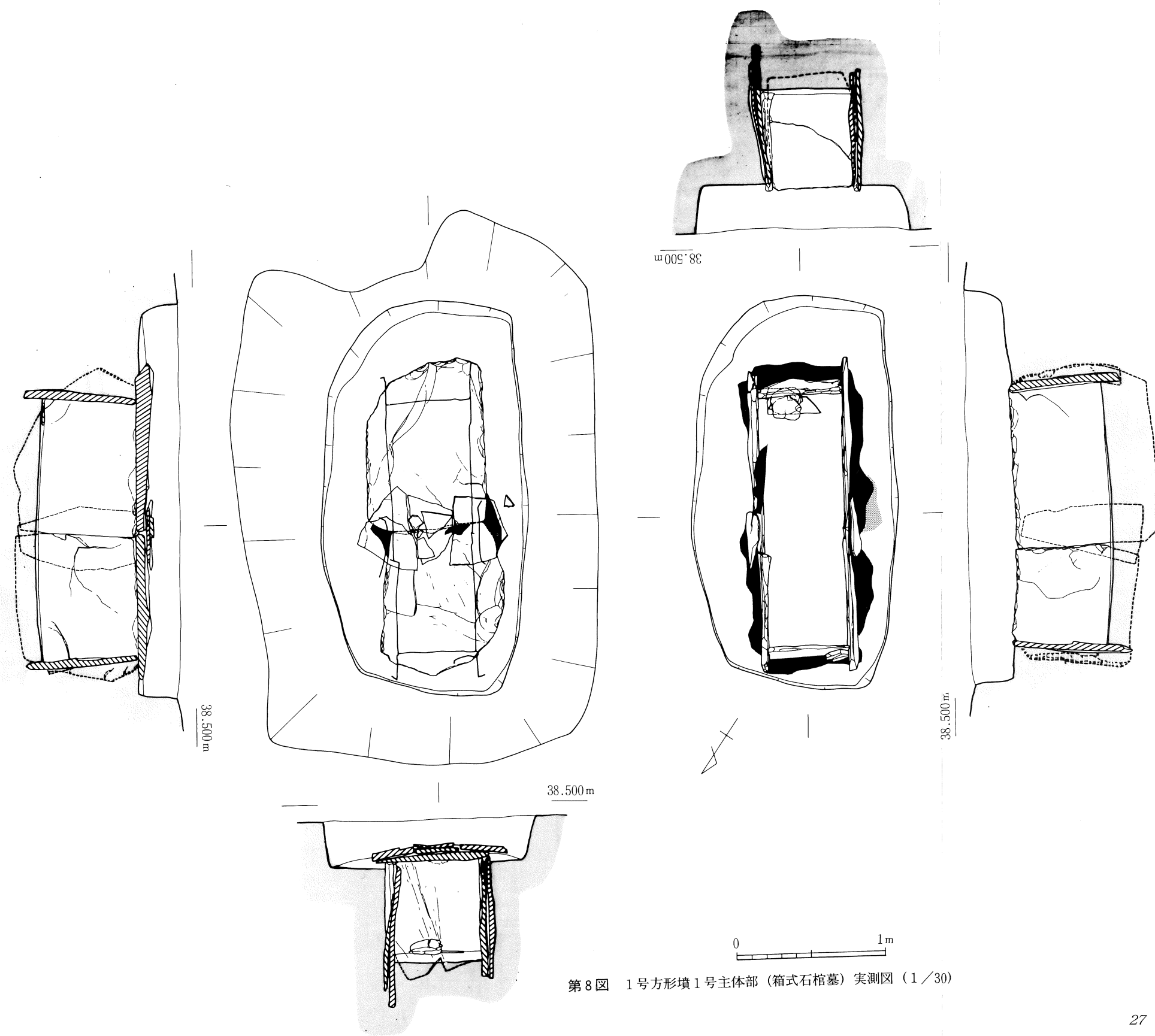
第7図 1号方形墳周溝土層図



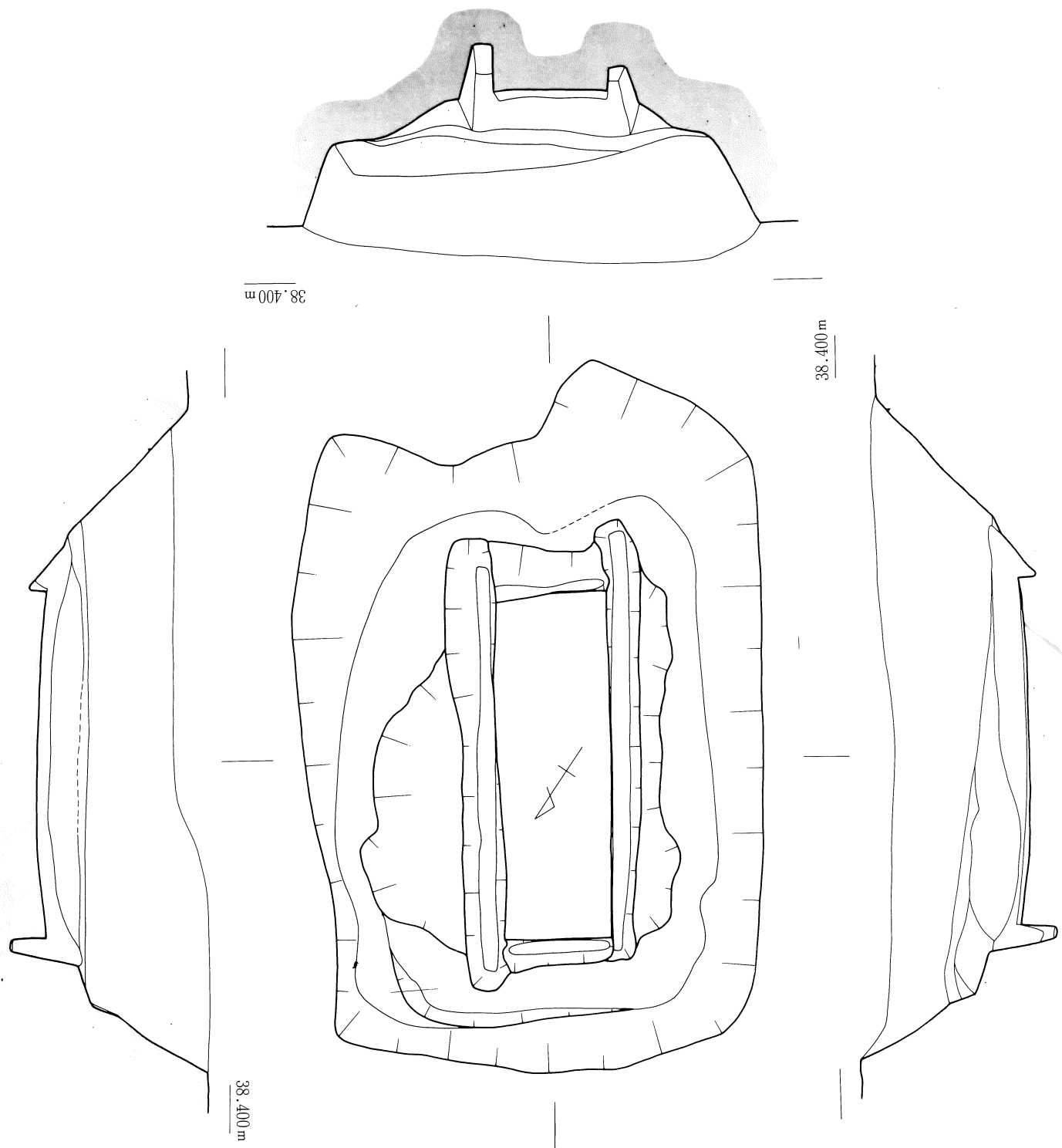
- Ⓐ 明茶色土(III層、IV層が混ざってきた層)。
- Ⓑ II層の黒色土を多く含むためか、暗い色調。
- Ⓒ 粘土(灰色)。
- Ⓓ ④と類似。
- Ⓔ ④の中に薄く朱の層がみられる。
- Ⓕ ④と類似。
- Ⓖ ④と類似。①と同様の層。
- Ⓗ ④⑤より若干暗い色調。
- Ⓘ 茶色土(Ⓙ)と類似するが暗い色調。
- Ⓚ IV層と同じ。
- Ⓛ ④に対応。
- Ⓜ 灰色粘土(Ⓒと同じ)。
- Ⓨ ④に類似(や、硬)。
- Ⓩ ④と対応。
- ⓐ ④と対応。
- ⓑ ④と対応。
- ⓓ ④と対応。
- ⓔ III層のみで埋めている。
- ⓕ ④に対応。



第7図 1号方形墳周溝土層図



第8图 1号方形墳1号主体部(箱式石棺墓)实测图(1/30)



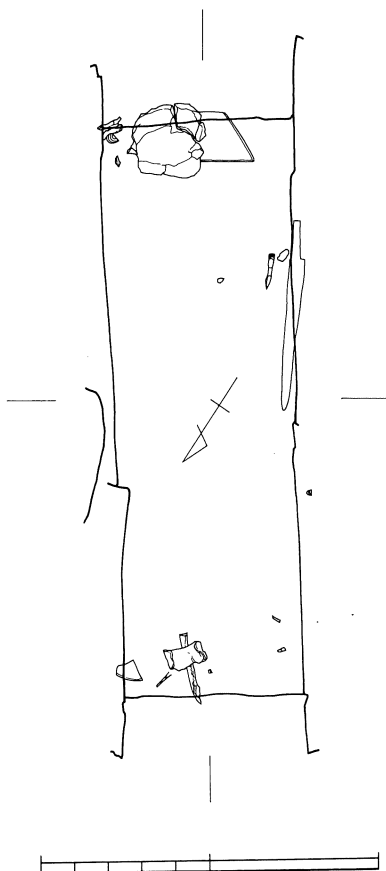
第9図 1号方形墳1号主体部(箱式石棺墓)掘り方実測図(1/30)

遺物出土状況（第10図）

この主体部は、前述のように全く攪乱を受けてなく、われわれが蓋石を開けた時内部は赤色顔料の鮮やかな朱色が目立った。

また、北側中央の側石上端に極小の堅櫛が置かれているのが印象的であった。小口部と側壁部との境はすべて白色粘土で目張りがなされていた。

頭部は、東小口壁との間にわずか 5 cm 弱の距離を有し、安山岩製の台形状をした割り石を置きその上に白色粘土で枕をつくっていた。これは小口壁の中央に接している。割り石と粘土には、間層はなく一工程でつくられたものと考えられる。頭部の北側に、北側壁にほぼ接した状態に並んで蕨手刀子 2 点、漆塗りのカンザシ様の櫛 1 点、堅櫛 1 点、西側で堅櫛 1 点がそれぞれ検出された。一方粘土枕の西側約 10 cm の所で、ガラス製管玉、水晶製勾玉、水晶製算盤玉・ガラス玉が検出されている。この玉類は、二群に分かれ分布している。また、中央やや東側の南側壁に接して鉄剣、その約 10 cm 南側で鹿角装刀子が切先を西にして並置されていた。西小口部には、小口壁から 20 cm



第10図 1号方形墳1号主体部遺物出土状態

の所で鉄鋤先 1 点と鉄鎌 1 点が重ね合った状態で、その南側 5 cm の所で堅櫛が 1 点検出された。また、この周辺には骨片が数点（頭骨？）散乱していた。以上の遺物の出土状態より、頭位の東側にする人骨が最初に埋葬され（これには、玉類・鉄器類が副葬される）、その後頭位を西側にする人骨が差向いに埋葬された可能性が大きいと考えられる。遺物の中では、鉄鎌の出土がなかったのが大きな特徴である。

遺物

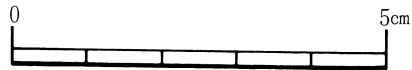
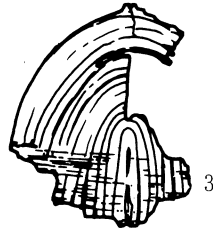
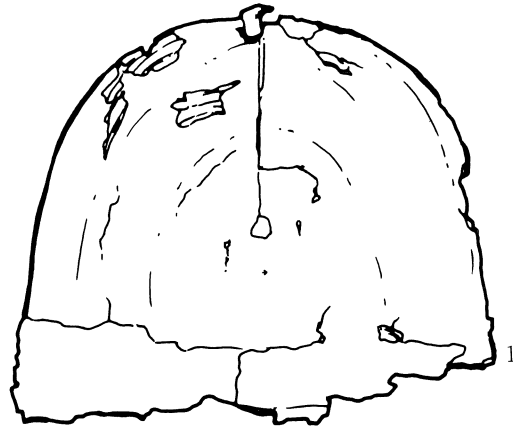
櫛（第9図） 棺内外より前述したように $4 + \alpha$ の櫛が出土したが、既に漆の被膜のみになったものや、小破片になったものばかりである。カンザシ様のものは漆の被膜のみであり取り上げ不能であったが、長さ 12~13 cm を測る。堅櫛は、大型のもの（第11図1）は 10 本前後の籤の先端側を歯にしていると考えられるが、歯の残る例はない。小型のもの（第11図4）は、7 本前後の籤を並べて U 字形に曲げている。このような極小のものが実用品であ

った可能性は疑わしい。

鉄器 棺内より出土した鉄器は、6点のみであったが、全て東位の人骨に副葬されたものと考えられ、頭部・胴部・足部にそれぞれ2本ずつ副葬されていた。

鉄剣(第12図1)

全長56.1cm、茎長12.2cm、身幅3cm、身厚さ0.5cm、茎幅約2.5~1.5cmのもので、茎には、2個の目釘穴を持つ。剣身は全体にやや先細りで、関部はやや鈍角に開いている。剣身には錆が部分的にしか見られないところから研ぎ減りしたものと思われ、切先は

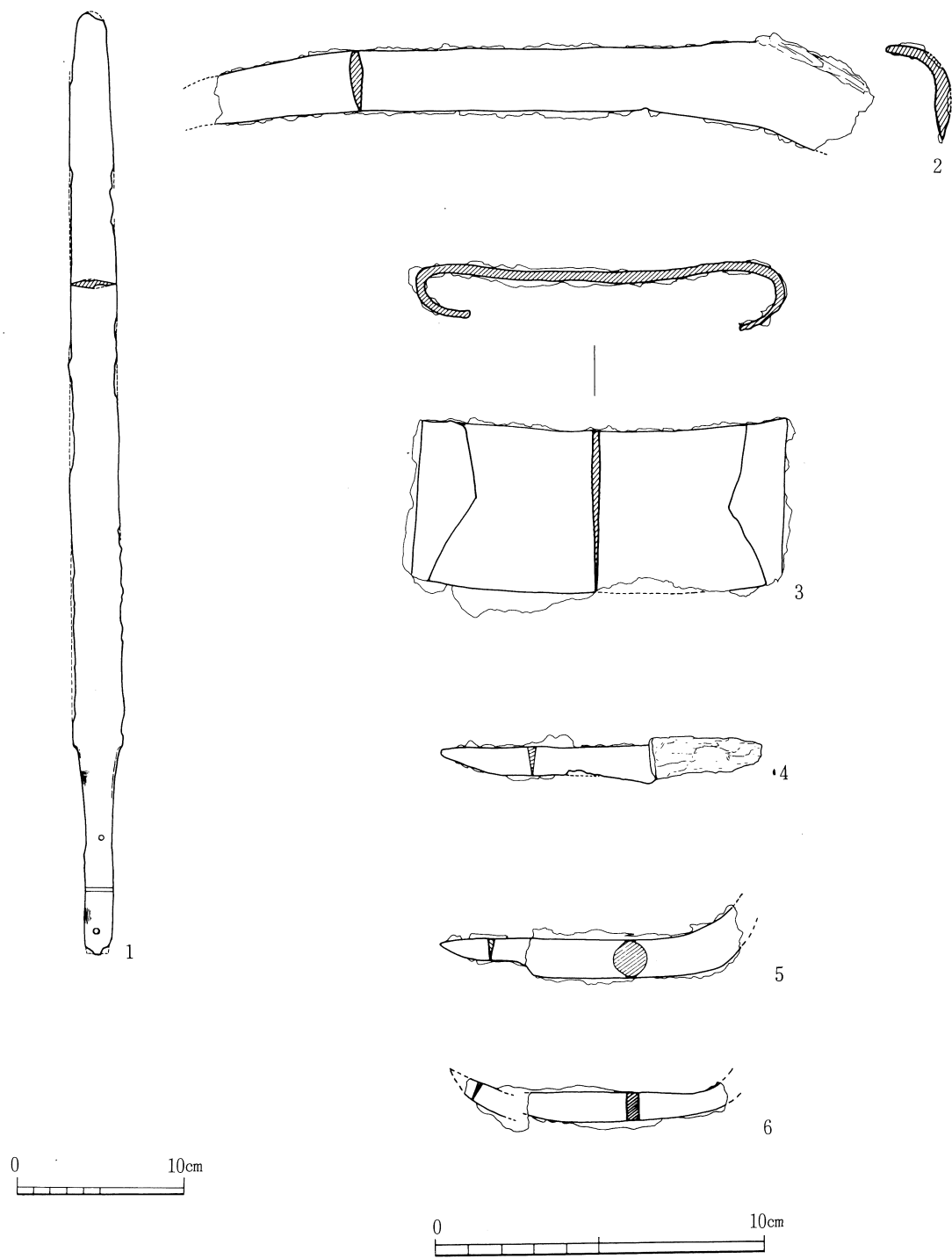


第11図 1号方形墳1号主体部出土櫛実測図(実大)

丸味を持つ。茎には、部分的に木柄の木質が残る。

鉄鎌(第12図2) 全長19.7cm、最大幅2.6cm、身厚0.5cmの中型鉄鎌である。刃部先端と基部を欠損する。刃部は、現状ではわずかに内湾するが、柄の部分の身幅から考えると研ぎ減りによるものであろう。木柄装着部は、上部を斜め方向に屈曲させて装着部としているのが大きな特徴である。柄装着部には木質などの付着物はない。

鉄鋤先(第12図3) 外形の長さ84. cm、刃部幅11.2cmの鉄鋤先で厚さ約0.2cmの鉄板の



第12図 1号方形墳1号主体部出土鉄器実測図

両端を曲げて袋部を作っている。袋部の内法は、幅1.1cm、厚さ1.1~1.4cmの大きさに割合丈夫な作りとなっている。刃部は使用によってわずかに片刃状となっている。袋部内には、木質等の付着物は残っていない。

鹿角装刀子（第12図4） 全長9.5cm、茎長3.2cm、身最大幅1.1cm、身厚さ0.25cmの大きさである。関部は刃に直角でなく、斜めに長い作りである。茎には、鹿角が装着されていたが、ほとんどが出土した状態時にはがれていた。

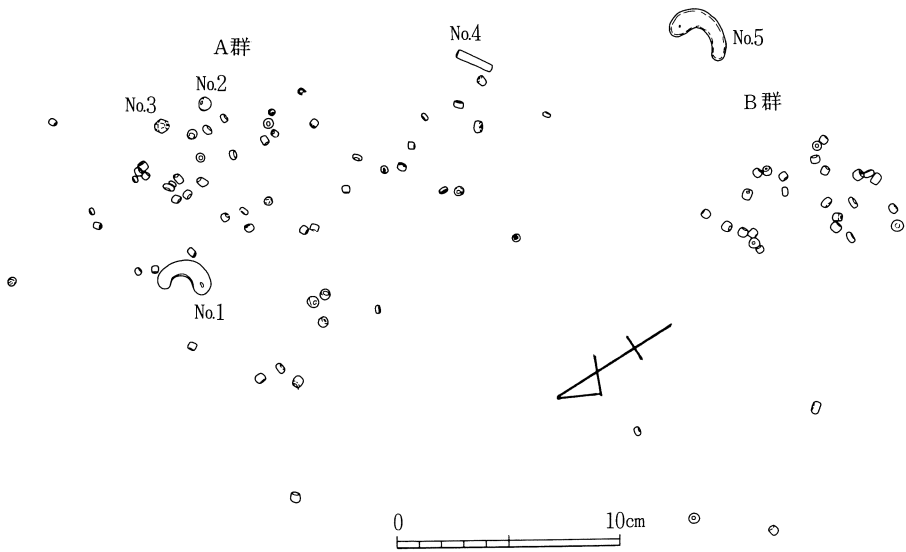
蕨手刀子（第12図5） 全長8.0cm、尾（柄尻）の部分は欠損する。刃部は長さ2.6cm、幅0.5cm、背の厚さ0.2cmと小型のものである。関の所から茎が膨れて断面は丸くなり尻（柄尻）は、上方にゆるく湾曲する。身と柄とは分離せず、铸造品かと推察される。本来は鹿角装のものであったと考えられる。柄の形態から蕨手刀子の一種と考えた。

勾玉（第14図1・2） 2点出土した。材質は水晶製のものである。2点ともに頭部がやや大きい。1は全長2.8cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmを測る。孔は片面から穿孔しており0.3cmと0.1cmを測る。2は全長が3.0cmとやや長い以外は全く同じである。

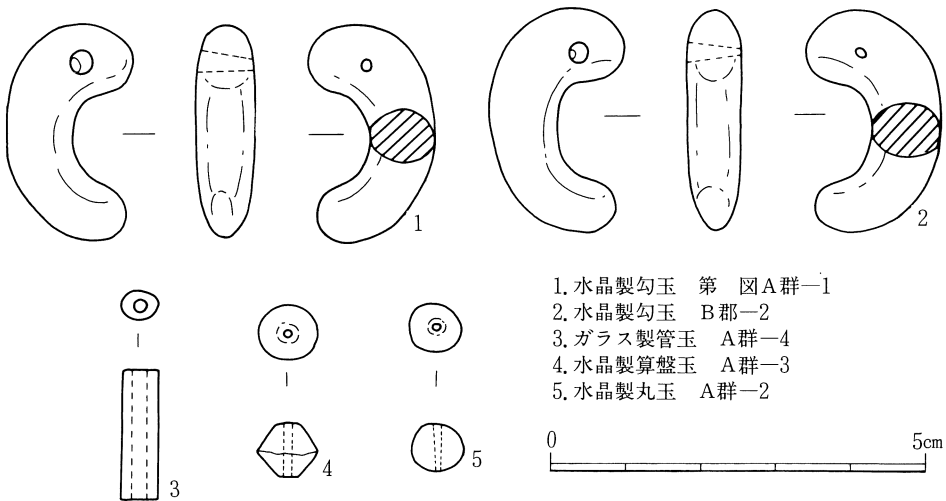
水晶製算盤玉・丸玉（第14図4・5） 1点ずつ出土した。算盤玉は長径0.75cm、短頸0.65cmを測る。両端を平らに仕上げたのち一方より穿孔する。丸玉は長径0.7cm、短径0.55cmを測る。穿孔技法は算盤玉と同じである。

ガラス製管玉（第14図3） 1点出土した。全長1.7cm、厚さ0.45cm、孔径0.2cmを測る。表面はきれいに研磨されている。色調はライトブルーを呈している。

ガラス製小玉（表1） 104点と破片約10点分出土した。径は0.7~0.3cm、孔径0.2~0.1であり、径は0.4~0.5位のものが最も多い。断面の形状および厚さはばらばらで斉一性がない。色は濃藍・ライトブルーに二大別される。



第13図 1号方形墳1号主体部玉類出土状態



- 1. 水晶製勾玉 第 図A群-1
- 2. 水晶製勾玉 B群-2
- 3. ガラス製管玉 A群-4
- 4. 水晶製算盤玉 A群-3
- 5. 水晶製丸玉 A群-2

第14図 1号方形墳1号主体部出土玉類実測図(実大)

表1 1号主体部出土玉類計測表

No.	種類	材質	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	径孔 (cm)	重量 (g)	備考
1号石棺A群	勾玉	水晶	黄土色がか った透明	2.85	0.9	0.3~0.15	4	片面穿孔
"	管玉	ガラス	青	1.7	4.5	0.2	0.5	"
"	算盤玉	水晶	透明	0.75	0.65	0.2~0.1	0.4	"
"	丸玉	"	"	0.7	0.55	0.15~0.1	0.4	"
"	小玉	ガラス	濃藍	0.6	0.4	0.25×0.15 の楕円	0.2	"
"	"	"	"	0.5	0.5	0.2×0.15 の楕円	0.2	"
"	"	"	"	0.5	0.5	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.35	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.55	0.45	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.55	0.5	0.15	0.2	"
"	"	"	"	0.55	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.45	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.35	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.6	0.25	0.15	0.15	"
"	"	"	青	0.4	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.1	0.15	"
"	"	"	"	0.45	0.45	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.4	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.35	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.35	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.35	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.3	0.15	0.1	"

No.	種類	材質	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
1号石棺A群	小玉	ガラス	青	0.4	0.3	0.15	0.1	片面穿孔
"	"	"	"	0.45	0.35	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.3	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.25	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.35	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.35	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.25	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.35	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.25	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.35	0.35	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.25	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.25	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.3	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.2	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.2	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.3	0.3	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.3	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.25	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.25	0.1	0.1	"

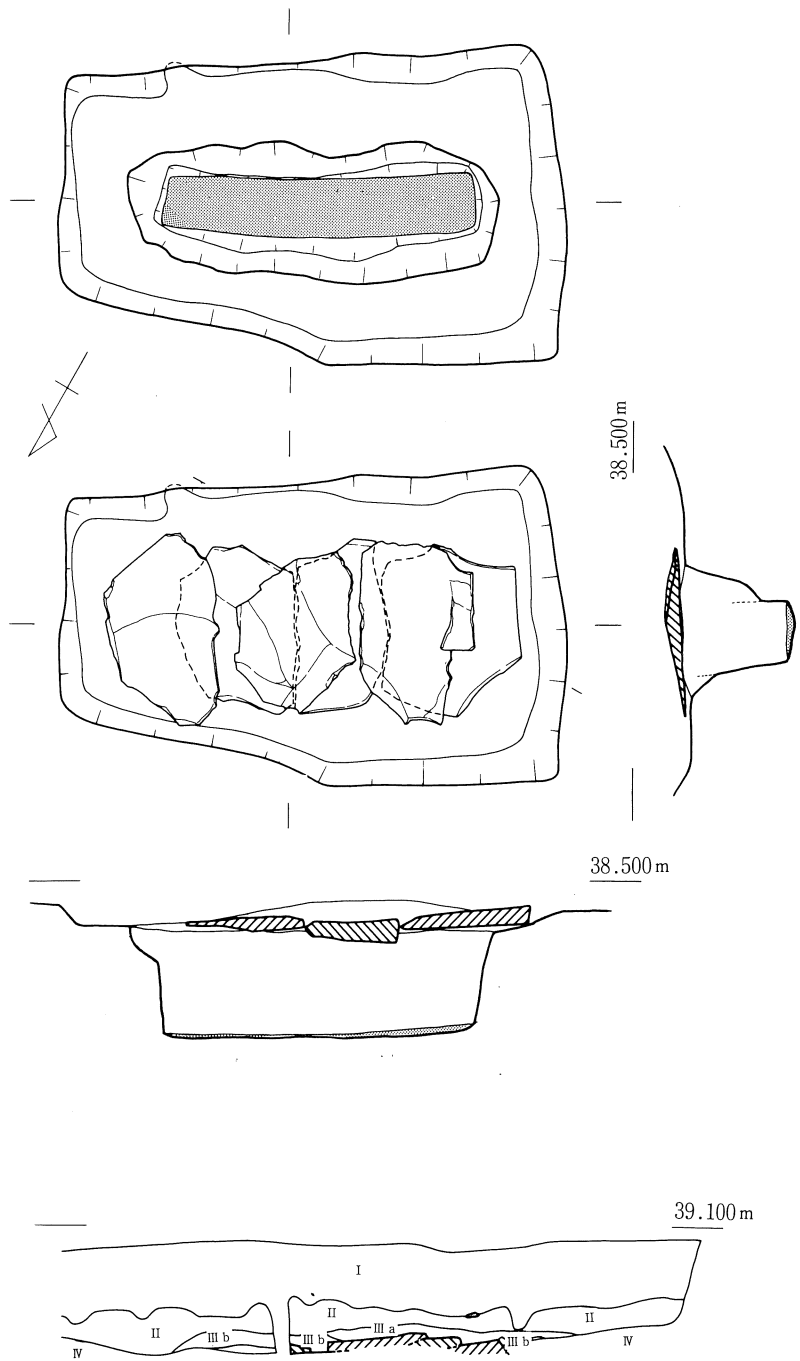
No.	種類	材質	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備備
1号石棺A群	小玉	ガラス	青	0.4	0.2	0.15	0.1	片面穿孔
"	"	"	"	0.4	0.25	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.35	0.2	0.1	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.2	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.2	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.2	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.4	0.2	0.1	0.1	"
1号石棺B群	勾玉	水晶	透明	2.95	1.2	0.25~0.1	4.35	片面穿孔
"	小玉	ガラス	濃藍	0.7	0.55	0.25	0.3	"
"	"	"	"	0.5	0.5	0.15	0.2	"
"	"	"	"	0.5	0.5	0.15	0.2	"
"	"	"	"	0.6	0.3	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.5	0.2	0.15	少し欠損
"	"	"	"	0.55	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.55	0.4	0.15	0.2	"
"	"	"	"	0.55	0.4	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.55	0.45	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.6	0.4	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.55	0.35	0.2	0.2	"
"	"	"	"	0.55	0.35	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.55	0.35	0.2	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.35	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.3	0.15	0.15	"
"	"	"	"	0.5	0.35	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.2	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.35	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.5	0.4	0.15	0.1	"
"	"	"	"	0.45	0.35	0.15	0.1	"

No.	種類	材質	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
1号石棺A群	小玉	ガラス	濃藍	0.6	0.3	0.2	0.1	両面穿孔
〃	〃	〃	〃	0.6	0.3	0.2	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.5	0.3	0.25	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.5	0.3	0.15	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.5	0.25	0.25	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.4	0.25	0.15	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.35	0.2	0.1	0.1	〃
〃	〃	〃	青	0.45	0.35	0.15	0.1	〃
1号石棺内	小玉	ガラス	濃藍	0.55	0.5	0.1	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.5	0.3	0.15	0.1	〃
〃	〃	〃	青	0.45	0.35	0.1	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.4	0.30	0.15	0.1	〃
〃	〃	〃	〃	0.35	2.5	0.1	0.1	〃

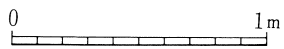
2号主体部 (第15図)

1号主体の西側約 1.5m の位置に主軸 N-115°-E にして構築されている。石蓋土墳墓は、検出時において、若干残っていた墳丘を切り込んで造られており、墓壇は二段掘りである。上部は、削平を受けており、僅かに立ち上がりを検出したが墓壇規模は不明である。蓋石は、安山岩製の板石を最初に 3 枚土壇に覆いさらに残り 3 枚でその間隙を覆う。また、板石との間は地山土で目張りしている。蓋石は頭位方向より重ねている蓋石内面に赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の内部の構造は、床面で内法 1.21m、幅が北側で 0.21m、南側で 0.19m、深さ 0.41m を測る小形の長楕円形に近いプランを呈し、床面はほぼ水平を保つ。この状態から南西側頭位の小児用の石蓋土墳墓と推定される。床面には全体に赤色顔料が、塗られていた。

副葬品などの出土物は、見られない。



- I層 暗褐～黒褐色腐植土：や、砂質気味。軟質。木、草根、炭化物含む。1 cm 以下の小円礫。
 - II層 暗褐～黒褐色腐植土：砂質に富む。硬くしまっていて、2～3mm以下の砂粒を多く含む。
 - III a ローム小ブロック含む黒褐色土：上位土層（I～II）によるカク乱にIII b層が崩壊、軟化したもの。炭化物を多く含む。
 - III b 褐色土を含む硬質土層：ロームブロック主体。炭化物を少量混える。
 - IV層 黄褐色ローム質土層（軟質）：上位層（II）とは明瞭な不整合関係を有し、上面粘質の弱い砂質気味の性状を示す。
- ※ III a、III bとも石椁埋土。III層のロームブロックは赤味が強い。IV層中位以下の堆積土の人為2次堆積。



第15図 1号方形墳 2号主体部(石蓋土墳墓)実測図 (1/30)

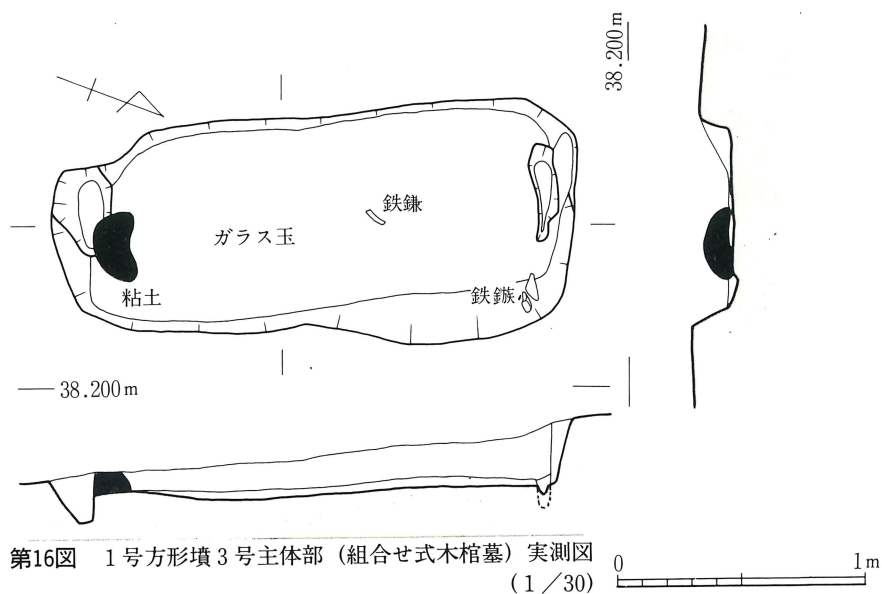
3号主体部（第16図）

1号主体の東北側約5mに位置し、主軸はN-20°Wを測る。組合せ式木棺墓は、旧地表の黒色土を切り込んで作られており、東側斜面部に位置しているため、上部は東側になるほど削平されている。

墓壙は直接木棺を組み立てる壙を掘り込む一段掘込みのもので、内法は、床面で長さ1.7m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。床面には木口板の掘込がある。床面は中央東側がやや高く、東木口溝に接するように高さ約10cmの白色粘土塊で枕を作り出しているところから、東側頭位と考えられる。

遺物出土状況

この主体部は前述のように若干の攪乱を受けていたが、頭部の粘土塊の西側10cmの所でガラス小玉が10点床面に張り付いた状態で出土したところから、首飾と考えられる。また、ほぼ中央で鉄鎌が、北側壁と西小口のコーナー付近で有茎鎌の茎部が、それぞれ床面より5cm～15cm浮いた状態で検出された。出土状態から、鉄器は棺外副葬の可能性もある。



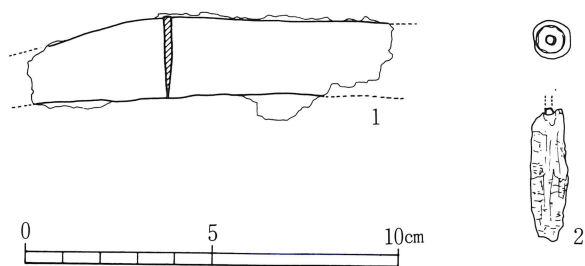
遺物（第17図・表2）

鉄鎌 刃部先端と基部がそれぞれ欠損するが、全長9.6cm、最大幅2.1cmのやや小型のものである。刃部は、現状ではわずかに内湾するが、研ぎ減りによるものであろう。

鉄鎌 有茎鎌の茎部片と考えられる。全長3.0cm断面は0.6cm×0.6cmの隅丸方形を呈する。木質が全体に錆着し桜皮が巻かれている。

ガラス玉 径0.45～0.55cm、厚さ0.4～0.2cm、孔径0.1cm前後を測る。ガラス製小玉である。色調は、コバルトブルーを呈している。切断面である孔の周辺は研磨して平坦面をつくっている。一連の糸で通すと約1cmになる。

（村上）



第17図 1号方形墳3号主体部出土鉄器実測図（1/2）

表2 3号主体部出土玉類計測表

No.	種類	材質	色調	長径 (cm)	短径 (cm)	径孔 (cm)	重量 (g)	備考
3号木棺内	小玉	ガラス	青	0.5	0.45	0.2	0.15	
"	"	"	"	0.5	0.45	0.15	0.15	
"	"	"	"	0.5	0.45	0.15	0.15	
"	"	"	"	0.5	0.45	0.1	0.1	
"	"	"	"	0.55	0.3	0.2	0.1	
"	"	"	"	0.45	0.4	0.1	0.1	
"	"	"	"	0.45	0.4	0.1	0.1	
"	"	"	"	0.5	0.52	0.15	0.1	
"	"	"	"	0.45	0.25	0.15	0.1	
"	"	"	"	0.45	0.2	0.15	0.1	

2) 周溝内出土遺物 (図18~25、表3・4)

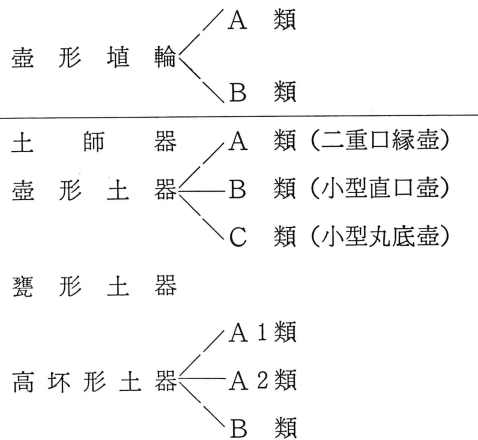
勘助野地1号方形墳の周溝内からは多数の土器を中心とする遺物が検出されている。明らかな前時代からの遺物混入を除いて、出土した遺物を大別すると、方形墳に供献された土器類と、石棺製作時の石器・石材類となる。

出土状況等を詳述する前に、出土した土器の分類とその特徴にふれておきたい。

土 器

出土土器の分類 (第18図)

土器の分類は、原則として形態上の特徴にもとずいておこなった。以下、器種別に各分類を抽出すると以下ようになる。壺形埴輪に認定したものは胴部が長胴化し、底部は平底で焼成前穿孔をおこない、丹塗りを有する一群の壺形土器がその形態上の特性から土師器と分離した。



となる。以下の記述では、壺形埴輪以外の土器を土師器と総称し、土師器類は壺・甕・高坏と略称する。

これらの土器群は、後述する出土状態から推して勘助野地1号方形墳築造一第1主体中心被葬者埋葬時一に一括して供献・樹立された土器群であると推定され、葬送儀礼に際して使用された土器の構成を知る上で貴重な資料であると考えられる。

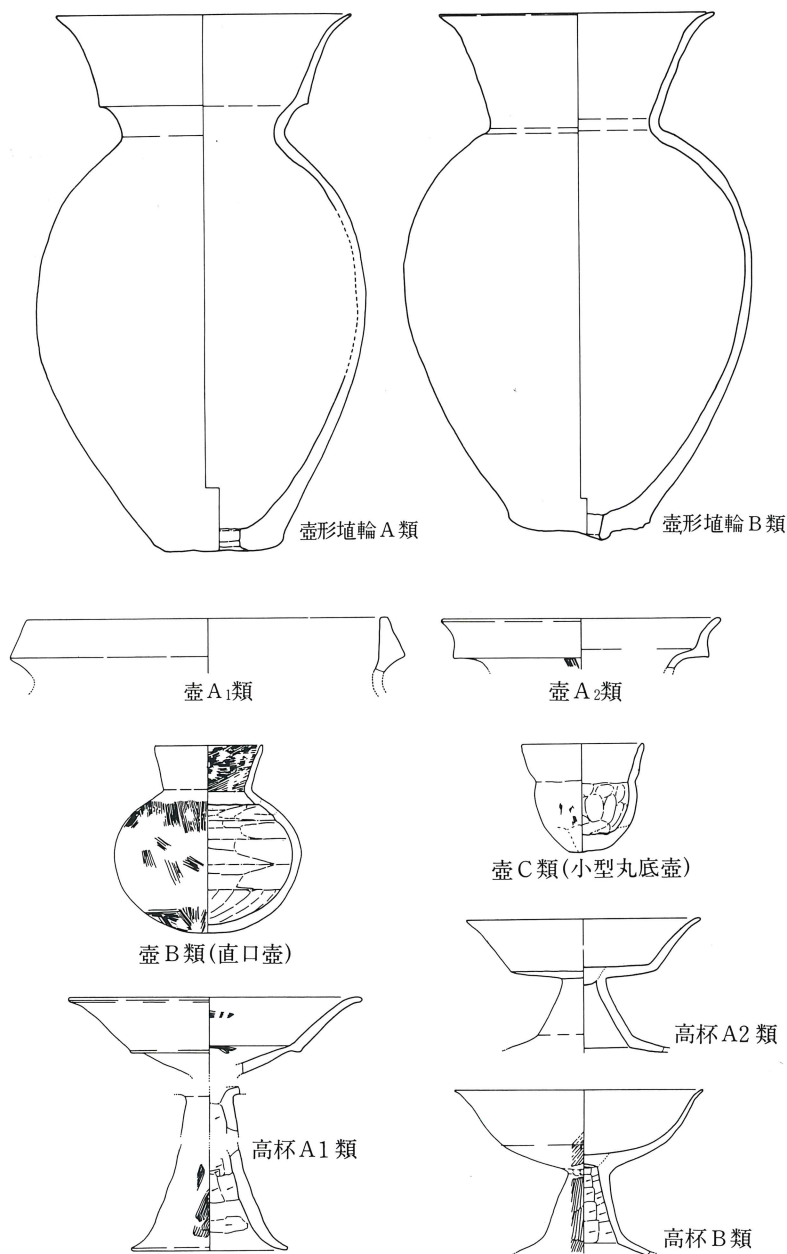
壺形埴輪 (第20~23図)

一号方形墳の周溝内から最も多量に出土した土器である。口縁部の形態により二種類に分類できる。頸部を丸く外反させ、その競部に鋭い稜をつけ、口縁を次第に外傾させつつ薄く閉じる二重口縁形態をとる壺形埴輪A類(1~12)。頸部は角度をもって上方に屈曲させて外傾し、

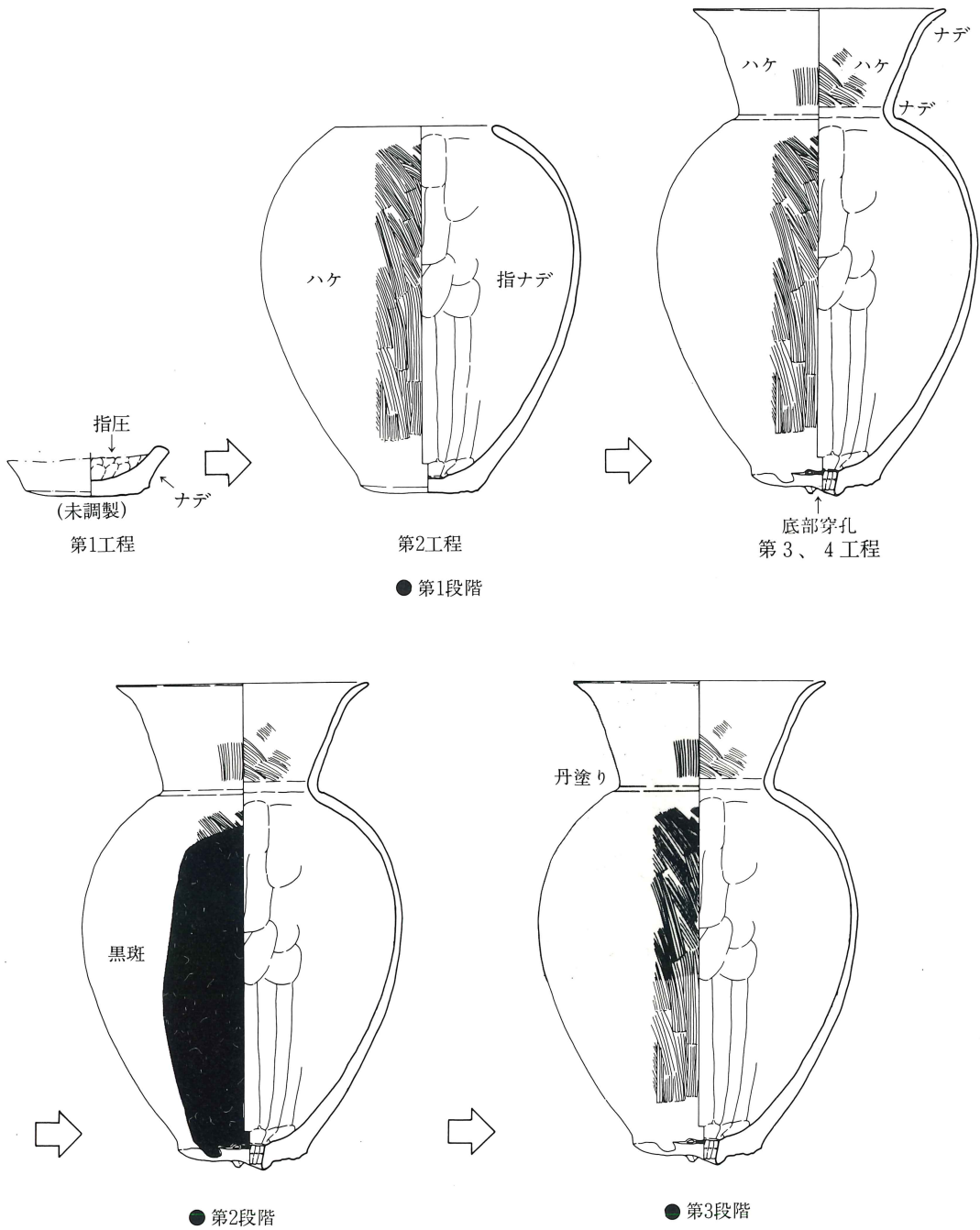
口縁端部をさらに外反させて閉じる直口形態をB類とする (13・14)。

製作技法 (第19図) A・B類とも口縁部形態を除く製作技法は共通している。まず胎土は、土師器を含めていえることだが、長石・角閃石・軟質白色粒子を含む在地産と考えられる胎土を用いている。まずその胎土を使った粘土板をすえ、内面に指頭圧痕を残す手ずくね手法で底部をつくり、底部外面は凸凹を残したまま未調整で、平底のまま残す。胴部につづく外面は

丁寧なナデ調整をほどこす (第1工程)。次にその底部に胴部をつぎたして、胴部外面をハケ調整でととのえる。このハケ調整は第1工程のナデ調整の上に重なる。また、このハケ調整は下から上に向かい、胴部下半ではタテ方向、胴部上半に向かうにつれて左上がりの斜方向になる。これは胴部外面ハケ調整時に右利きの製作者が、地上に直立させた製作途中の埴輪に対して斜め上方からかき上げるかたちでハケ調整を行ったためと推



第18図 勸助野地遺跡出土土器分類図



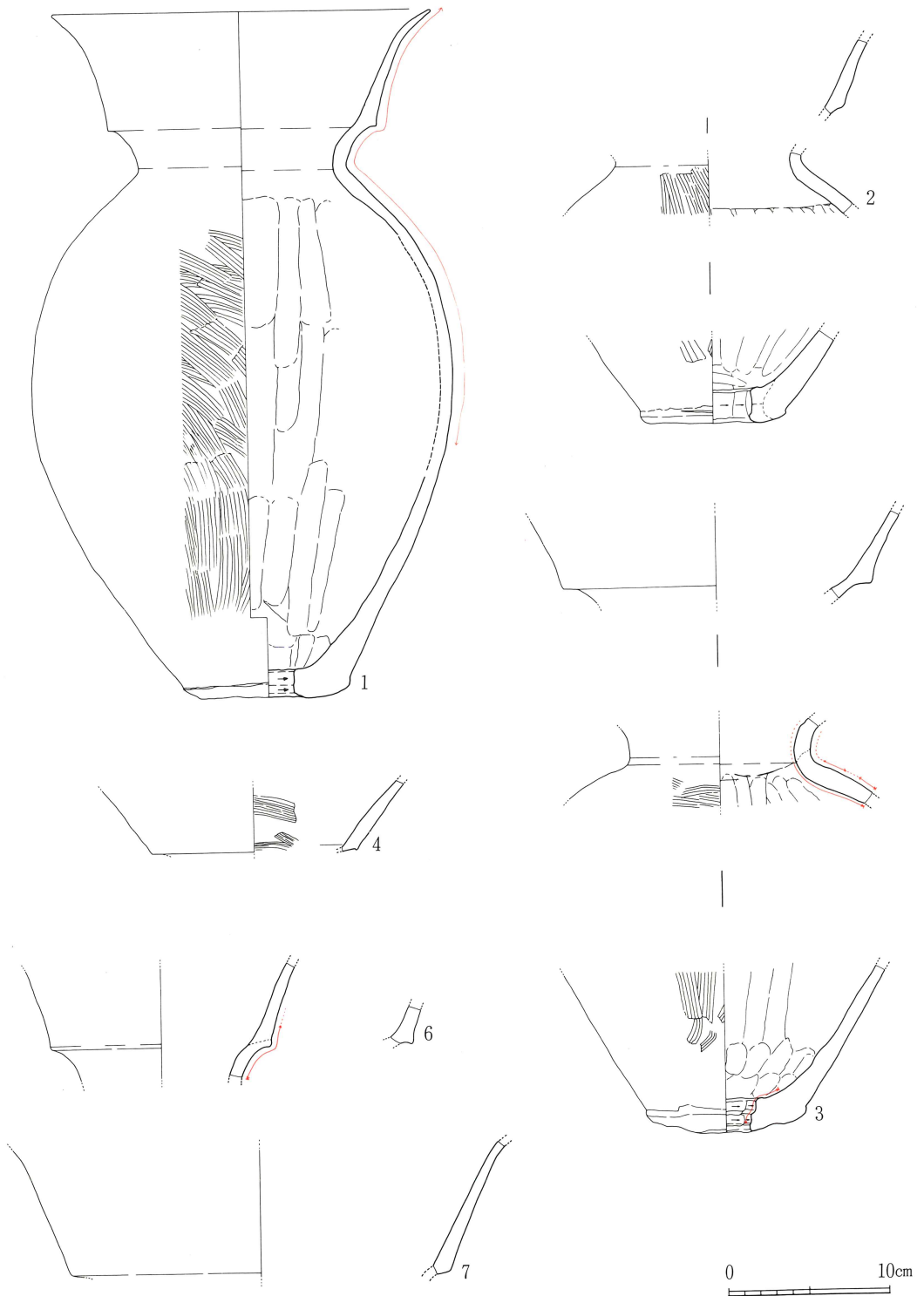
第19図 壺形埴輪製作工程復元図

測される。胴部を観察できた例ではこの点はすべて共通している。胴部内面、特に下半には、タテ方向にケズリをおこなったような痕跡があるが、ヘラケズリのような工具による鋭利な砂粒の動きはなく、指頭による強いナデ調整と考えられ「指ナデ」と仮称する。この指ナデは底部内面の指頭圧痕の上に重なって、頸部内面下部におよび、口縁部成形時の頸部内面ヨコナデ調整によって消される部分までつづく（第2工程）。またこの胴部調整の際に器体を傾けるらしく、底部の端が丸くつぶれたり、底部外側の粘土が、周囲にはみ出す例がほとんどである。胴部に、頸部から口縁部につづく部分をつぎたす。これは頸部内面に粘土帯の接合痕を残す例（3・16・18・20）から推定される。この時胴部内面上部をもう一度指ナデする例（16・20）があり接合痕を一部消している。この口縁部製作に際して、A・B類2種類の形態をつくりわける。調整は第2工程と同じく左上がりのハケ調整をおこなったのち、ヨコナデ調整で仕上げる。口縁端部と頸部についてはとくに丁寧に仕上げる。しかし口縁部にハケ調整痕を残す例がほとんどで、土師器類に比べると手を抜いているといえる。これは最終段階で丹塗りをして目立たなくなること意識した意図的な手抜きであろう（第3工程）。第4工程として底部中央に穿孔をおこなう。穿孔の際の粘土のはみ出しが、内側にある例（21・24・26・27・29）と外側にある例（14・28）とがあり、内と外のどちらから穿孔したかは判然としない。またこの工程は穿孔時の粘土のはみ出しが外面にある例（14・28）はその後の工程で器体を直立させたために押しつぶされた痕跡はなく、製作の最終工程でおこなわれたと考えられる。孔の大きさは径2～5cmと不揃いで、平面形も、円形から多角形のものまで不規則で第1～3工程までの技法の統一性と比較してあまりにも変化が大きい（図26）。

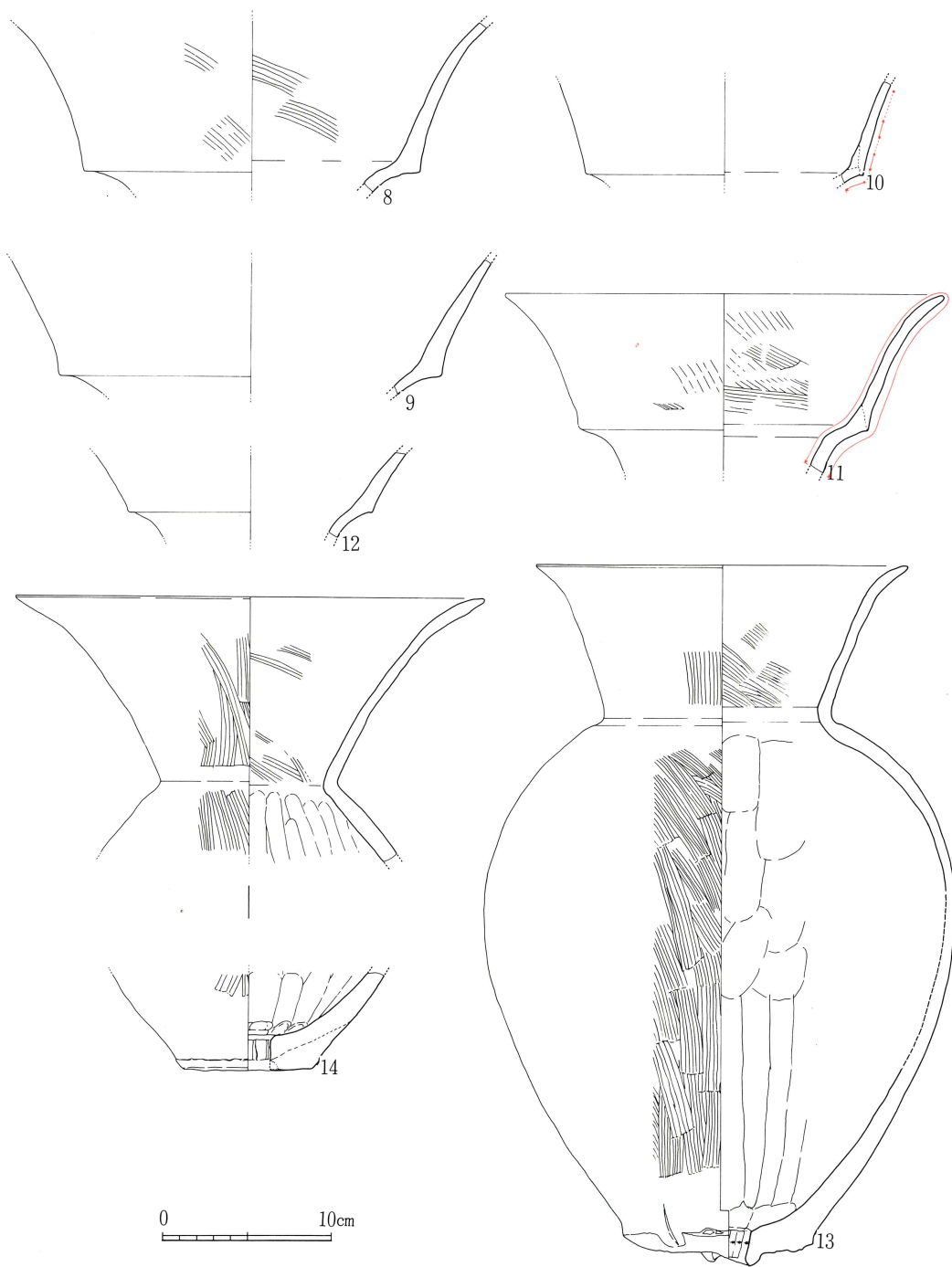
以上の第1～4工程を壺形埴輪製作の第1段階だとすれば、第2段階は焼成である。焼き上がりは黄褐色から橙色・明茶褐色を呈す。また胴部外面に黒斑をもつ例が多い（1・3・13・17・25・26・28）。

焼成の後、丹塗りをおこなう。観察できた例では、口縁外面から胴部外面上部3分の2ほどまで及ぶものがみられ（1）、胴部下部や底部には丹塗りはない。丹塗りが下半に及ばない点は、底部外面が未調整のまま焼成される点と考えあわせると、墳丘上に胴部下半を埋置することを前提として製作された故であると理解される（第3段階）。この点からもこの壺形土器が埴輪として仮器化していたことを示している。

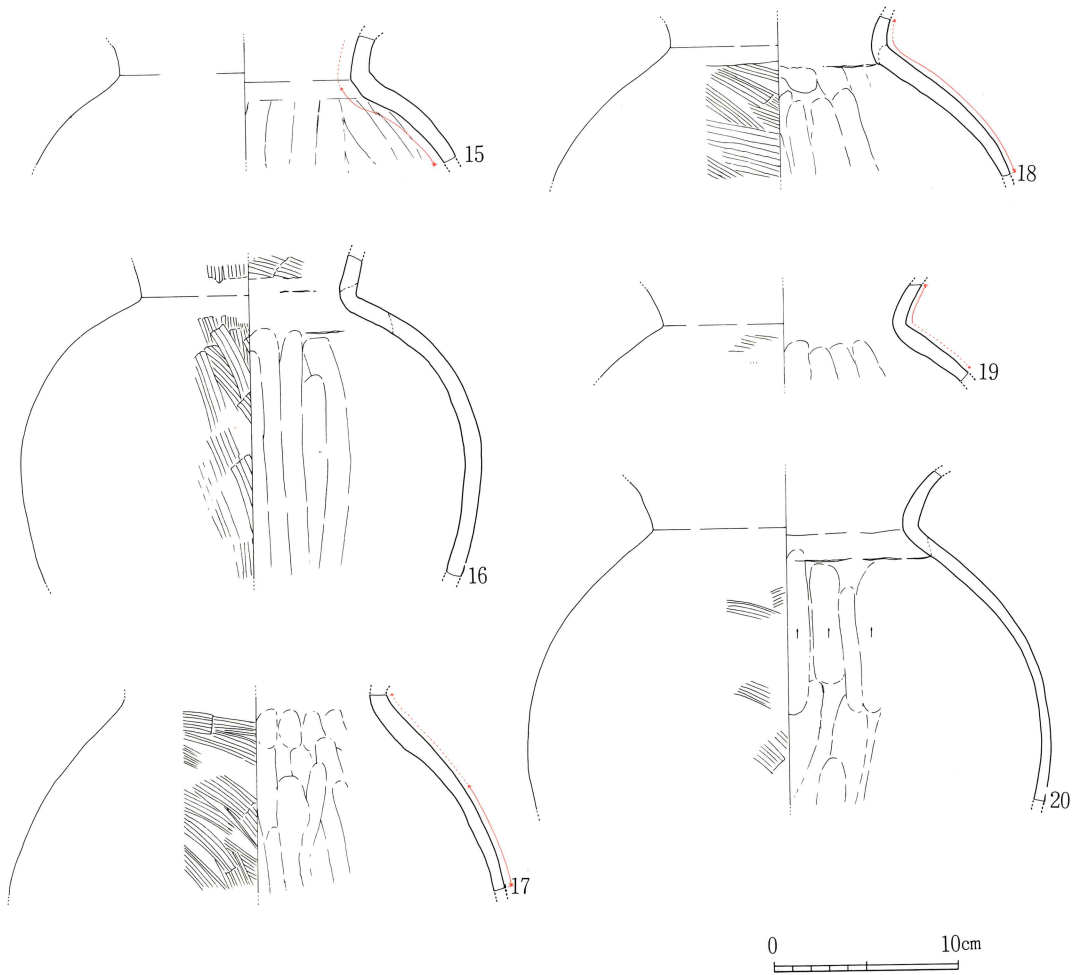
以上の工程をまとめたのが第19図である。



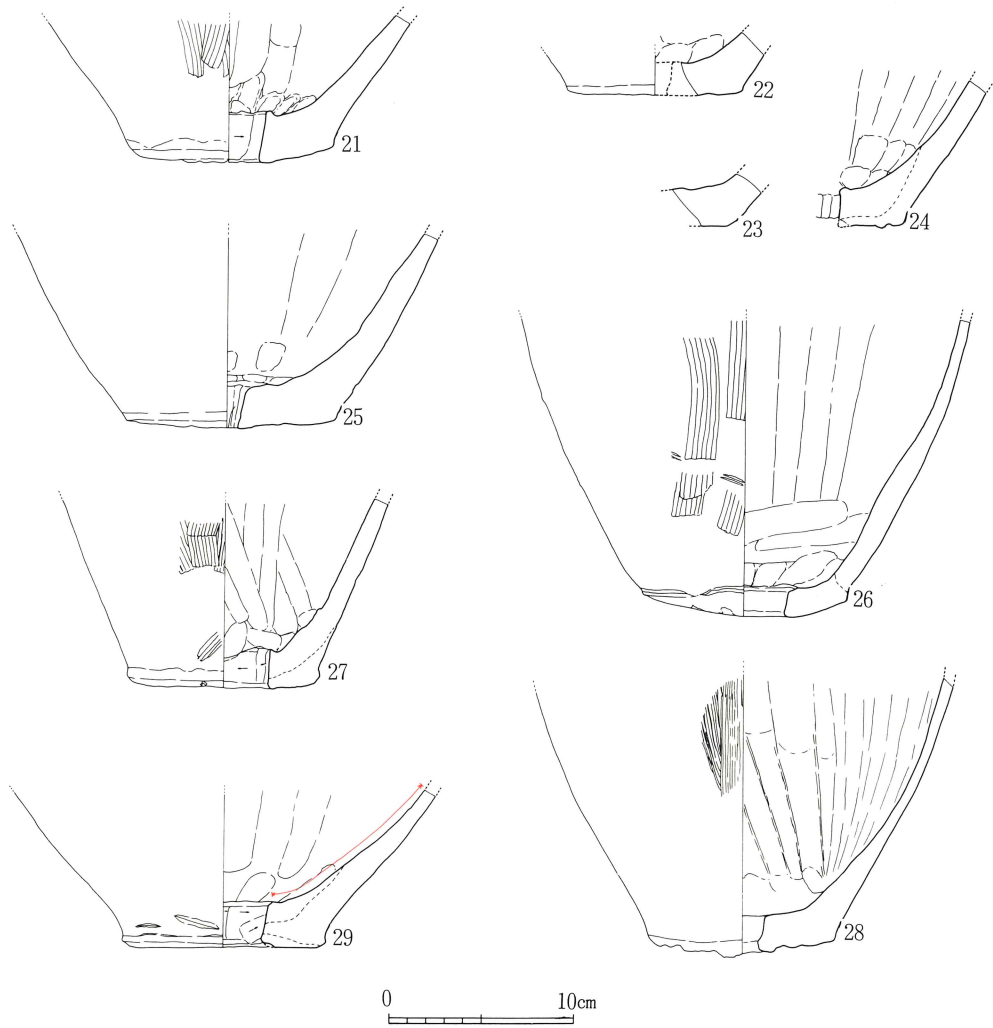
第20図 1号方形埴周溝内出土遺物(1)壺形埴輪実測図



第21图 1号方形埴周溝内出土遺物(2)壺形埴輪実測図



第22図 | 1号方形墳周溝内出土遺物(3) 壺形埴輪頸部実測図



第23图 1号方形埴周溝内出土遺物(4)壺形埴輪底部実測図

壺形土器（第24図30～40）

壺形土器A類（二重口縁壺）、B類（小型直口壺）、C類（小型丸底壺）の3形態に分類できる。

A類は2個体しかなく、口縁の形態が異なっており、断面が三角形状となる**30**をA1類、そうでない**31**をA2類とした。**31**は胎土と焼成の具合が、ほかの土師器よりは壺形埴輪に似ている。

B類は小型直口壺で口径8～9cm、器高10～15cm程の小型のものである。形態的には偏球形の胴部に、外傾しながら直線的に伸びる口縁を有する点で共通する。製作技法としては第1工程として、胴部を成形で、外面は細かいハケ目、内面はヨコ方向のヘラケズリで調整し、そのあと外面のハケをナデ消す。第2工程として口縁部をつぎたし、ハケ調整のあとヨコナデで仕上げる。その内面には胴部上部に粘土接合痕を残す。**33～38**はこの技法であるが**39**は内面もナデている。この技法に対して、**32**は内面を壺形埴輪と円じタテ方向の指ナデで調整しており、口縁から外面は丁寧なナデ仕上げを行ないハケ目の痕跡を残さない。胎土・色調も壺形埴輪と共通しており、壺形埴輪の製作者が作ったものと考えられる。

C類は小型丸底壺で**40**の一個体のみである。口径が胴部最大径より大きく、口縁が器高の3分の1を占める。器壁が全体に厚く、胴部内面は指圧痕を残したまま未調整で底部内面のみを荒くナデつける。口縁部はヨコナデで仕上げるが胴部外面は荒い不定方向のナデで雑に仕上げている。胎土は砂粒の少ない良質の粘土を使用している。

甕形土器（第24図41）

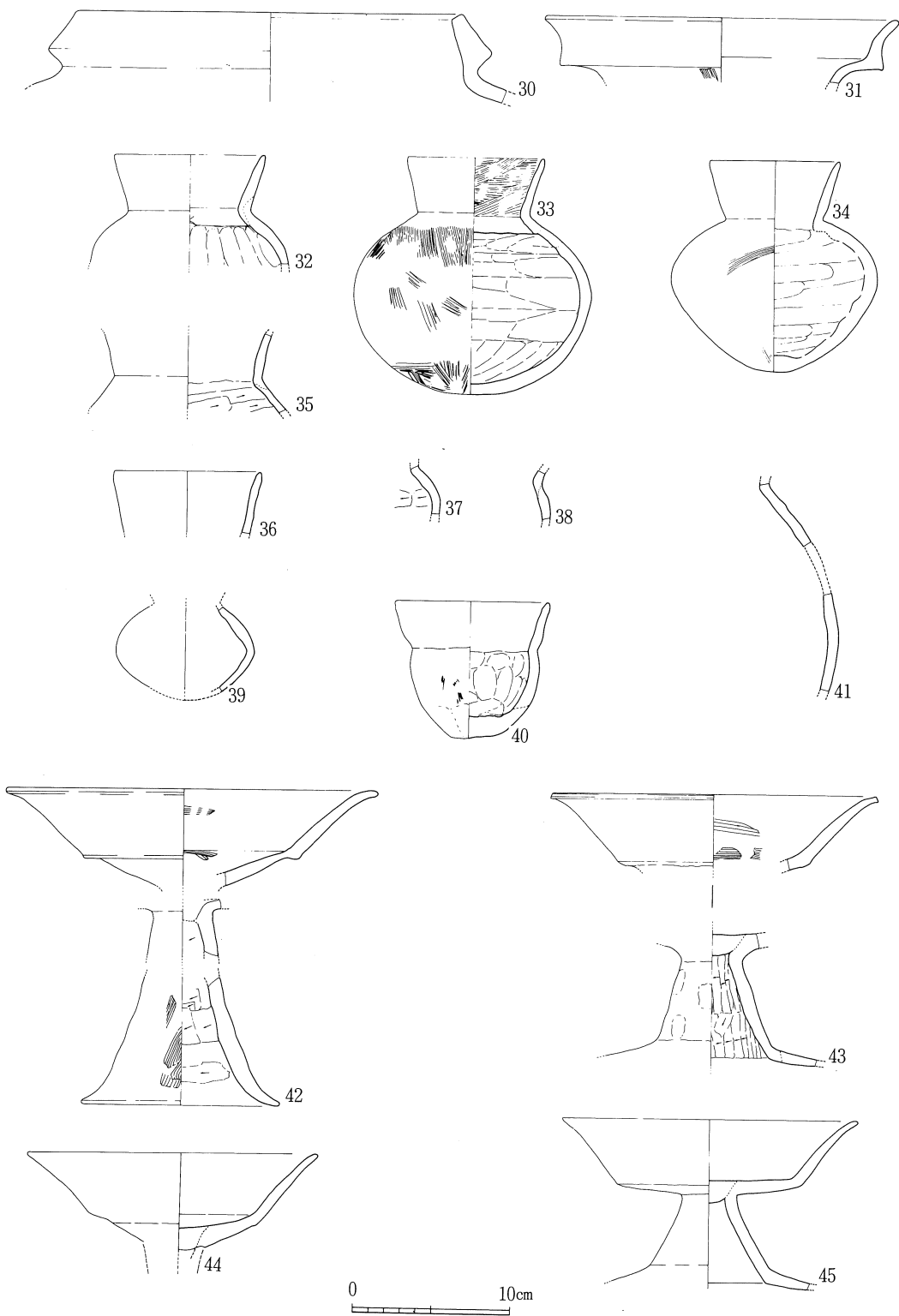
甕は器形の判る例はないが、外面をタテ方向のハケ目、内面をヨコ方向のヘラケズリで調整している。胎土は灰色がかったものが多く、**41**は内面にススが付着している。

高坏形土器（第24図42～45、第25図）

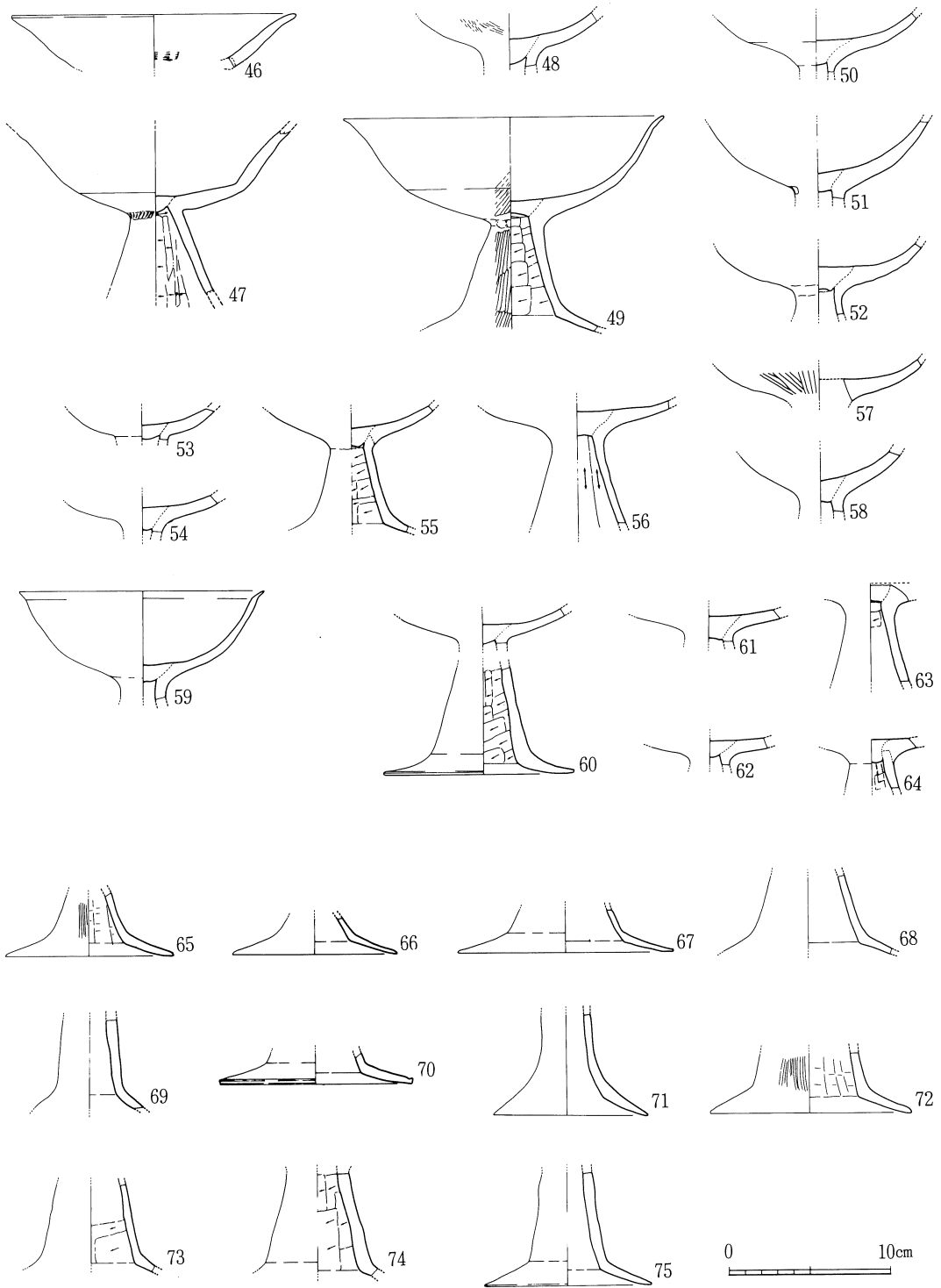
高坏は坏部に明確な稜をもって屈曲するA類と、坏部の稜が不明瞭で丸く内湾して立ち上がるB類に分けられ、さらにA類は脚部が八字状に開くA1類と、脚裾部が外に屈曲して内面に稜をもつ通常の形態のA2類に分かれる。製作技法はともに脚部から成形し、円盤充てんの後、脚内面をヘラケズリ調整する。外面はハケ調整ののちナデ仕上げを行う。**49**のようにさらに脚部外面にタテ方向のミガキを行う場合もある。

このうちA1類は**42**1個体だが、坏部の稜が下にたれるようなつくりで、壺形埴輪A類に似ており、胎土・色調からも、ほかの土師器とは異なって壺形埴輪に近似している。脚部が稜をもたず八字状に開く形態もこの個体のみであり、壺形埴輪製作者が作ったものと考えられる。

以上、形態上の特徴から土器を分類してきたが、次に土器群の性格をいくつかの観点から検討してみる。



第24图 1号方形填周沟内出土遗物(5)壶·高坏实测图



第25図 1号方形墳周溝内出土遺物(6)高坏実測図

器種構成と個体数

まず器種別の個体数を数えてみよう。壺形埴輪が完形に接合できたのは2個体にすぎないが、部位別に数えてみると、口縁部は14（A類12・B類2）、頸部11、底部14となる。遺構の保存状況からみて消失はあまり考えられないから、壺形埴輪は $14+\alpha$ 個体でA類は12個体以上、B類は2個体以上となり、A類が圧倒的に多い。

壺はA 1類、A 2類各々1個体のみ。B類は8個体、C類は1個体のみ。

甕は図示したのは1点のみだが、破片をみると3個体分存在する。

高坏はA 1類は1個体、A 2類は坏部を数えると5、B類は13。A 2類とB類に共通する脚部を数えると、16、坏脚接合部を数えると、21となり、全体で高坏は22個体以上、そのうち、A 1類は1個体、A 2類は5個体以上、B類は13個体以上という内訳になる。

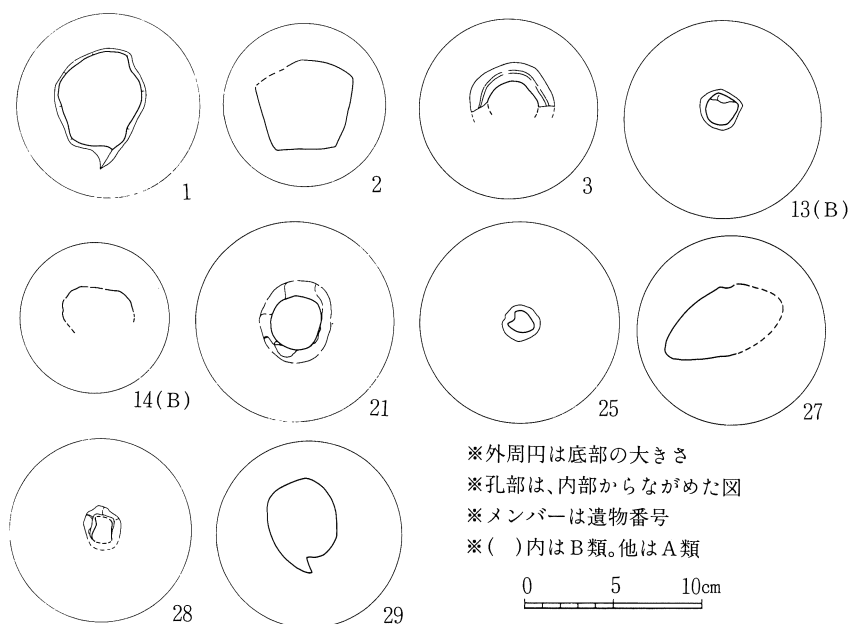
土師器の器種構成で特徴的なことは甕と比較して直口壺と高坏の多さであろう。

また、一辺20m足らずの方形周溝墓に対して壺形埴輪 $14+\alpha$ 個という数は、この古墳の規模に比して格別であり、被葬者の特異な性格を示している。

2系統の製作者

土器の分類と製作技法にふれた際にすでにふれたが、製作手法と胎土・焼成の特徴から大きく2つに分類が可能である。I群は、長石・角閃石を多量に含む胎土を用いて明るい焼き上がりを示す壺形埴輪A・B類と、壺A 2類（31）、壺B 1類の32、高坏A 1類（42）である。32・42は形態・製作技法からも、壺形埴輪製作者の作の可能性が高い。II群はI群以外の土師器である。II群の土師器は在地の日常土器の伝統の中でとえられるのに対して、I群の土器はタテ方向の「指ナデ」で土器の内面を調整するという特徴的な技法をもっており、製作者が異なっていると考えられる。しかし胎土は長石・角閃石を含む点で共通しており、埋葬儀礼に伴う非日常的な土器を製作するため、従来の日常的な土師器供給ルートによるII群の土器とは別に、I群土器の製作者に依頼して、地元で、壺形粘輪と二重口縁壺・直口壺・高坏の一セットの土器を焼かせたという推定が可能である。この製作者が古墳营造主体といかなる関係のもとで土器づくりを行なったかはわからないが、古墳营造主体が勸助野地1号方形墳で埋葬儀礼をとりおこなうに際して、2つの異なる土器供給ルートを利用したことは確実である。

そして、I群の壺形埴輪製作者は内面を指ナデ仕上げをする技法からみて、普通円筒埴輪などを製作した埴輪製作工人であった可能性が高く、その系譜を究明することが次の課題であろう。



第26図 壺形埴輪 底部穿孔各種

壺形埴輪の底部焼成前穿孔について

製作技法にふれた際に底部焼成前穿孔のバラエティを指摘したが、その意味について考えてみたい。第26図のように穿孔の形態は大まかにみて小さなもの(13・25・28)と大きなものに分けられ、大きなものは、円形(14・21)、多角形(2・3)、長円形(27)、ケズリがくいちがうラフなもの(1・29)に分けられるがこのように変化に富む点が重要である。この変化が、A・B類の差によるものではないこと明らかだが、壺形埴輪の大きさによるちがいに起因するものでもない。第26図のように底径が比較的揃っていること、底径の大小に穿孔の大小が比例しないことでも明らかで、観察表の復元数値をみても、壺形埴輪は、1・13・の大きさの中心にほぼ同じような大きさにつくられたと考えられる。

そして何よりも指摘したいことは、この第1段階第4工程のみが、ほかの工程の統一性に比べて、際だって不規則な点にある。工人の全く、意識的な手抜きと考えない限り穿孔が同一工人あるいは共通した製作技術を保有した同一工人集団によって行われたと考えがたいほどのものである。また、壺形埴輪の底部は墳丘に樹立された時点では土中に埋没しており、その形態を目にすることはない。したがって穿孔後の形態には重要な意味はなく、穿孔するという行為そのものに意味があったと考えられる。すなわち、底部穿孔は埴輪製作の一工程であると同時に、葬送儀礼の一過程という側面を兼ねていたと考えられる。そのように考えた場合、穿孔形態のバラエティは、製作時に葬送儀礼の一環として、複数の葬送参加者が工人にかかわって、穿孔という行為のみをおこなったことに起因するとさへ想像される。このような想定は将来の類例の増加を待って慎重におこないたい。

(田中)



第27図 1号方形墳周溝内出土石器(1/4)

石 器 (第27図)

周溝内出土石器 1は、砥石である。形態は、大型のもので最大長は16.8cm、最大幅は9.2cm、重さ1.35kgをはかる。砥いだ面は、6面見られるが、一部、この石器を作るため整形し、打ち欠いた痕跡がみられる。石材は、頁岩質砂岩である。

2は、敲石である。最大長12.5cm、最大幅11.1cm、重さ1.75kgである。円礫をそのまま利用し、両端を使用している。石材は、安山岩である。

3～5は、磨石である。3は最大長15.1cm、最大幅10.4cm、重さ1.58kg、4は最大長15.5cm、最大幅9.5cm、重さ1.34gをはかる。5は最大長15.0cm、最大幅8.9cm、重さ1.26gをはかる。3点とも円礫をそのまま利用し、石材はいずれも安山岩である。

以上5点の石器は、周溝内西北隅の石棺石材片とともに検出されたものである。敲石、磨石類は、1号主体部の棺を設置する際丁寧な調整を行っており、その時に使用し、後に西北隅に廃棄されたものである。

(清原)

表3 壺型埴輪観察表

遺物番号	分類	法量(cm) ()内復元推定				調整	胎土・色調	備考	出土位置
		口径	頸部径	胴部最大長	底径				
1	A類	(23.5)	12.1	25.8	10.3	42.4	長石、角閃石多量に含む 黄～茶褐色 外面胴部黒斑あり	焼成前穿孔 外面口縁から胴部%まで 円塗り	S1、S2、S3
2	A類	—	(11.5)	—	9.0	—	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	焼成前穿孔 同一個体	N1
3	A類	—	(11.2)	—	10.0	—	長石、角閃石多量に含む 黄～茶褐色 胴部外面黒斑あり	焼成前穿孔 頸部内外に丹塗り	E6、E7
4	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	高坏の可能性あり	W1
5	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	外面丹塗り	W1、W2
6	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	—	W3
7	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多く含む 明茶褐色	—	E1、E2、E5
8	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多量に含む 黄褐色	—	E7
9	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石多量に含む 黄褐色	—	E7
10	A類	—	—	—	—	—	長石、角閃石含む	外面：丹塗り	S1

11	A類	(26.0)	—	—	—	—	—	—	内外：荒いハケ目を残すヨコナデ	長石、角閃石多量に含む 黄褐色	内外面丹塗り	S1、2 S、S5
12	A類	—	—	—	—	—	—	内外：丁寧なヨコナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	焼成前穿孔	S1、S 2	
13	B類	22.0	13.5	27.9	11.2	40.5	—	口内：斜方向のハケ目のあとヨコナデ 口外：ヨコナデ 胴外：荒いハケ目、タテ方向か上にいくほど斜向 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色 胸部多面、黒斑あり	E		
14	B類	(27.8)	(11.5)	—	8.5	—	—	口外：タテ方向のハケ目、端部をヨコナデ 口内：ハケ目を残す、ナデ 胴外：タテ方向のハケ目 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 黄～明茶褐色	焼成前穿孔	N2、N 3、N4	
15		—	(12.5)	—	—	—	—	外：ヨコナデ 頸内：ヨコナデ 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	内面、丹塗り	W1	
16		—	(11.7)	(25.0)	—	—	—	口内外：ハケ目頸：ナデ 胴外：斜～タテ方向のハケ目 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色		1、SS 2、S3 S4	
17		—	(14.2)	—	—	—	—	外：斜方向のハケ目内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石含む 茶褐色 胸部外面黒斑あり	外面丹塗り	S1、S 2	
18		—	11.8	—	—	—	—	頸内外：ヨコナデ 胴外：斜方向のハケ目	長石、角閃石含む 黄～茶褐色	外面、丹塗り	S1、S 3	

遺物 番号	分類	法量(cm) () 内復元推定				調整 調	胎土・色調	備考	出土位置
		口径	頸部 最大径	底部 最大径	器高				
19		—	(13.2)	—	—	胴内：タテ方向の指ナデ 頸内外：ヨコナデ 胴内：タテ方向の指ナデ（外面不明）	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	外面塗り	S 1、S 2
20		—	14.4	(28.4)	—	頸内外：ヨコナデ 胴外：斜方向のハケ目残る 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色		S 1、S 2、S 5
21		—	—	10.9	—	外：タテ方向のハケ 目内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	焼成前穿孔	S 3、S 5
22		—	—	(9.5)	—	底内：指圧痕 底外：ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色		W 1、W 2
23		—	—	—	—	底内：指圧痕 底外：ナデ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色		E 1
24		—	—	—	—	胴外：タテ方向のハケ目 胴内：タテ方向の指ナデ 底内：指圧痕	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	焼成前穿孔	E 3、E 5
25		—	—	11.3	—	胴内：タテ方向の指ナデ（外面不明） 底内：指圧痕	長石、角閃石多量に含む 黄～茶褐色 胴部外面、黒斑あり	焼成前穿孔	E 8
26		—	—	11.1	—	胴外：タテ方向のハケ目 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色 胴部外面、黒斑あり	焼成前穿孔	E
27		—	—	10.5	—	胴外：タテ方向のハケ目 胴内：タテ方向の指ナデ	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	焼成前穿孔	S 1、S 2

表4 土師器観察表

建物番号	分類	法量 (cm)				調整	胎土、色調	備考	出土位置
		口径	頸部径	胴部最大径	高				
30	壺 A 1 類	(24.5)	(26.3)	—	—	内外：ヨコナデ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	外面黒斑あり	W5
31	壺 A 2 類	(22.4)	—	—	—	内外：ヨコナデ 頸外：タテ方向のハケ目残る	長石、角閃石多く含む 淡茶褐色		S 4
32	壺 B 類	(9.5)	(7.7)	—	—	口内外、体部外面：丁寧なヨコナデ 体内：タテ方向の指ケズリ	長石、角閃石多量に含む 黄褐色	胎土、技法、埴型埴輪と共通	W6
33	壺 B 類	(8.7)	6.5	15.0	14.9	口外：ヨコナデ 口内：ハケの後ナデ 体外：ハケの後ナデ 体内：ヘラケズリ	長石、角閃石含む 淡褐色		N2, N7
34	壺 B 類	8.3	6.1	13.0	13.3	口内外：ヨコナデ 体外：ハケ目 体内：ヨコ方向のヘラケズリ	長石、角閃石含む 淡橙色 多面、黒斐あり	焼成、良好	N1ある いはN7
35	壺 B 類	—	(9.4)	—	—	外：ヨコナデ 口内：ヨコナデ 体内：ヘラケズリ	長石、角閃石多量に含む		N1
36	壺 B 類	(9.4)	—	—	—	内外：ヨコナデ	角閃石多量、長石少量含む 暗茶褐色		N8
37	壺 B 類	—	—	—	—	内：ナデ 外：ヘラケズリ	長石、角閃石含む 明茶褐色		J 3
38	壺 B 類	—	—	—	—	外：ナデ 内：指圧痕	長石、角閃石含む 暗灰色		N1

39	壺 B 類	—	—	(8.8)	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石含む 淡褐色	外面、黒斑あり	W2、W 3
40	壺 C 類	(9.8)	(7.9)	8.2	—	8.6	口内外：ヨコナデ 体外：ナデ 体内：指圧痕	精良粘土 灰茶褐色		W1
41	甕	—	—	—	—	—	外：タテ方向のハケ目 内：ヨコ方向のヘラケズリ	石英、角閃石多く含む 茶褐色	外面黄斑あり スス付着	W4
42	高坏A1類	(23.5)	(3.7)	—	(12.6)	—	坏部内外：ハケ目を残す、ヨ コナデ 脚部外：タテハケ、端部、ヨ コナデ 脚部内：ヘラケズリ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	胎土、型態、壺型挿輪に 共通 円盤充てん	W1、W 2、W3 W5
43	高坏A2類	(20.7)	39	—	—	—	坏内外：一部にハケ目を残し て、ヨコナデ 脚外：ナデ 脚内：ヘラケズリ	長石、角閃石含む 茶褐色 ○部外面、黒斑あり	円盤充てん	W1、W 3
44	高坏A2類	18.4	—	—	—	—	内：ヨコ方向のハケ目を残し て、ヨコナデ 外：ナデ	長石、角閃石含む 明褐色	円盤充てん	W2
45	高坏A2類	(15.7)	3.5	—	—	—	坏内外：ナデ 脚外：ナデ(内面不明)	長石、角閃石含む 赤褐色	円盤充てん	W2、W 5
46	高坏A2類	(17.6)	—	—	—	—	内：一部にハケ目を残して、 ヨコナデ 外：ヨコナデ	長石、角閃石含む 明茶褐色		W2
47	高坏A2類	—	3.3	—	—	—	坏内外：ヨコナデ 脚外：ナデ 脚内：ヘラケズリ	長石、角閃石多量に含む 黄褐色	円盤充てん	W5、W 6
48	高坏B類	—	—	—	—	—	外：ハケ目を残すナデ	長石、角閃石含む	円盤充てん	W2、W3

建物 番号	分類	法 量 (cm)				調 整	胎 土、色 調	備 考	出土位置
		口 径	頸部径	胴 部 最大径	高 器				
49	高坏 B 類	(19.8)	3.3	—	—	内：ナデ 坏内外：ヨコナデ 脚外：タテ方向のミガキ 脚内：ヘラケズリ	茶褐色 長石、角閃石多量に含む 茶褐色 口縁外面に黒斑あり	円盤充てん	W5、W 6
50	高坏 B 類	—	—	—	—	坏内外：ナデ 脚内：しぼり痕	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	円盤充てん	W5
51	高坏 B 類	—	—	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん	W5、W 6
52	高坏 B 類	—	2.8	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん	W5、W 7
53	高坏 B 類	—	—	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん	W5
54	高坏 B 類	—	—	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん	W5
55	高坏 B 類	—	2.6	—	—	脚内：ヘラケズリ（あとは不明）	長石、角閃石含む 黄褐色	円盤充てん 保存不良	W5、W 7
56	高坏 B 類	—	3.2	—	—	坏内外：ナデ 脚外：ナデ 脚内：ケズリ	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん	W6
57	高坏 B 類	—	—	—	—	坏外：タテ方向のハケ目を残してナデ 坏内：ナデ	長石、角閃石多く含む 茶褐色		W6
58	高坏 B 類	—	2.7	—	—	坏内外：ナデ	長石、角閃石含む 褐色	円盤充てん	W7

59	高坏B類	(15.1)	2.8	—	—	—	—	—	—	坏外：ヨコナデ (他は不明) 脚内：しぼり？	長石、角閃石含む 赤茶褐色	円盤充てん 保存不良	N5
60	高坏B類	—	—	—	11.8	—	—	—	—	脚外：ヨコナデ 脚内：へラケズリ	長石、角閃石含む 明黄褐色	円盤充てん	S5、S 7、S8
61		—	—	—	—	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石含む 茶褐色	円盤充てん 剝離はげしい	W5
62		—	—	—	—	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石含む 明茶褐色	円盤充てん 剝離はげしい	W6
63		—	3.0	—	—	—	—	—	—	脚内：へラケズリ (ほかは不明)	長石、角閃石多量に含む 赤褐色	円盤充てん 保存不良	W6
64		—	2.7	—	—	—	—	—	—	脚内：しぼりのあとへラケズリ (ほかは不明)	長石、角閃石多量に含む 明茶褐色	円盤充てん 保存不良	W7
65		—	—	—	(10.4)	—	—	—	—	脚外：タデ方向のハケ目 脚内：へラケズリ	長石、角閃石含む 茶褐色		W5
66		—	—	—	10.2	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石含む 茶褐色	保存不良	W5、N 6
67		—	—	—	(13.4)	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	保存不良	W5、W 6
68		—	—	—	—	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石含む 茶褐色	保存不良	W5
69		—	—	—	—	—	—	—	—	内外：ナデ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色		W5
70		—	—	—	(12.0)	—	—	—	—	内外：ヨコナデ	長石、角閃石多く含む 暗茶褐色	端部を面どりする	W5、W 6
71		—	—	—	(9.6)	—	—	—	—	(不明)	長石、角閃石含む 褐色	保存不良	W5、W 6

建物 番号	分類	法量 (cm)				調整	胎土、色調	備考	出土位罫
		口径	頸部 最大径	底部 最大径	器高				
72		—	—	(12.5)	—	外：ナデ 内：ヘラケズリ	長石、角閃石含む 褐色	W6	
73		—	—	—	—	外：ナデ 内：ヘラケズリ	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	W6、W 7	
74		—	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヘラケズリ	長石、角閃石多量に含む 明黄褐色	S5、S 8	
75		—	—	(10.3)	—	外：ヨコナデ (ほかは不明)	長石、角閃石多量に含む 茶褐色	N1 保存不良	

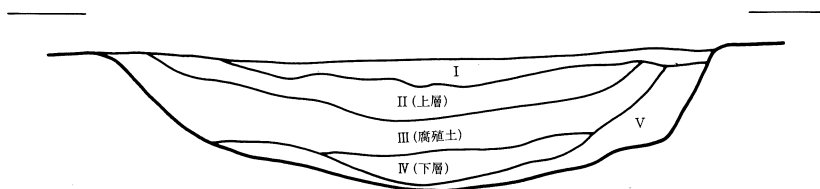
(田中)

3) 遺物の出土状況

前節で説明した遺物の出土状況を述べる。調査中に個々の遺物について出土層位を明確にし、とりあげることではできなかったが、遺物はある程度のまとまりをもって出土し、そのまとまり毎に、東西南北の周溝にN1・2……、W1・2……という具合に地点記号を付してとりあげた。層序との対応関係は、石器群を除いて、図上で復元した。

周溝層序 (第29図)

細かい層序の記述は先に述べられているのでさけるが、石材・石器類V層中周溝底面近くに集中して散布する。次のIV層の堆積中に、大半の土師器が集中している。III層は黒色の腐植土層で自然堆積と考えられ、この層とII層にかけて、とくにII層中に壺形埴輪破片が集中していた。石材・石器類を底面出土、土師器の集中するIV層を下層、壺形埴輪の集中するII層を上層と呼びわけることとする。

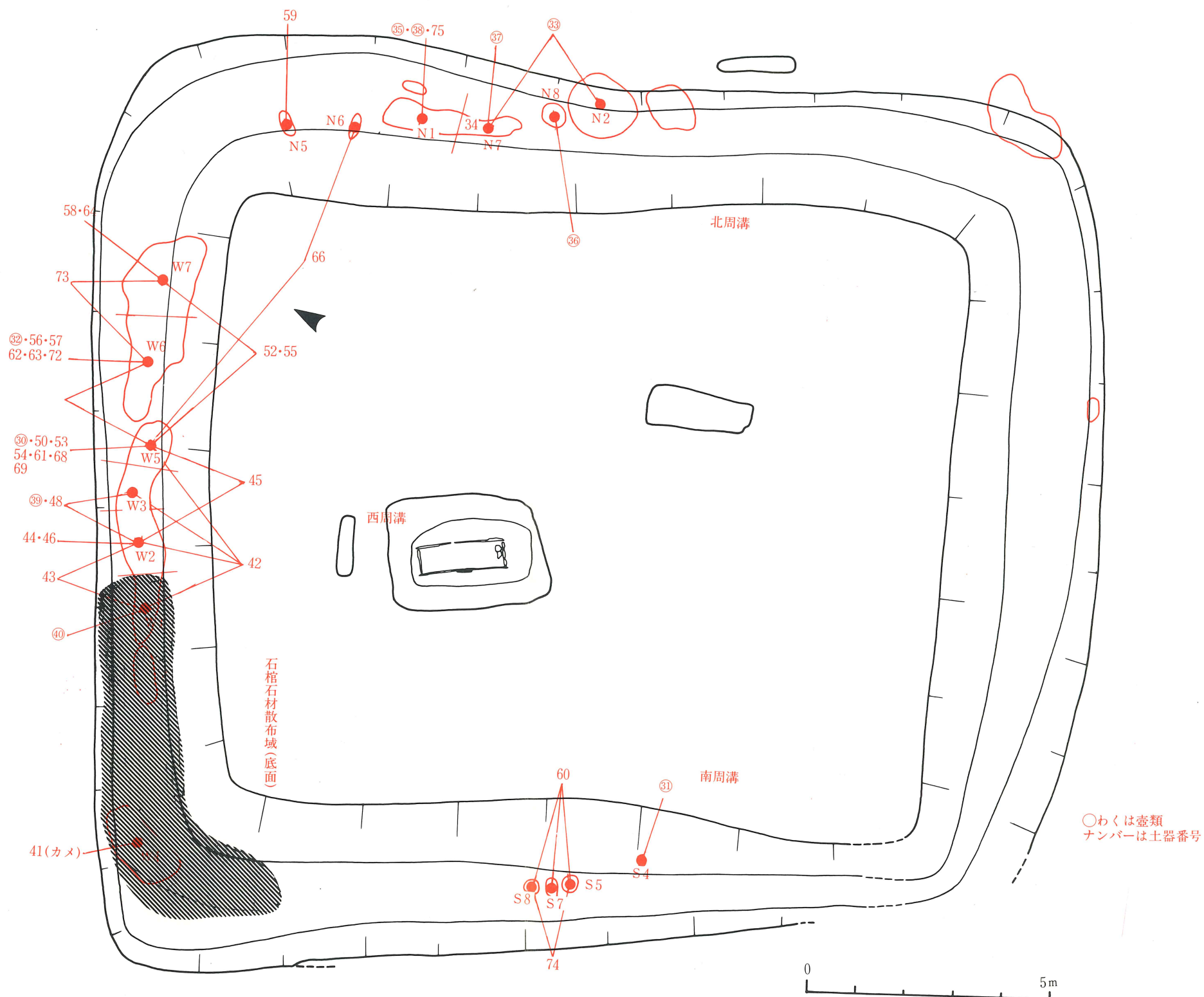


第29図 1号方形埴周溝層序概念図

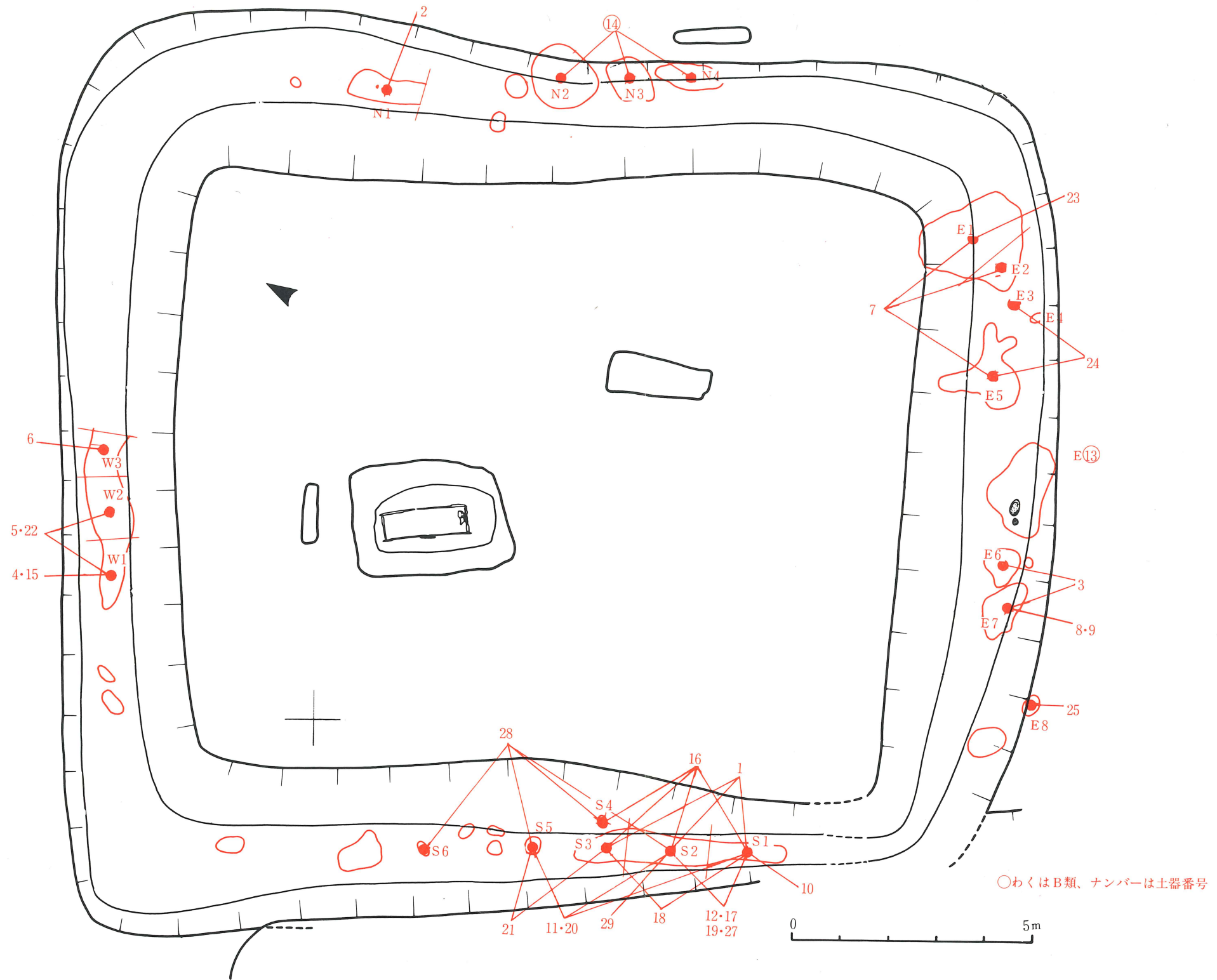
出土位置 (第30・31図)

石棺石材・石器類 (第30図) ハンマーストーンと考えられる叩き石 (第27図2)、磨石 (第27図3・4・5) および安山岩石片は大部分、周溝西北コーナー周辺の底面近くに散布していた (第30図)。この安山岩石片は、第1主体石棺材と同一のもので、石棺組立時の調整による打削片と考えられ、叩き石・台石も、その時に使用された道具と考えられる。底面に集中して発見されたのは、周溝掘削と盛土・第1主体築成が一連の行為として行われたことを物語っている。また、石片・道具を片付けずに周溝内に置き去りにしているのは、石棺組立作業そのものが、埋葬行為の一環として呪術的な意味をもっていたかのようである。

土師器 (第30図) 壺・甕・高杯を含む土師器類は周溝内下層埋土中に破片に分解して散布しており、直口壺 (第24図) 33・34、小型丸底壺 (第24図) 40の3点のみが完形で検出された。このような出土状況からみて、墳丘上におかれていたものが自然に流れ込んだか、あるいは、埋葬儀礼終了後、破碎して周溝内に投廃したのかのいずれかであろう。出土位置は北周溝に壺



第30図 1号方形墳周溝内土師器出土位置(下層)



第31図 1号方形墳周溝内壺形埴輪出土位置

類が集中し、西周溝には高坏類が集中する。また東周溝からは土師器は全く出土しておらず、土師器類の使用あるいは置かれた場所の推定がある程度可能である。すなわち、第一主体北側の墳丘上に壺類の多くと少数の高坏、第一主体西側の墳丘上に高坏の大部分と壺・甕が置かれていたか、その場所で土器を使用した儀礼が行われたものと考えられる。

層序からみて、土師器類は壺形埴輪よりかなり早い時点で周溝内に流れ込んでおり、大部分は中心被葬者埋葬時の儀礼に使用された土器群と考えられる。ただし、層序の帰属が明確に区別できていないので、追葬時の土器を区別することができなかった。

壺形埴輪（第31図） 壺形埴輪は大型破片に分解して、周溝埋土上層に流れ込んでおり、接合破片の分布を示したのが図31である。壺形埴輪の丹塗りは胴部下半まで及んでなく、底部外面が未調整である点とあわせて考えると、胴部下半3分の1程度を墳丘に埋没させて樹立することを意図して製作されたものと考えられる。勘助野地1号方形墳の墳丘はかなり削平をうけているため樹立の痕跡を検出することはできなかったが、底部片を観察すると底面はかなり凸凹を残し水平位に置くとかなり不安定となるので、墳丘上に埋没させて樹立していたと考えて差しつかえない。

それではどのような位置に樹立されていたのであろうか。破片の分布は東西南北の周溝すべてに及び、量的にも大きなかたよりはなない。したがって14+α個体の壺形埴輪は第一主体を囲むかたちで樹立されていたと考えられる。その際、埴形及び類例と比較すると、壺形埴輪は方形に、図32のように並べられていたと想定復元される。

ところで樹立の時期であるが、埋没層序からみて、土師器の流れ込みのあとやや時間的経過を示すⅢ層腐植土の形成時と、その後の墳丘盛土流出過程で壺形埴輪は破片化して周溝に流れ込んでいるので、土師器に比べて壺形埴輪はかなり後まで墳丘上に残っていたことがうかがわれる。しかし、壺形埴輪製作者による製作と考えられる。31・32・42の土師器は下層の土師器集中地点に、ほかの土師器といっしょになって流れ込んでおり、下層の土師器類と上層の壺形埴輪は、第一主体築成を含めた墳丘築成時に同時に製作されたものと考えられる。したがって埴輪の樹立時期は、周溝掘削・墳丘盛土・第一主体中心被葬者埋という一連の過程を伴う埋葬儀礼の一環として、樹立されたものと考えられ、追葬を含めたすべての埋葬行為の終了後に樹立された可能性は少ないものと考えられる。

最後に出土遺物とその出土状況の分析を通じて復元される、勸助野地1号方形周溝墓の埋葬過程を想定してみよう（第32図）。

第1過程 ① 墳丘の築成。周溝を掘り、墳丘を盛りあげ、第一主体墓壙を掘って、箱式石棺を構築する。石棺構築の際の棺材調整は墳丘上で行ったものと考えられ、棺材石片とその道具が、周溝底に置き捨てられる（V層の形成）。②埋葬儀礼用土器の製作。①の過程と併行して、儀礼に使用する土師器・壺形埴輪が製作される。土師器の大半は、日常土器の供給ルートを通じて、壺形埴輪と一部の土師器は、別に依頼した工人を通じて製作される。

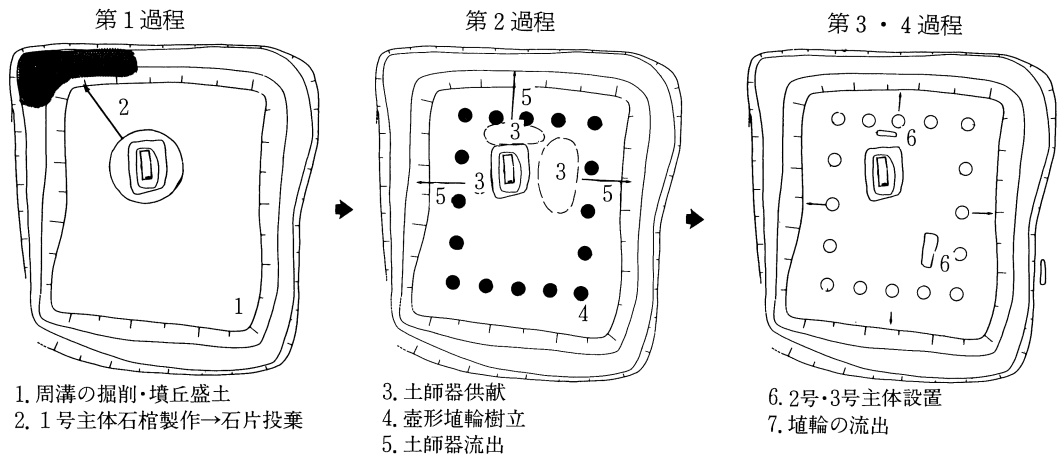
第2過程 ③ 第一主体中心被葬者の埋葬とそれに伴う儀礼。高坏・直口壺・甕等を使用した供食・供献儀礼がとりおこなわれ、使用された土器はそのまま墳丘上に供献される。④壺形埴輪の樹立。供献された土師器群はその際片づけられて周溝内に投棄されたか、あるいは壺形埴輪よりも早く、周溝内に流れ込む（IV層の形成⑤）。

第3過程 ⑥ 第一主体の追葬と第二・三主体の築成。この過程が、埴輪の樹立以前か以後かは問題が残るが、埴輪をみるかぎり、追加樹立が考えられる個体はなく、この過程以後に埴輪が樹立されたとすると、全ての被葬者の埋葬がきわめて短期間に行われたと想定せざるをえず無理がある。埴輪の樹立を第3過程終了後と考える場合には、埴輪そのものが一括製作後、別の場所に保存されて、全埋葬終了後、とり出されて樹立されたか、追葬のつど必要分を樹立したと考える他なくなる。

第4過程 ⑦ 埴輪の崩壊と周溝内への流れこみ（II層の形成）。

以上のような経過を経て、本遺跡が形成されたと推定される。

（田中）



第32図 1号方形墳遺構形成過程想定復元図

4) 2号方形墳 (第5図)

調査区外であるが、昭和54年の試掘調査時に確認したもので、墳丘規模は、東西辺12.5m、南北辺14.5mを測ると推定される。周溝は幅3m前後で全周すると推定されるが、トレンチ調査の為明確でない。主体部等については、調外の為確認を行っていない。周溝内より若干の土師器片が出土したが、小片であり器種については断定できなかったが、焼成や器面調整からは古式土師器であると推定した。

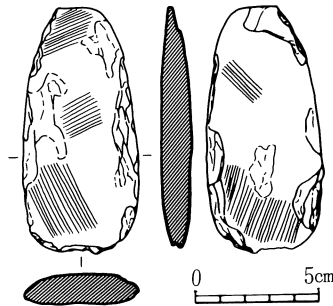
5) 3号方形墳 (第5図)

調査区の北西部に位置する。西辺と北辺の一部のみ調査区内で、他は区外であった。本墳は、大部分が未調査区であり正確な規模等は不明であるが、周溝を含めた一辺が9.5m前後のものと推定される。台上部は、検出した部分で南北幅約8mである。周溝は、幅1.5m前後で、深さは0.4m~0.2mを測り、南側が深く、北にのびるにしたがって浅くなる。北隅は、高圧線鉄塔のコンクリート製基礎が作られていたために、攪乱され消失していた。陸橋部等の施設は確認されなかった。周溝埋土の観察からは、台上部にマウンドがあったかどうかは確定できなかった。主体部の施設は、今回の調査区内からは検出されなかった。遺物は、周溝の流入土より、石斧1点・土器片数点が得られた。

3号方形墳出土石器 (第33図)

磨製石斥

これは、はじめに整形加工を行いのちに研磨している。また、先端の欠損部分は、使用のち欠損したものであると思われる。最大長10cm、最大幅4.7cm、重さ102gである。石材は結晶片岩である。



第33図 3号方形墳周溝内出土遺物
(1/3)

1～3号方形墳の周辺には、土壙墓14基、石蓋土壙墓5基、組合式木棺墓1基がグループを形成しながら群在する。以下土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓の順に説明する。

6) 土壙墓

1号土壙墓 (第35図) 1号方形墳の東側周溝中央に周溝外側に近接して作られている。主軸は、N-150°Eである。内法は、長さ148cm、幅29cmを測る。棺のつくり方からすれば頭位は南東側にあったものと考えられる。

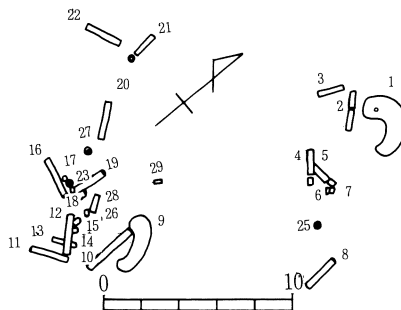
2号土壙墓 (第36図) 1号方形墳の西側周溝北西側コーナーより西3.6mに位置し、1・2号石蓋土壙墓とともに一群を形成する。主軸はN-65°-Eの素掘りの土壙墓である。内法は長さ130cm、幅34cm、深さ35cmを測る。棺のつくり方からすれば頭位は北東側にあったものと考えられる。

3号土壙墓 (第37図) 2号方形墳の西側周溝中央の周溝外辺より西2.5mの所に位置する。4～11号土壙墓や1号木棺墓とともに一群を形成する。

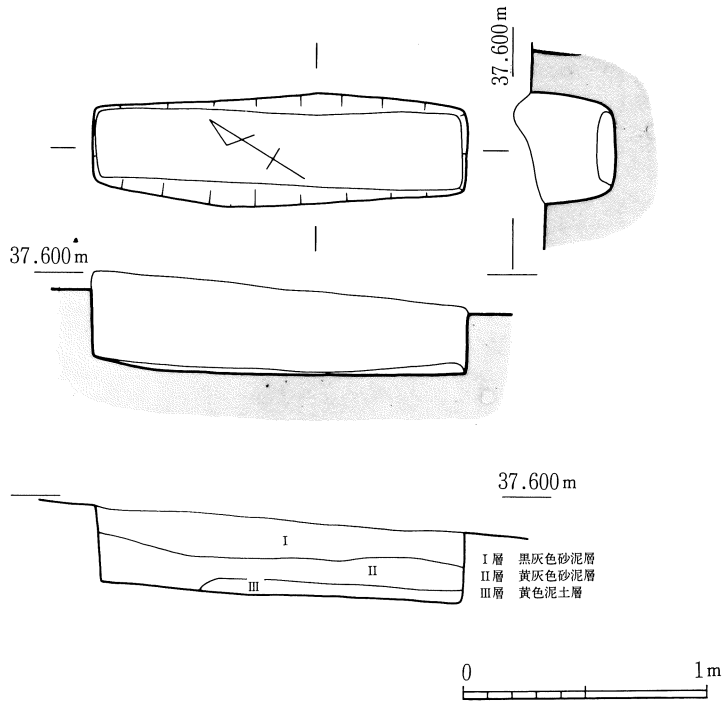
主軸は、N-115°-Wの素掘りの土壙墓で、墓壙上面は削平されている。内法は長さ116cm、幅19cm、深さ5cmを測る。棺の形態から頭位は、南西方向と考えられる。

4号土壙墓 (第38図) 3号土壙墓の西1mの所に位置する。主軸はN-85°-Wの素掘りの土壙墓で土壙上面は削平されている。床面には、河床産の玉砂利を敷くが、西隅の部分には粘土枕を作り、下方には、赤色顔料が塗布されている。内法は長さ96cm、幅23cm、深さ5cmを測る。棺の形態から、頭位は、西方向の小児用のものと考えられる。

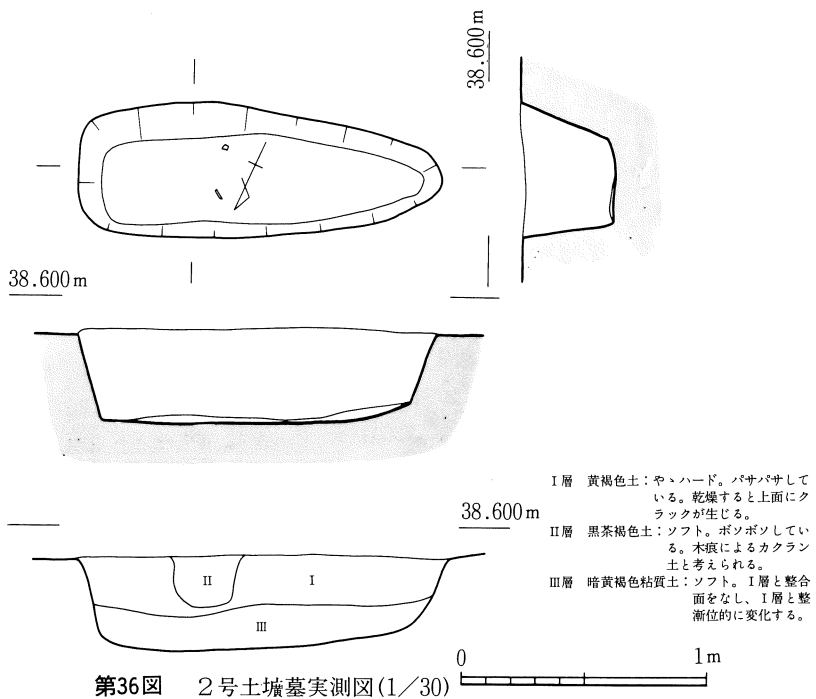
5号土壙墓 (第39図) 4号土壙墓の北側0.5mとごく近接して位置する。主軸は、N-95°-Wの素掘りの土壙墓で、土壙上面は削平されている。床面より5cm前後浮いた状態で粘土ブロックが数ヶ所にわたって検出されるところから木蓋の目貼りに使用されたと考えられる。床面には、全体に河床産の玉砂利を敷き、中央より西半分は赤色顔料を塗布している。また、西小口壁より約10cmの所で、軟質の碧玉製勾玉2点、管玉15点、ガラス玉5点が2群に分かれて検出された。土壙墓の内法は、長さ153cm、幅38cm、深さ11cmを測る。棺の形態から頭位は西方向のものである。



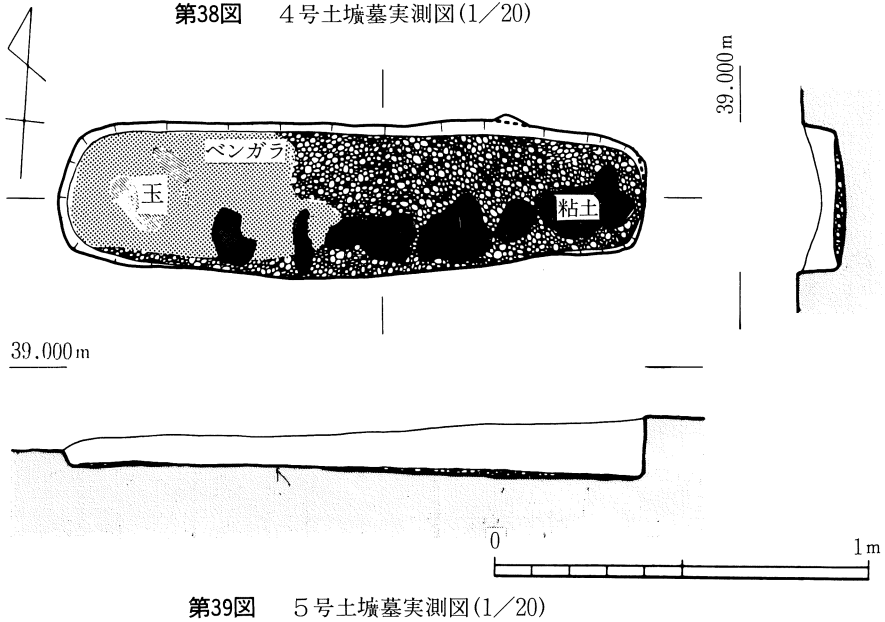
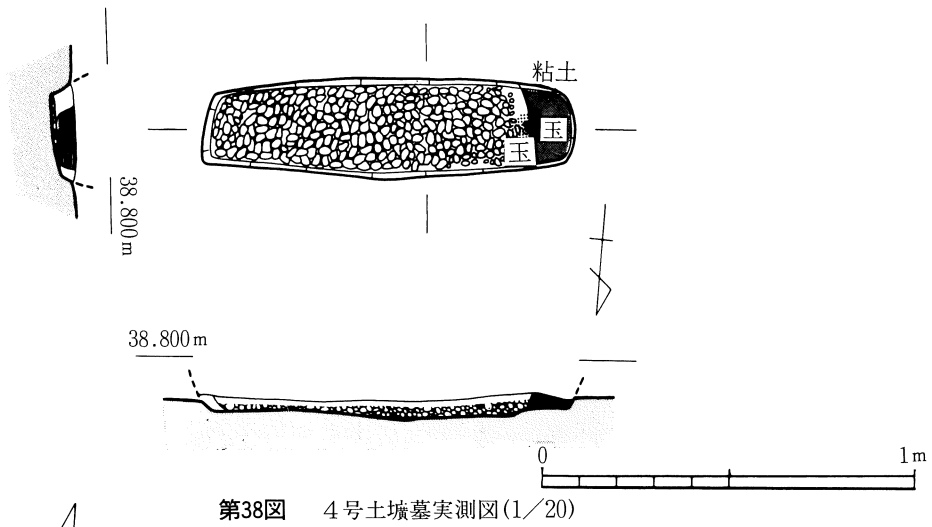
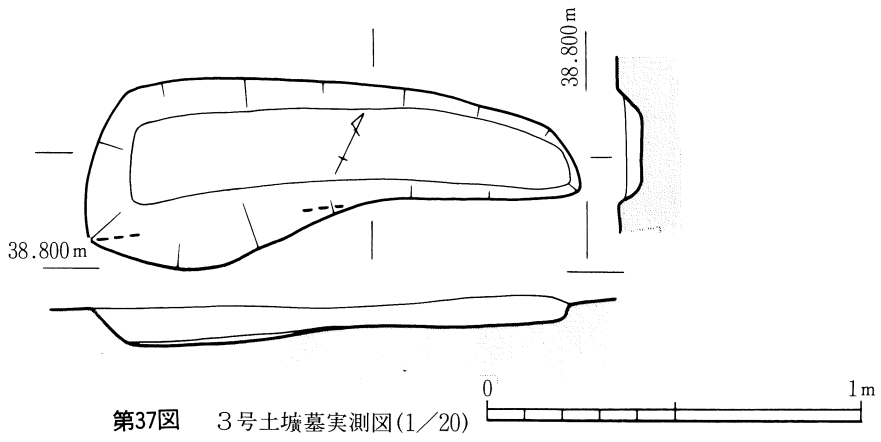
第34図 5号土壙墓玉類出土状況実測図(1/4)

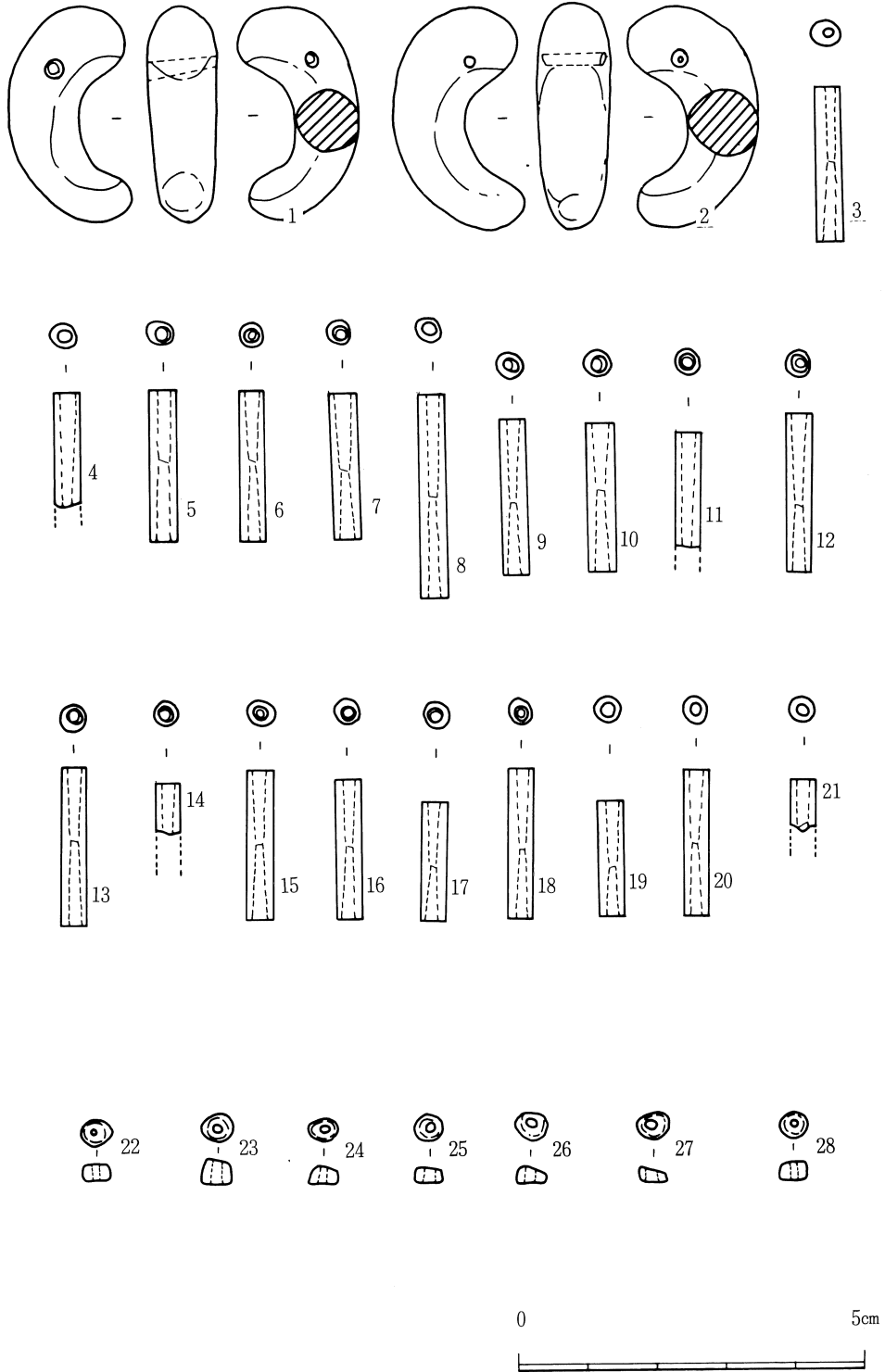


第35図 1号土塚墓実測図(1/30)



第36図 2号土塚墓実測図(1/30)





第40図 5号土塚墓出土玉類実測図(実大)
1・2 碧玉軟質勾玉 3~21 碧玉軟質管玉 22~28 ガラス小玉

表5 5号土壙墓出土玉類計測表

No.	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
1	勾玉	碧玉	淡青灰	3.1	1.0	0.25~0.15	4.9	片面穿孔
9	"	"	"	3.2	1.1	0.25~0.1	5.5	"
2	管玉	"	"	2.3	0.4	0.18	0.3	両面穿孔(?)
3	"	"	"	1.1 (残部)	0.4	0.2~0.15	0.2	一部欠
4	"	"	"	2.25	0.4	0.2	0.3	両面穿孔
5	"	"	"	2.3	0.4	0.2	0.3	"
8	"	"	"	2.2	0.4	0.2	0.25	"
10	"	"	"	3.0	0.4	0.2	0.45	"
11	"	"	ゑ	2.3	0.4	0.2	0.3	"
12	"	"	"	2.2	0.4	0.2	0.25	"
13	"	"	"	1.7 (残部)	0.4	0.2	0.2	一部欠
16	"	"	"	2.3	0.4	0.2	0.3	両面穿孔
17	"	"	"	2.3	0.4	0.2	0.3	"
18	"	"	"	0.75 (残部)	0.4	0.2	0.1	一部欠
19	"	"	"	2.3	0.4	0.2	0.3	両面穿孔
20	"	"	"	2.15	0.4	0.2	0.3	"
21	"	"	"	1.8	0.4	0.2	0.25	"
22	"	"	"	2.2	0.4	0.2	0.3	"
25	"	"	"	1.75	0.4	0.2	0.25	"
29	"	"	"	2.15	0.4	0.2	0.3	"
30	"	"	"	0.7	0.4	0.2	0.1	一部欠
6	小玉	ガラス	青	0.4	0.3	0.1		
7	"	"	"	0.5	0.35	0.15		
14	"	"	"	0.45	0.2	0.15		
15	"	"	"	0.45	0.3	0.15		
24	"	"	"	0.45	0.25	0.15		
26	"	"	"	0.45	0.25	?		
27	"	"	"	0.45	0.25	0.2		
28	"	"	"	0.5	0.3	0.15		

6号土墳墓（第41図）5号土墳墓の北西南側約0.6mの所に位置する。主軸は、N-105°-Wの素掘りの土墳墓で、土墳上面は削平を受けている。床面より2～5cm浮いた状態で、粘土ブロックが全体にわたって検出されることから木蓋がされていたと考えられる。内法は、長さ183cm、幅38cm、深さ12cmを測り、床面は平坦である。棺の形態から頭位は西南方向と考えられる。

7号土墳墓（第42図）3号土墳墓の北側約1.5mの所に位置する。主軸はN-123°-Eの二段掘りの木蓋土墳墓である。墓壇は地山を隅丸長方形に掘込んだと考えられるが北西側は、開墾により破壊されている。残存部分の墓壇最大値は、210cm、深さ5～8cmを測る。

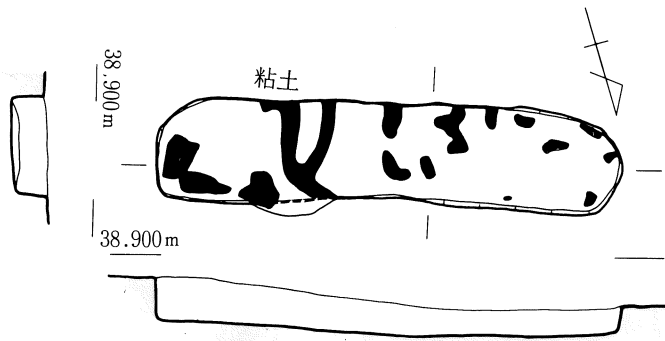
木蓋は、長さ90cm、幅20cm前後の板を少なくとも9枚程度重ねて覆っていたと考えられるが、既に腐蝕して形状は留めていない。目貼り粘土の下に若干木蓋の腐蝕した痕跡が残っている程度である。なお、板石や礫を部分的に使用したと思われる痕跡は認められない。

土壇は、隅丸長方形で、主軸は東西方向を向いている。土壇上面での長さ168cm、深さ43cm、内法は長さ160cm、幅34cm、深さ44cmを測る。土壇内には、上面より陥没した目貼り粘土が多量に残っているが、枕に使用したと考えられる粘土や礫は認められない。また、土壇内外での赤色顔料の使用は認められない。棺の形態から頭位は南東方向のものである。副葬品は、東小口壁より約10cmの北側壁に鉄鏃1点と、同じく東小口壁より約15cmの南側壁ぎわに鉄鏃1点および鉄斧1点が、それぞれ床面より15cm前後浮いた状態で検出された。副葬品の出土状況から鉄器類は、棺外副葬の可能性が高い。

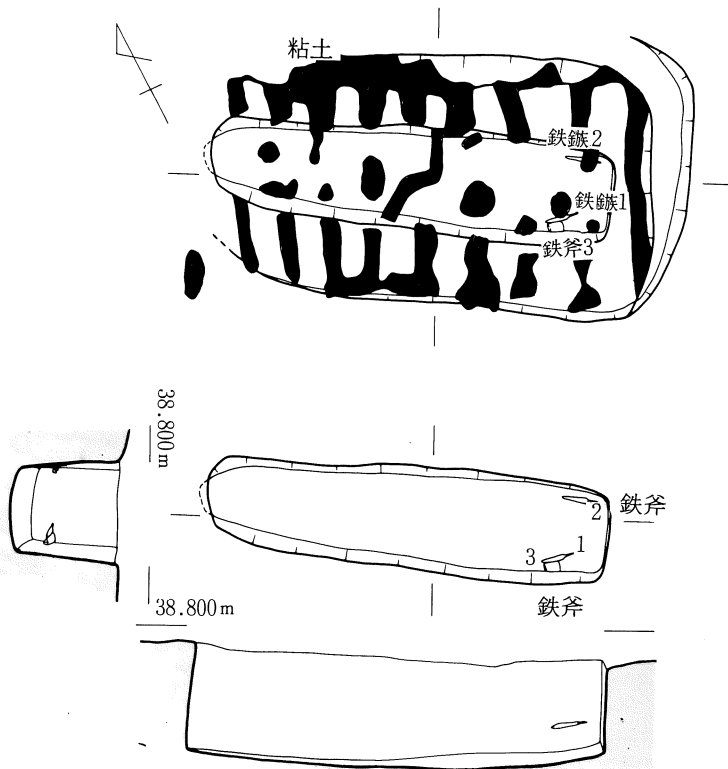
遺物

鉄鏃（第43図1・2）1・2ともに完形の有茎の柳葉式鉄鏃である。1は、全長14.6cm、身部長8.6cm、最大幅3.0cm、茎につづく部分で2.3cmを測る。厚さは、0.3cm前後である。茎の断面は、ほぼ方形で茎元で一辺0.5cm、茎に向って尻細くなる。茎には木質が残り、桜皮を巻いている。2は、全長14.7cm、身部長10.0cm、最大幅2.7cmを測る。形態・特徴ともに1と近似する。

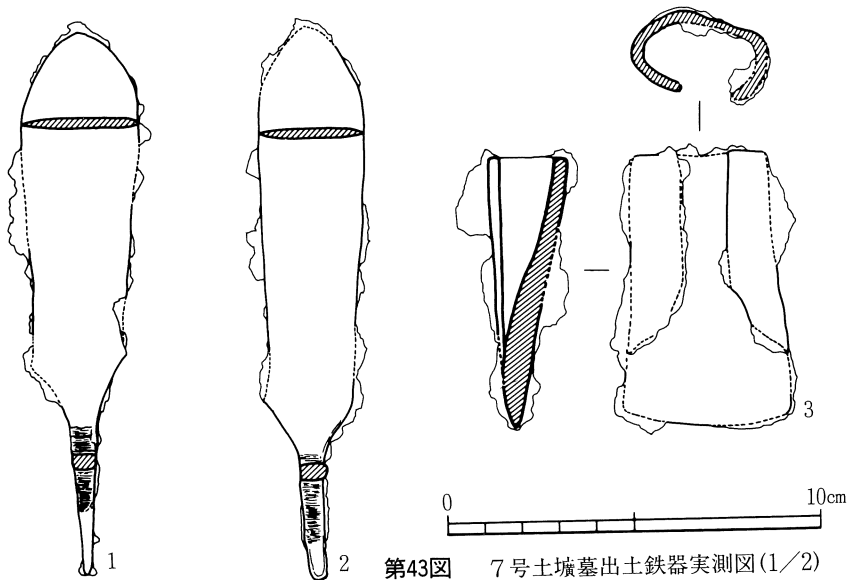
鉄斧（第43図3）完形の鍛造鉄斧で、全長7.3cm、最大幅は刃先で4.7cmを測る。袋部に向かってやや狭くなる。袋部は両側から厚さ0.3cmの鉄板を折りまげて作っており、楕円形を呈する。肩はもたず、側面にわずかに稜がみとめられる。



第41图 6号土城墓实测图(1/30) 0 1m



第42图 7号土城墓实测图(1/30) 0 1m



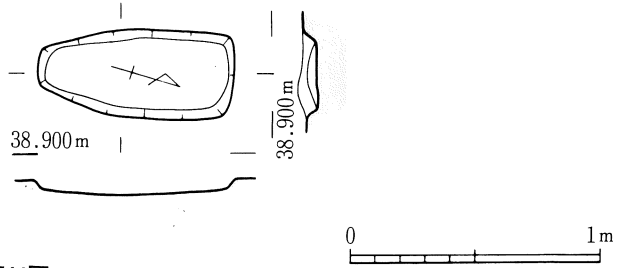
8号土壙墓（第44図）6号土壙墓の北西側1.6mの所に位置する。主軸はN-16°-Wの素掘りの土壙墓である。土壙は楕円形に近い形態で、主軸は、南北方向をとる。土壙上面は削平を受けているが長さ78cm、深さ5cm、内法は、長さ72cm、最大幅26cmを測る。土壙の形態から、頭位は北西方向の小児用のものと考えられる。

9号土壙墓（第45図）6号土壙墓の北側1.5mの所に位置する。主軸はN-77°-Wの素掘りの土壙墓である。土壙は、隅丸長方形で主軸は、東西方向にとる。土壙上面は削平を受けているが、長さ140cm、深さ12cm、内法は、長さ130cm、幅31cmを測る。土壙の形態から、頭位は東北方向のものである。

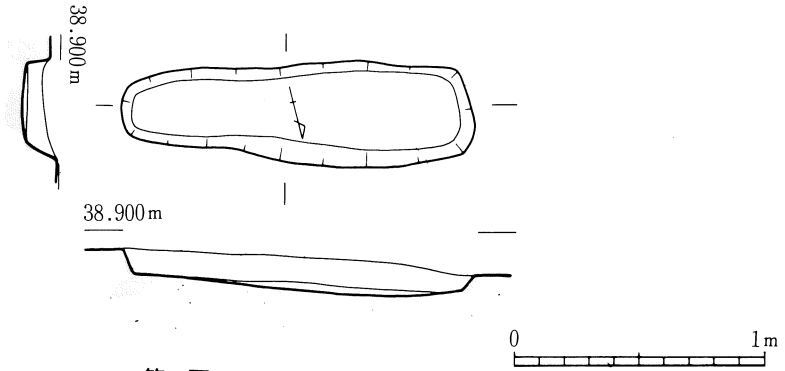
10号土壙墓（第46図）6号土壙墓の北側50cmの所に位置する。主軸はN-160°-Eの素掘りの土壙墓である。土壙は隅丸長方形であるが、東側小口部は丸い。主軸は東西方向をとる。

土壙上面は、削平を受けているが、長さ112cm、深さ5cm、内法は、長さ160cm、幅33cmを測る。東小口壁上面と、南北側壁に赤色顔料を塗布している。土壙形態から頭位は東南方向をとる。

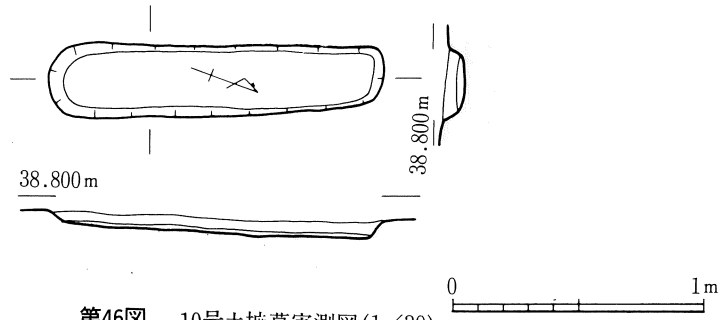
11号土壙墓（第47図）9号土壙墓の北側の所に近接して位置する。主軸は、N-115°-Eの素掘りの土壙墓である。土壙は、やや細身の隅丸長方形で、主軸は南北方向をとる。土壙上面は、削平を受けているが、長さ133cm、深さ5cm、内法は、長さ121cm、幅23cmを測る。土壙形態から頭位は東南方向をとる。



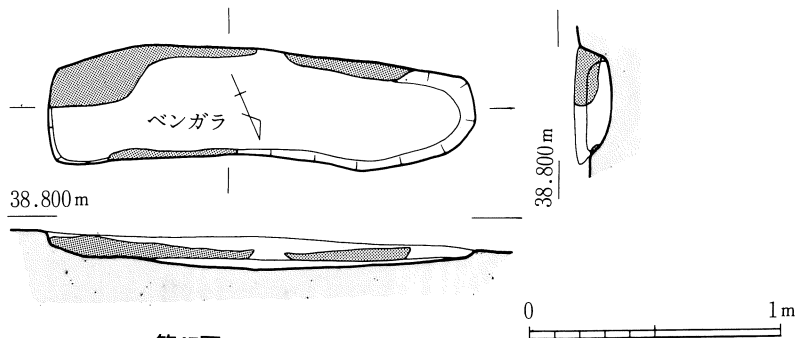
第44図 8号土城墓実測図(1/30)



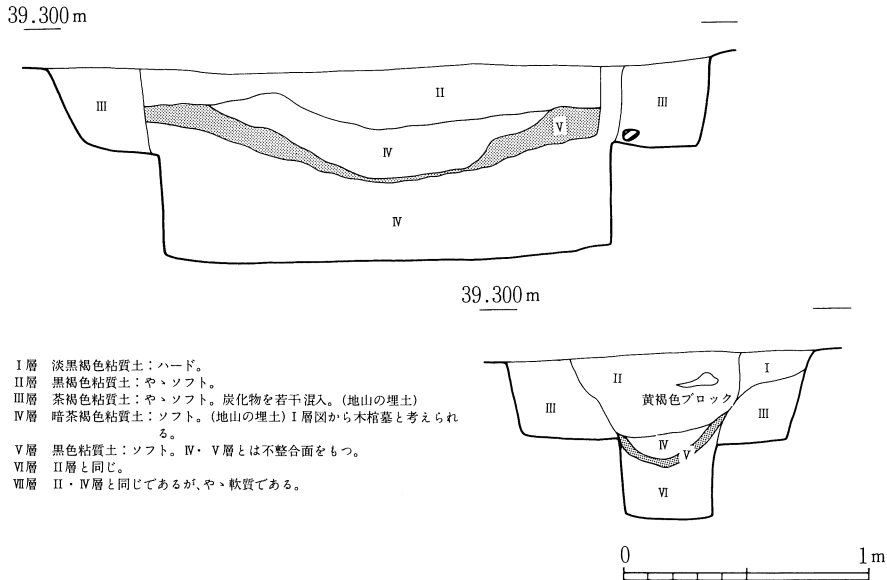
第45図 9号土城墓実測図(1/30)



第46図 10号土城墓実測図(1/30)



第47図 11号土城墓実測図(1/30)



第48図 12号土墳墓土層図(1/30)

12号土墳墓 1号木棺墓の北側約6.5mの所に3・4・5号石蓋土墳墓と一群を形成する。主軸は、N-92°-Eの二段掘りのものである。

墓壇は、地山を隅丸長方形に掘込んであり、長辺273cm、短辺123cm、深さ28cmを測る。

土壇は、墓壇中央に墓壇の長辺に並行して掘込まれている。土壇は長方形で、主軸は東西方向を示す。両小口壁とも面をなしており、木棺墓の可能性もあるが、床面に掘込がない為、土壇墓と推定した。なお土層を検討すると、東小口部には木板を立てたと考えられる土層が認められたが、他の部分にはないので、外標示のための木板はあった可能性は大きい。

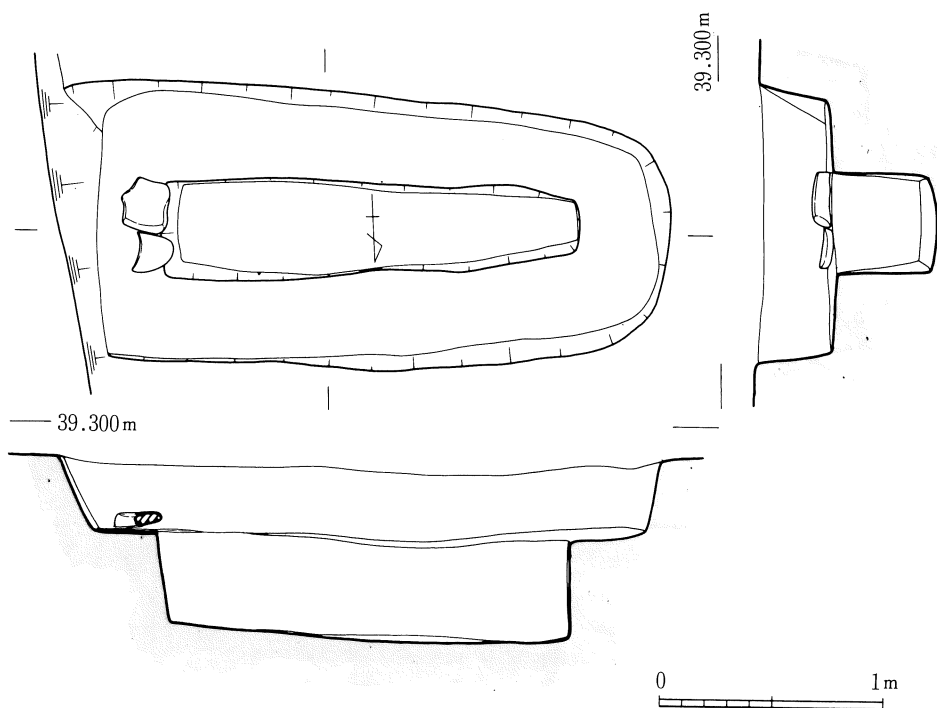
土壇上面での長さ166cm、深さ45cm、内法は長さ162cm、幅40cmを測る。

東小口壁直上の墓壇には、人頭大の安山岩製の川原石を2個置いている。頭位の外標示か木板のおさえと考えられる。土壇形態から東頭位のものである。

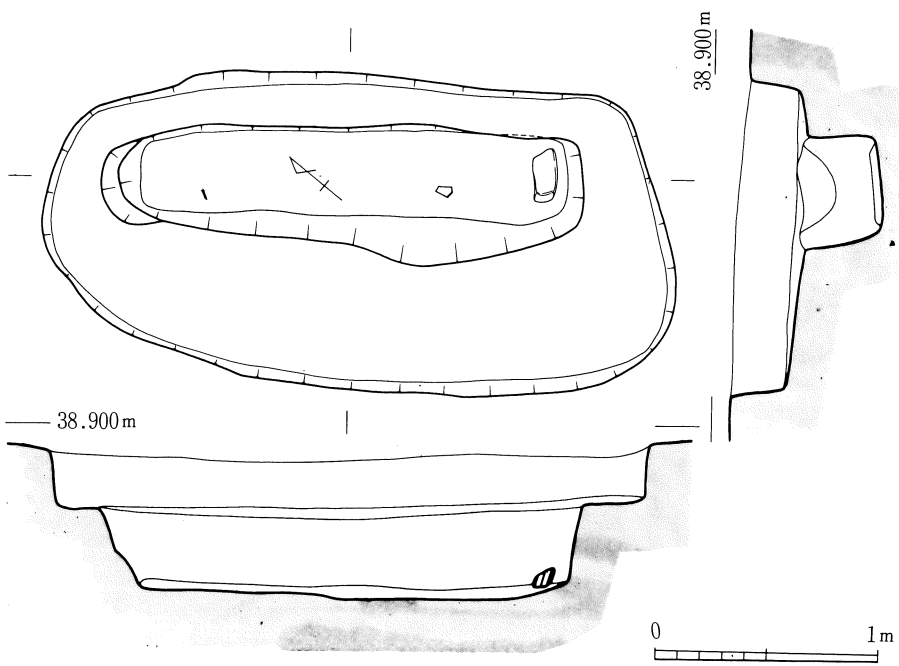
13号土墳墓 4号石蓋土墳墓の北側約13mの所に単独で位置する。主軸は、N-137°-Eの二段掘りのものである。

墓壇は、地山を隅丸長方形に掘込んでおり長辺271cm、短辺140cm、深さ21cmを測る。土壇は、墓壇中央より、東北辺側にかた寄ったところに墓壇の長辺に並行して掘込まれている。

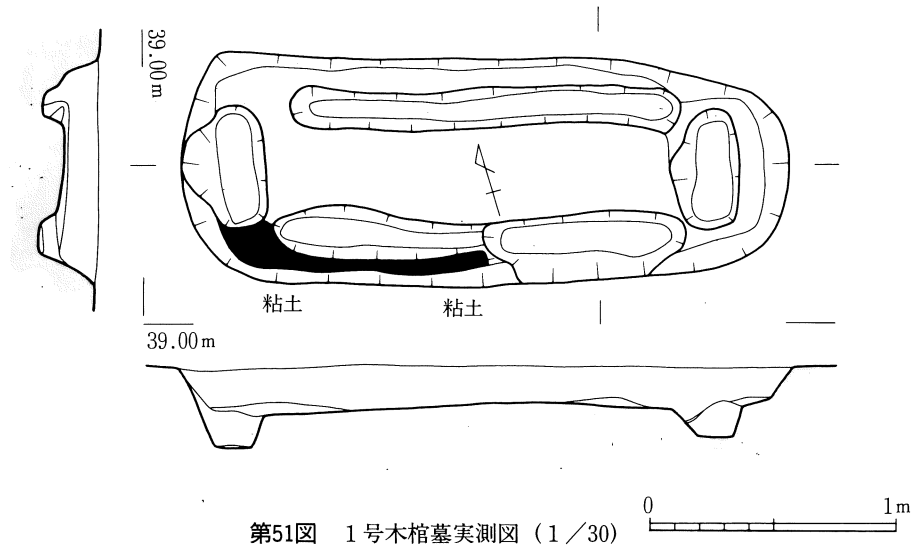
土壇は隅丸長方形で、主軸は南北方向を示す。南小口壁は面をつくるが、北小口壁は丸くつくっている為、土壇墓と推定した。土壇上面での長さ210cm、深さ33cm、内法は長さ192cm、幅39cmを測る。南小口壁より5cm中央よりの所に、人頭大の安山岩製の川原石で石枕を作っている。また南小口より50cmの所で土師器甕胴部片が床面直上で発見された。また、土壇以外での赤色顔料の使用は認められない。土壇形態から南頭位のものである。



第49图 12号土坟墓实测图(1/30)



第50图 13号土坟墓实测图(1/30)



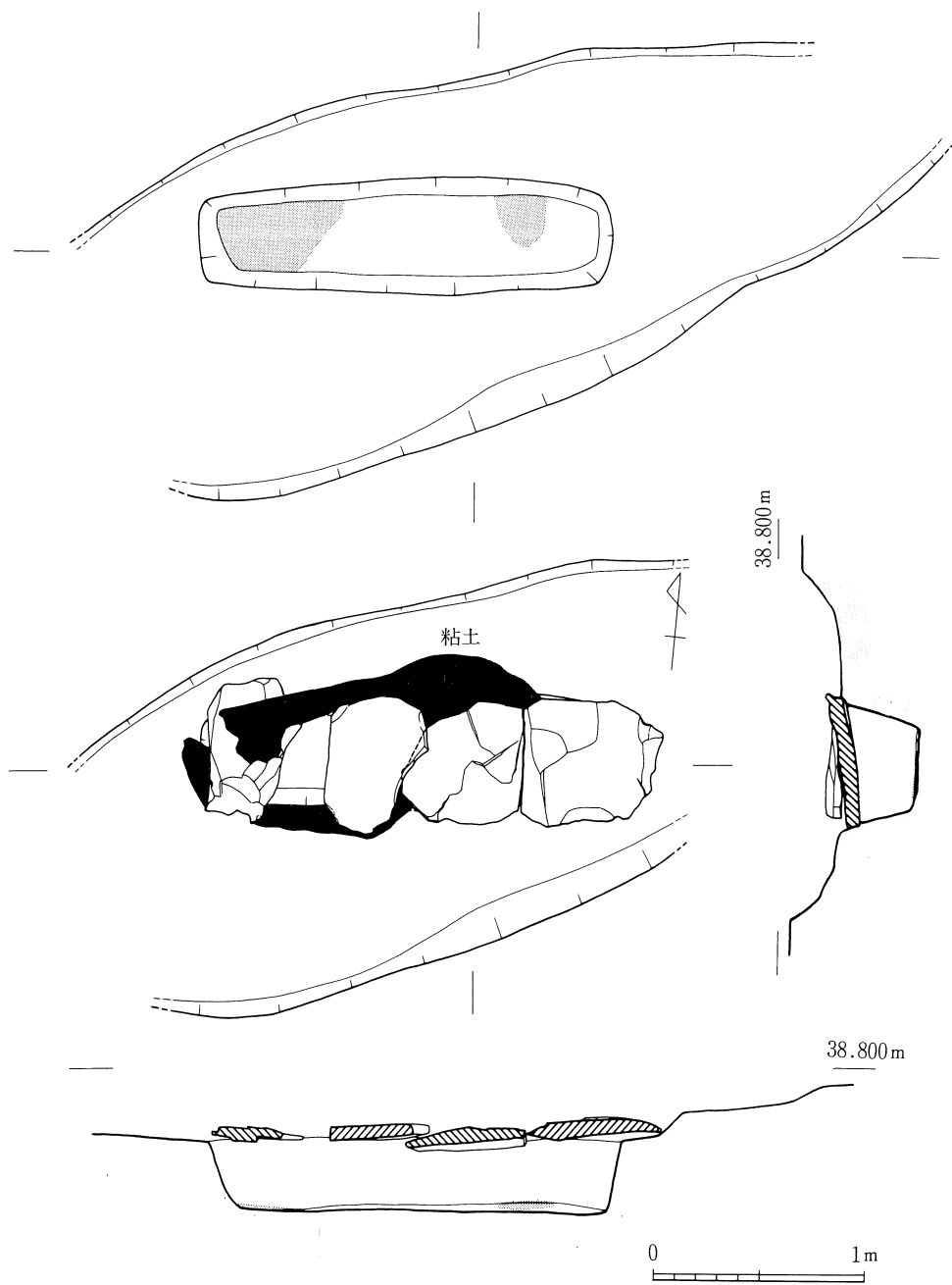
7) 木棺墓

1号木棺墓(第15図) 8号土墳墓の北側約2.8mの所に位置する。主軸は、N-73.5°-Wの素掘りの木棺墓である。土墳は隅丸長方形で、主軸は、東西方向を示す。土墳上面での長さ247cm、深さ15cm、内法は長さ163cm、幅36cmを測る。床面には壁に沿って、両小口、両側板の掘込があり、南側壁側には、側板の裏込め粘土が部分的に検出された。掘込の形状から南側板は、二枚以上使用したと考えられる。また、木棺は、小口板で、小側板を挟み込形態(□)のものであると考えられる。木棺の形態から西頭位の可能性が高い。

8) 石蓋土墳墓

1号石蓋土墳墓(第52図) 2号土墳墓の北側約3mに位置し、北東側の2号石蓋土墳墓と近接する。主軸はN-81°-Eの二段掘りの石蓋土墳墓である。墓墳は地山を長形状に掘込んだものだと考えられるが西・東辺は、開墾により破壊されていた。残存部分で長辺250cm、短辺167cm、深さ10cmを測る。

石蓋は、長さ50cm、幅50cmの平均の安山岩製の割石を東側から順番に5枚重ね合わせたいわゆる鎧重ねのものであると推定されるが、足部の一石は、ぬき取られていた。石重ねの順番は、土墳の形状から頭部方向から重ねて行ったものである。また、板石と板石との合せ目には、粘土により入念な目貼りが施されていた。蓋石除去後の土墳の形態は、隅丸長方形で主軸は、東西方向を示す。土墳上面での長さ190cm、深さ29cm、内法は、長さ180cm、幅35cmを測る。土墳床面は水平で頭位と足位付近に赤色顔料を塗布していた。土墳の形態から東頭位のものと考えられる。



第52图 1号石盖土坟墓实测图(1/30)

2号石蓋土壙墓（第54図） 1号石蓋土壙墓の北東約1m所に近接して位置する。主軸N-32.5°-Wの2段掘りの石蓋土壙墓である。

墓壙は、地山をややふくらみを持った隅丸長方形に掘込んでいる。長辺258cm、短辺186cm、深さ22cmを測る。

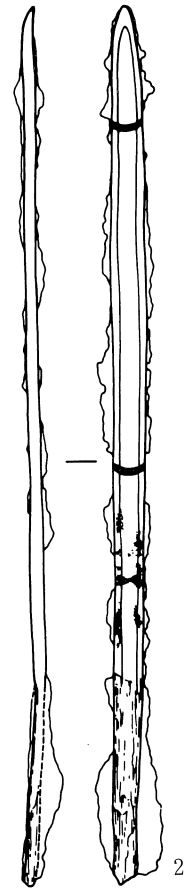
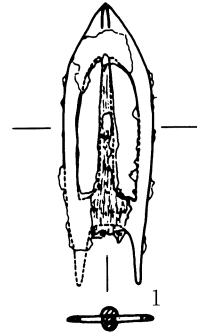
石蓋は、長さ50cm前後、幅40cm平均の安山岩製の割石を南側から順番に5枚重ね合わせたいわゆる鎧重ねのものである。順番は、土壙の形状から頭部方向から行なっている。また、板石と板石との合せ目には、粘土により入念な目貼りが施されていた。蓋石内面には、赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の土壙の形態は、隅丸長方形で主軸は南北方向を示す。土壙上面での長さ208cm、深さ45cm、内法は、長さ198cm、幅52cmを測る。土壙床面は、水平である土壙内外面の赤色顔料の使用は認められない。土壙の形態から北頭位のものと考えられる。

3号石蓋土壙墓（第55図） 12号土壙墓の西側約2mの所に位置する。主軸はN-50°-Wの2段掘りの石蓋土壙墓である。

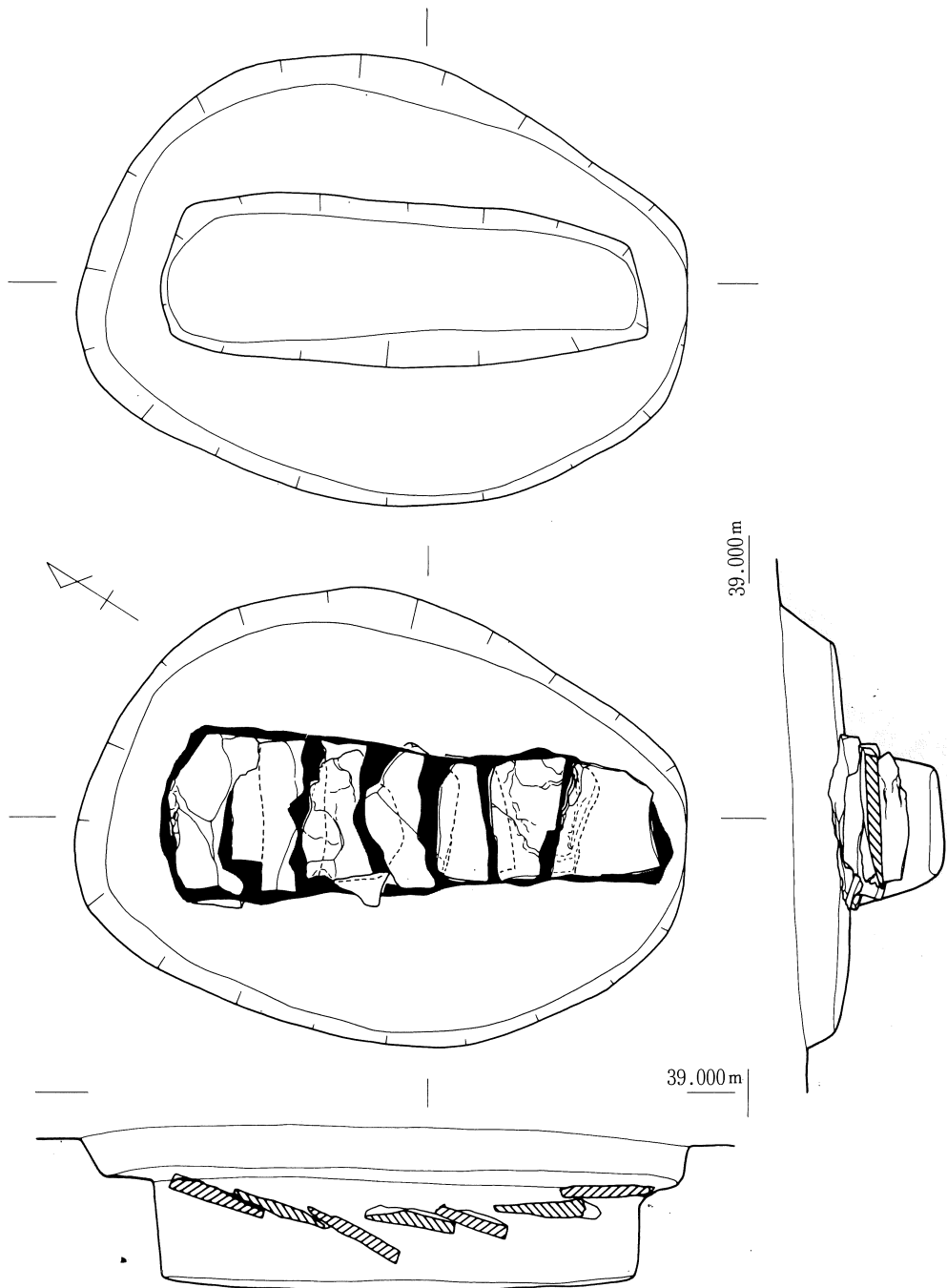
墓壙は、地山を楕円形状に掘込んでいるが西側部分は、開墾により削平されていた。現存最大長178cm、深さ20cmを測る。

石蓋は、長さ60cm、幅40cm平均の安山岩製の割石を東側から順番に4枚重ね合わせた鎧重ねのものであるが、西側は開墾により2～3枚程度ぬき取られていた。順番は、土壙の形態から足部方向から重ねられたと考えられる。また、板石と板石との合せ目には、墓土により入念な目貼りが施されていた。蓋石内面には、赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の土壙の形態は、隅丸長方形で主軸は、南西-北東方向を示す。土壙上面での長さ193cm、深さ43cm、内法は、長さ188cm、幅55cmを測る。土壙床面は、中央が最も低くなっており、床面全体に赤色顔料が塗布されている。

副葬品は、西側小口壁より50cm中央よりの南側壁ぎわの床面直上に鉈が、同じく西側小口壁より35cm中央よりの所で床面より15cm浮いた状態で鉄鏃がそれぞれ検出された。土壙の形態から南西頭位のものと考えられる。

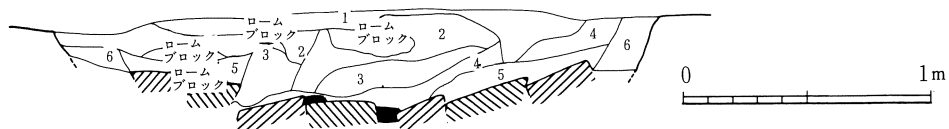


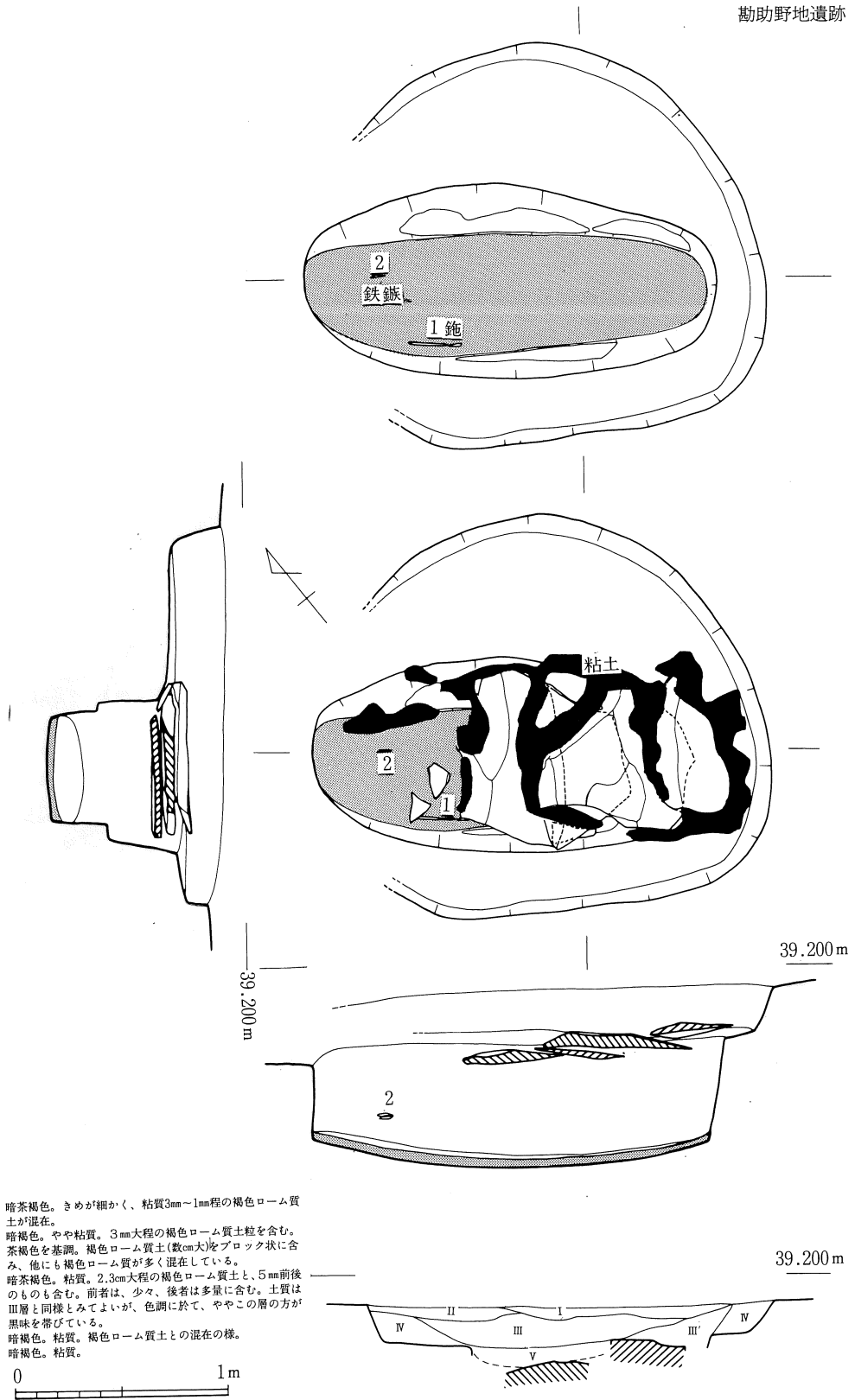
第53図 3号石蓋土壙墓出土鉄器実測図 (1/2)



1. 混ローム小ブロック暗黄褐色土層
2. 粗粒。暗黄褐色土(ローム粒多量混入)
4. 粗粒。硬質。暗黄褐色土層(ローム小ブロック多量混入)
5. ロームブロック主体層(石蓋直上層)
6. ローム主体暗黄褐色土層

38.800m





第55図 3号石蓋土塚墓実測図(1/30)

遺物

鉄鏃（第53図1）有透孔長三角形式で基部にやや深い矩形を呈した腹扶を有する。基部を一部欠損するがほぼ完形品で、全長7.5cm、幅は逆刺部で2.1cm程で、身の中央部には左右対称の透孔がはいる。身の中央部には篋木質が鏃身に錆着している。厚さは、0.2cm弱でくり込み部を徐いた周縁部はすべて刃をつくり出している。

鉞（第53図2）柄尻基部を若干欠損すがほぼ完形品で、全長23.7cm、幅は上半部に最大幅があって1cm強を測り、刃部、柄尻部分は細目である。刃部と柄部との境はない。断面は刃部、柄部ともに浅いU字形を呈し、厚さは0.2cm前後である。刃部先端から14cm以下に木が質錆着しておりこの部分が柄部と考えられる。

4号石蓋土壙墓（第56図）3号石蓋土壙墓の北側約2mに位置し、西側の5号石蓋土壙墓とは近接する。主軸は、N-107°-Eの2段掘りの石蓋土壙墓である。

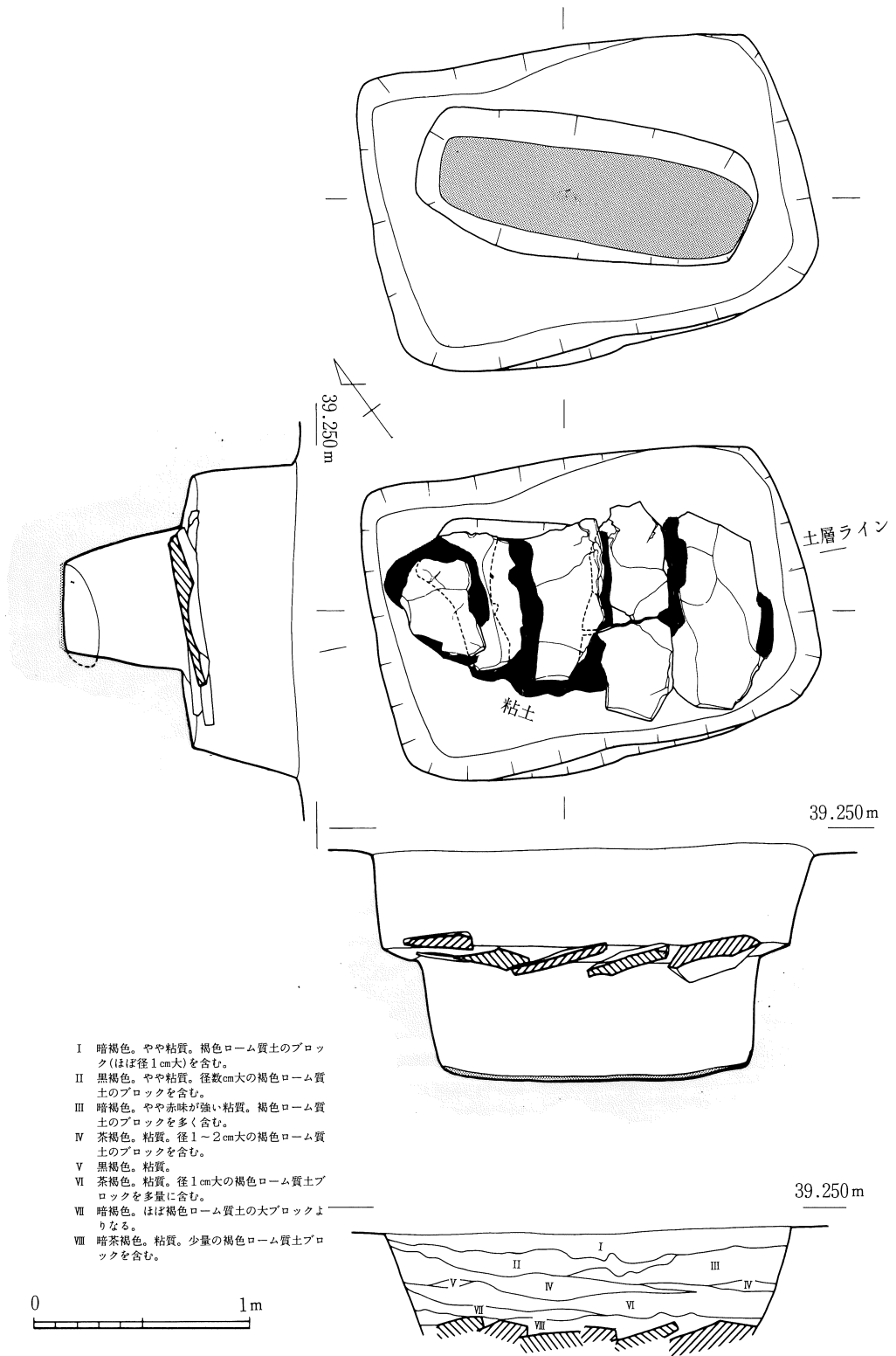
墓壙は、地山を隅丸長方形に掘込んだもので、長辺200cm、短辺144cm、深さ47cmを測る。墓壙は、地山土を互層に墓壙上面まで埋めている。

石蓋は、長さ90cm、幅40cm平均の安山岩製板石を東側から順に5枚鎧重ねしている。土壙形態から、頭部分から順に重ねて行ったものである。また、板石間には墓土により入念な目貼りが施されていた。蓋石内面には、赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の土壙は隅丸長方形で、墓壙の長軸に対して対角線上に掘込まれている。主軸は、東西方向を示す。土壙上面での長さ152cm、深さ69cm、内法は、長さ145cm、幅37cmを測る。土壙床面は、中央がやや低くなっており、床面全体に赤色顔料が塗布されている。土壙形態から東頭位のものと考えられる。

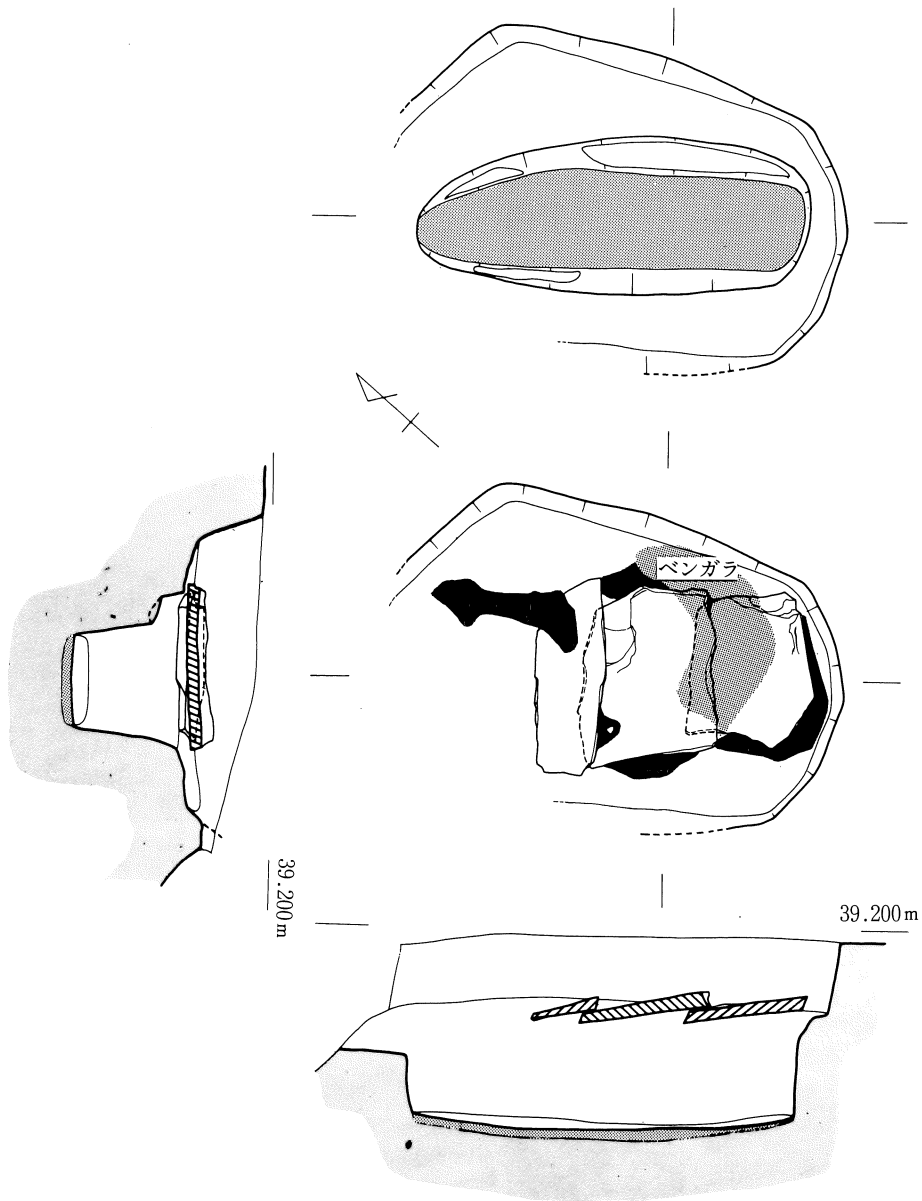
5号石蓋土壙墓（第57図）4号石蓋土壙墓の西約0.5mの所に近接して位置する。主軸N-150°-Eの2段掘りの石蓋土壙墓である。

墓壙は、地山を卵倒形に掘りこんでおり、長径185cm、短径124cm、深さ30cmを測るが、西側部分は開墾により削平されている。

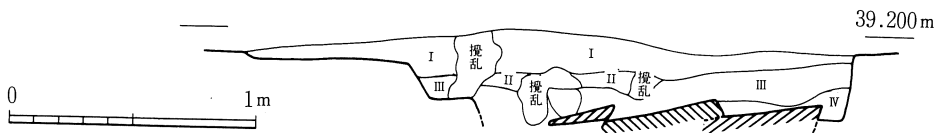
石蓋は、長さ50cm、幅50cm平均の安山岩製の割石を3枚順に鎧重ねしている。西側部分は、削平の為2枚程度、板石がぬき取られている、土壙の形状から頭部方向から重ねて行ったものである。また、板石間には、墓土により入念な目貼りが、施されていた。蓋石内面には、赤色顔料が塗布されていた。蓋石除去後の土壙は、隅丸長方形で、墓壙の長軸に並行して掘込まれている。主軸は東西方向を示す。土壙上面での長さ158cm、深さ47cm、内法は、長さ156cm、幅35cmを測る。土壙床面は水平で床面全体に赤色顔料が塗布されていた。土壙形態から東頭位のものと考えられる。



第56図 4号石蓋土塚墓実測図(1/30)



- I 茶褐色：数mm大の褐色ローム質土を多く混入。
- II 暗茶褐色：粘質。約2.3cm大の褐色ローム質土を多く混入している。
- III 黒褐色：粘質。約1～3cm大の褐色ローム質土を少量含む。
- IV 黒色：粘質土。



第57図 5号石蓋土城墓実測図(1/30)

表6 1号方形形墳主体部一覽表

	主軸方位	主軸方向	頭位	丹彩	蓋石数	右壁数	左壁数	棺の内法			深さ	備考
								主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)		
1号主体(箱式石棺)	N145°E	↖	南東	○	5	3	3	180	60	53	67	櫛、鉄剣、鉄鎌、鉄鋤、麻手 刀子、鹿角装刀子 墓壇規模3.42×2.46×0.89
2号主体(石蓋土墳墓)	N115°E	←	南西	○	3	墓壇の規模		121	22	19	41	
						長(cm)	幅(cm)					
3号主体(組合式木棺)	N20°W	↗	北西			198	11	170	70	71	15	ガラス小玉、鉄鏃

表7 石蓋土墳墓一覽表

	主軸方位	主軸方向	頭位	墓壇の規模		丹彩	蓋石数	棺の内法			深さ	備考
				長(cm)	幅(cm)			主軸長 (cm)	頭幅 (cm)	足幅 (cm)		
1号石蓋土墳墓	N81°E	↗	東	?	167	○	4	180	35	30	29	底部の一部に丹彩
2号 "	N32.5°W	↖	北東	258	186		7	198	52	36	45	
3号 "	N50°W	↖	北西	約237	185	○	4	187	50	43	46	底部全面丹彩、鉄鏃2、○1
4号 "	N107°E	↘	南東	200	140	○	5	143	41	33	53	底部全面丹彩
5号 "	N150°E	↘	南東	185	124	○	3	156	35	23	47	蓋石上面の一部と 底部全面丹彩

表8 土塚墓・木棺墓一覧表

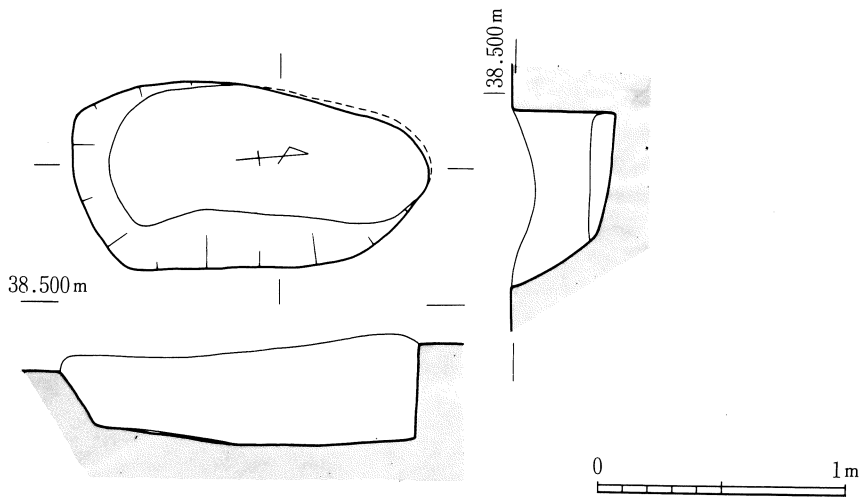
	主軸方位	主軸方向	頭位	墓塚の規模		棺の内法			備考
				長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	
1号土塚墓	N150°E	↘	南東			148	29	29	
2号 "	N65°E	↗	北東			130	34	35	
3号 "	N115°W	↙	南西			116	19	5	
4号 "	N85°W	←	西			96	23	5	床面玉砂利、頭位に粘土枕、ベンガラ
5号 "	N95°W	←	西			153	38	11	木蓋土塚墓、頭位にベンガラ、勾玉、管玉、ガラス玉
6号 "	N105°W	↙	西南			183	38	12	木蓋土塚墓
7号 "	N123°E	↘	南東	200+α	110+α	163	34	44	木蓋土塚墓、鉄鏃、鉄斧
8号 "	N16.5°W	↖	北西			73	28	5	
9号 "	N77°W	↘	東北			130	31	12	
10号 "	N115°E	↘	東南			121	23	5	
11号 "	N160°E	↓	南東			160	33	11	側部にベンガラ
12号 "	N92°E	→	東	273+α	123	178	40	45	河原石で外標示
13号 "	N139°E	↘		271	140	190	37	35	河原石枕
1号木棺墓	N73.5°W	↖	北西			164	36	15	

9) 土 坑 (第58~75図)

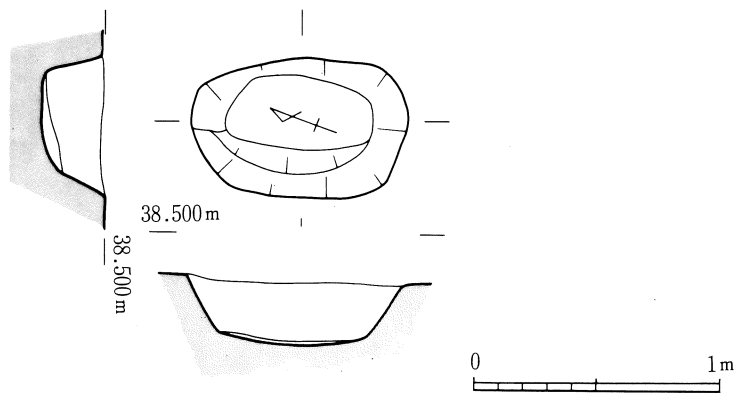
調査区内においては、土壙墓、石蓋土壙墓とともに18基の土坑が検出された。形態は不定形であるが、方形に近いもの(3号、4号、7号、10号)、楕円形に近いもの(1号、2号、5号、6号、9号、15~18号)に分類される。床面は、ほぼ平らであるが中に浅いピットを掘ったもの(4号、8号、14号、16号、17号、18号)がある。流入土は、このピットのある土坑は、漆黒色のクロボクであった。出土遺物は、時期の明確にしうるものはほとんどの土坑で出土しなかったが、4号土坑で姫島産黒曜石製の石鏃が、14号土坑で縄文早期末同前期初頭の手向山式土器が出土しているところからクロボクの流入したものは、縄文早期末~前期のもの可能性は強い。また形態的に土壙墓に近いもの(1号、3号、7号、10号、15号)もあるが、確実な土壙墓とは形態上違うので分離した。

表9 土坑一覧表

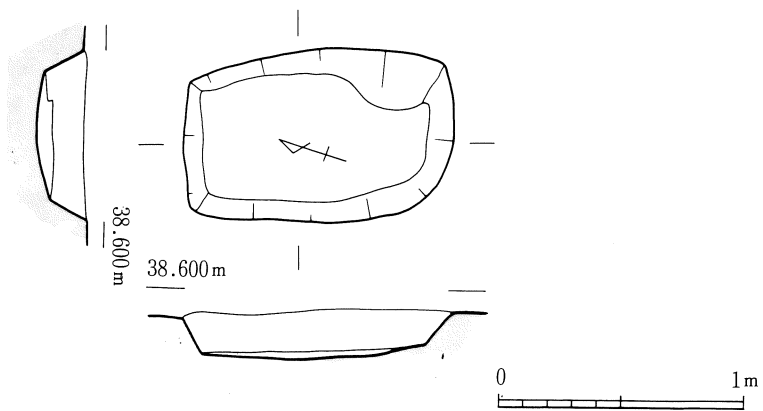
	主軸方位	内 法			備 考
		長 (cm)	幅 (cm)	深 (cm)	
1号土坑	N 7.5° E	145	72	39	
2号 "	N 20° E	60	30	25	
3号 "	N 19° W	90	51	19	
4号 "	N 62° E	132	27	57	石鏃
5号 "	N 70° W	66+α	35	12	
6号 "	N 140° W	73	40	19	
7号 "	N 65° E	125	34	38	
8号 "	N 73° E	82	35	13	
9号 "	N 60° E	60	20	16	
10号 "	N 82° E	119	71	26	
11号 "	N 73° E	119	67	28	
12号 "	N 83° E	205	95	72	
13号 "	N 40° E	213	65	80	
14号 "	N 37° W	200	92	83	手向山式土器、石製品
15号 "	N 11° W	97	40	31	
16号 "	N 23° E	176	82	73	
17号 "	N 40° E	156	31	45	
18号 "	N 10° E	152	76	30	



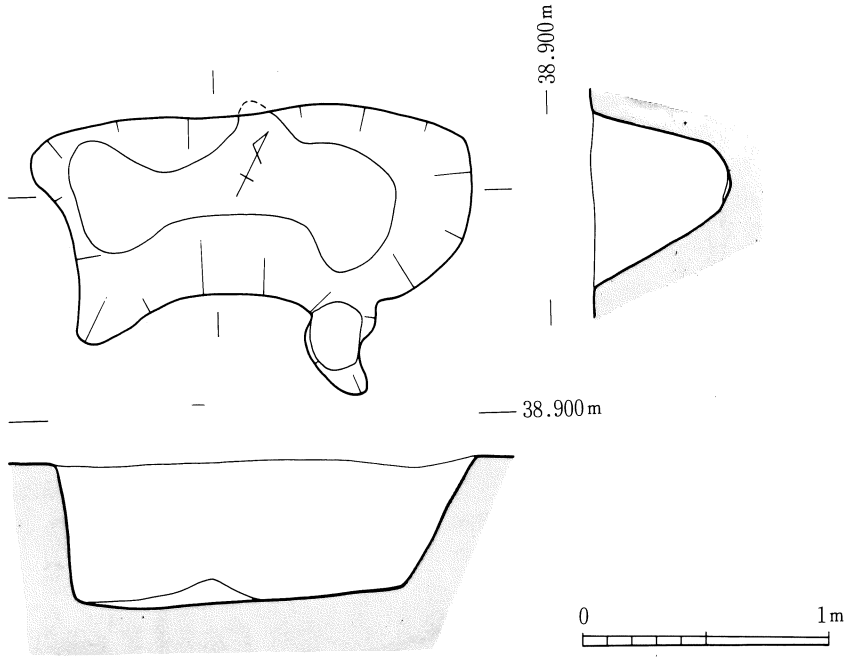
第58图 1号土坑实测图(1/30)



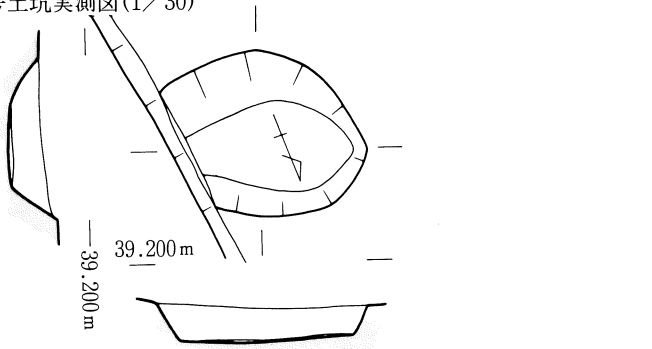
第59图 2号土坑实测图(1/30)



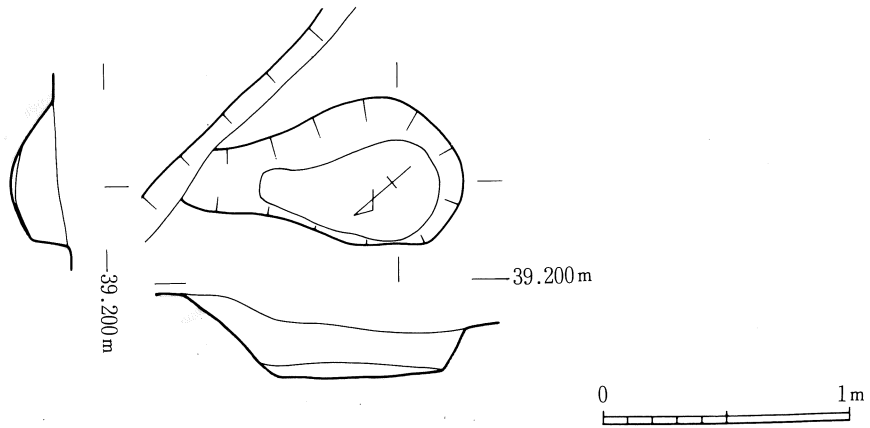
第60图 3号土坑实测图(1/30)



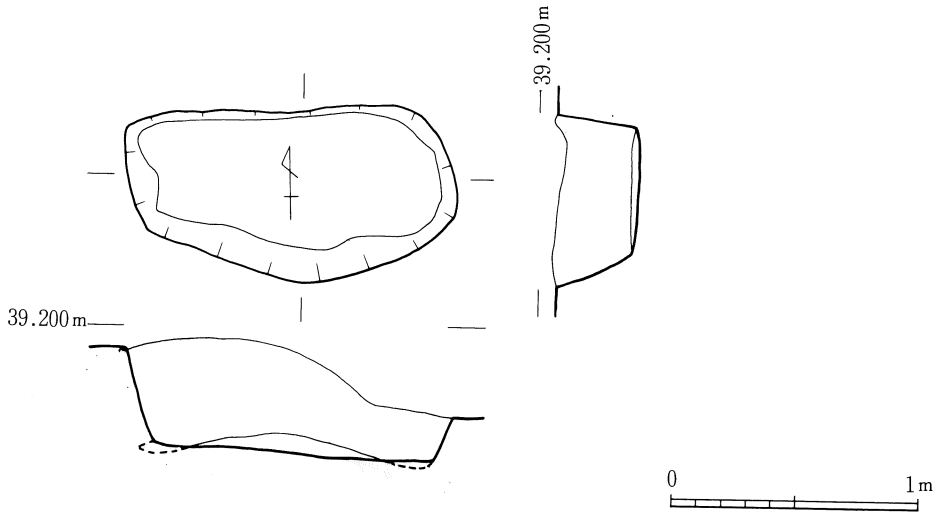
第61図 4号土坑実測図(1/30)



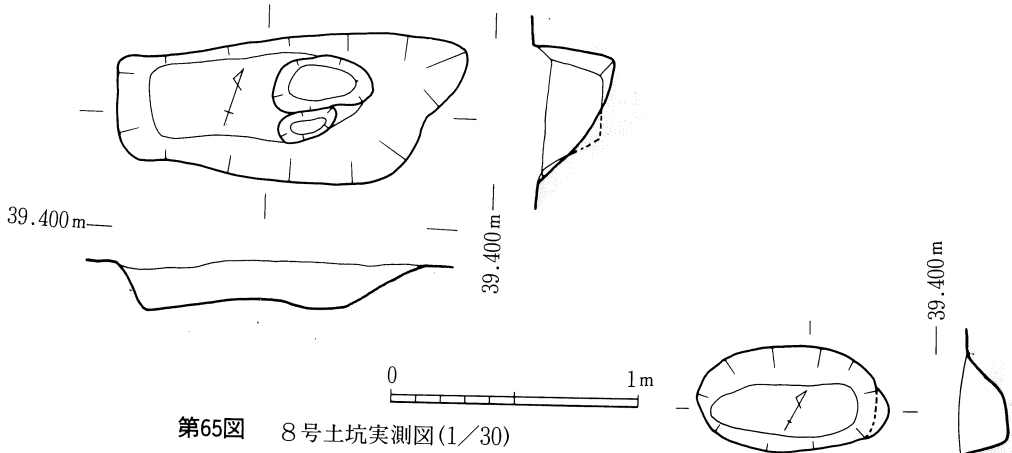
第62図 5号土坑実測図(1/30)



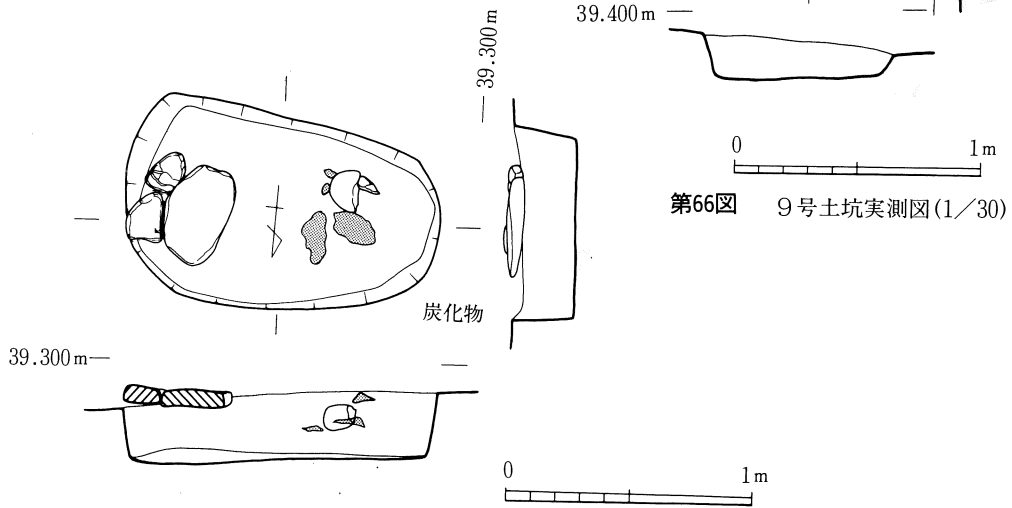
第63図 6号土坑実測図(1/30)



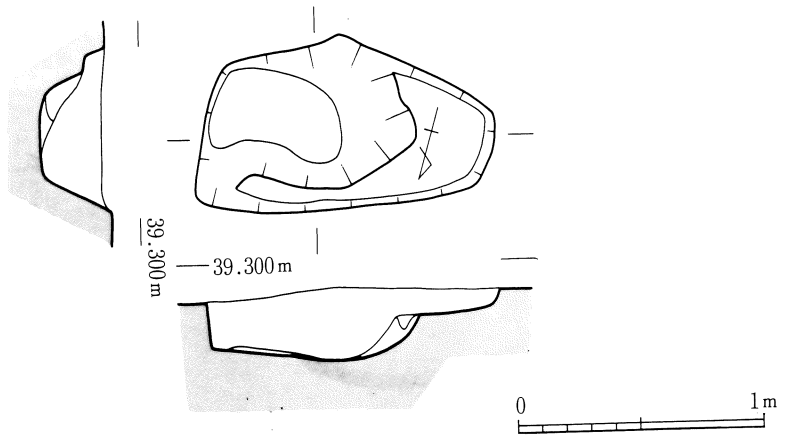
第64图 7号土坑实测图(1/30)



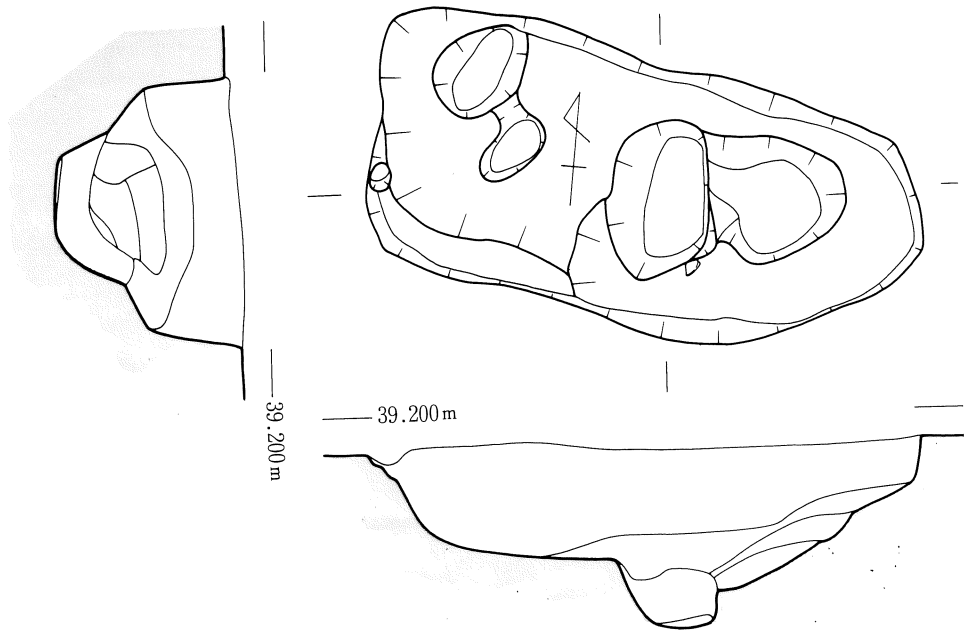
第65图 8号土坑实测图(1/30)



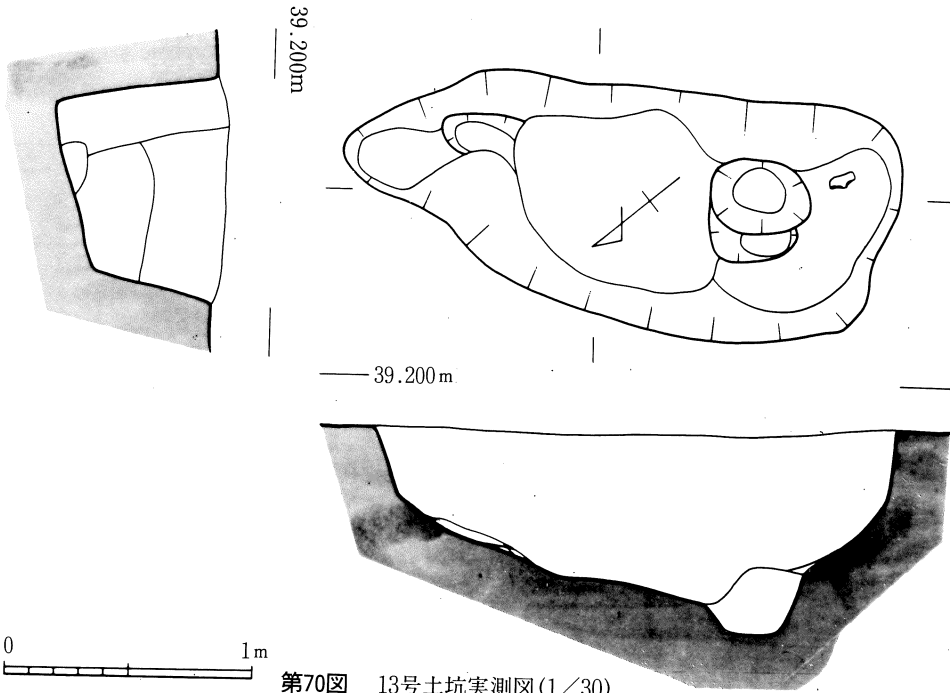
第67图 10号土坑实测图(1/30)



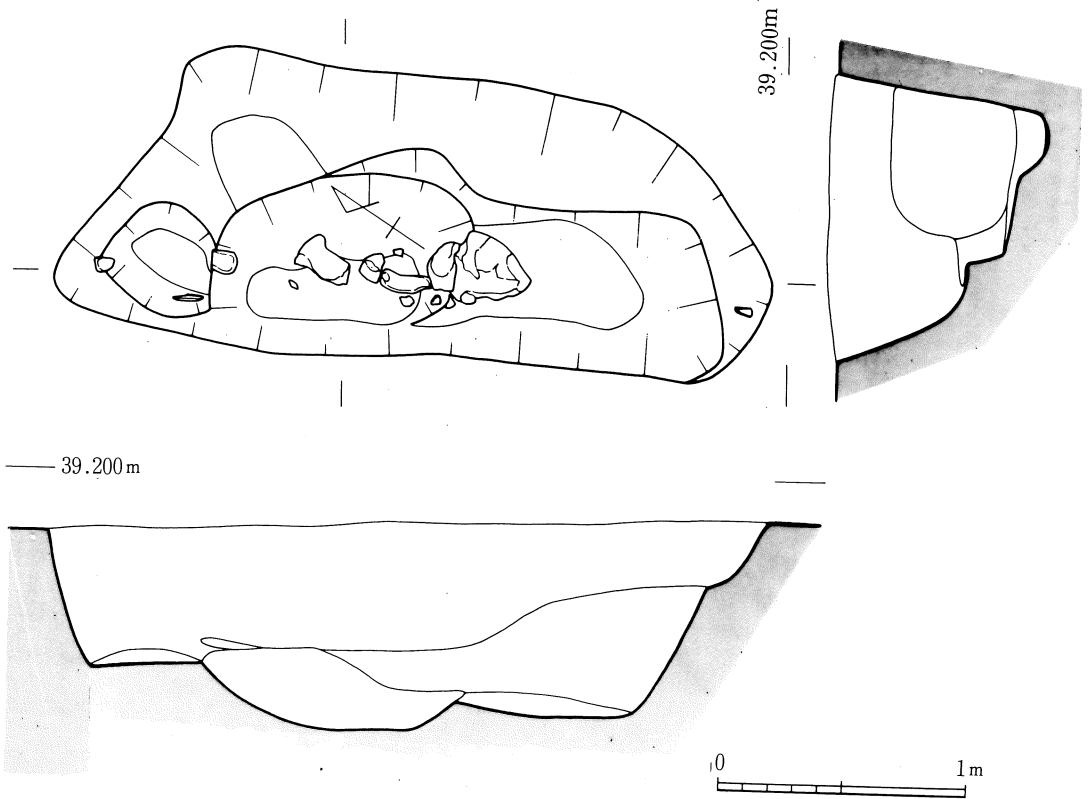
第68図 11号土坑実測図(1/30)



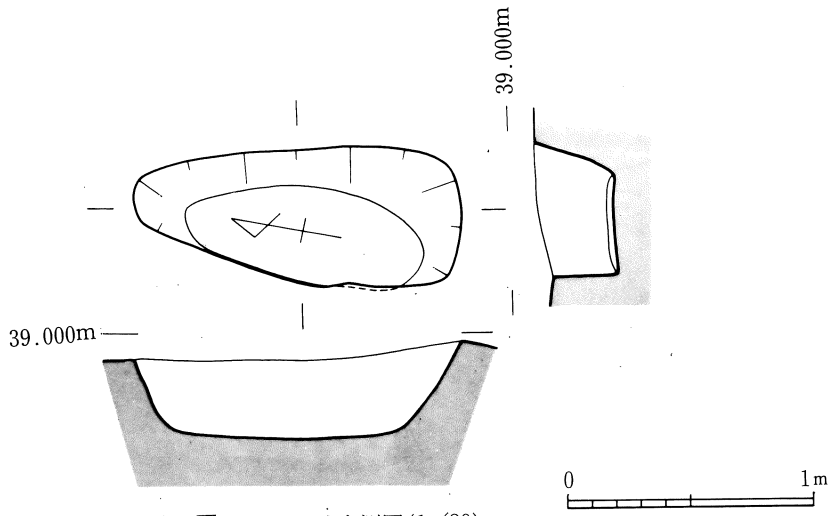
第69図 12号土坑実測図(1/30)



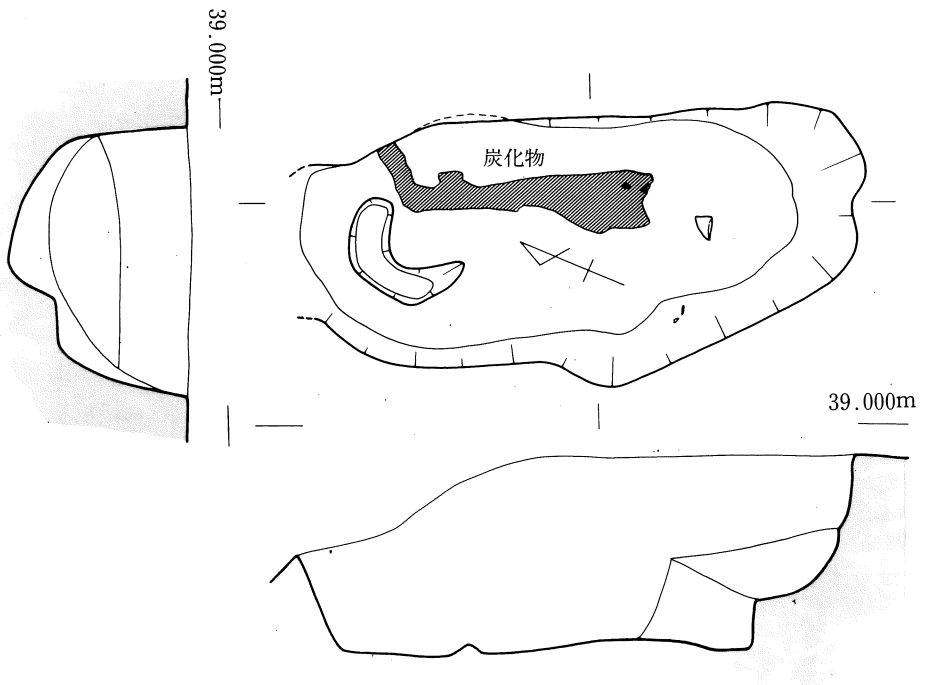
第70图 13号土坑实测图(1/30)



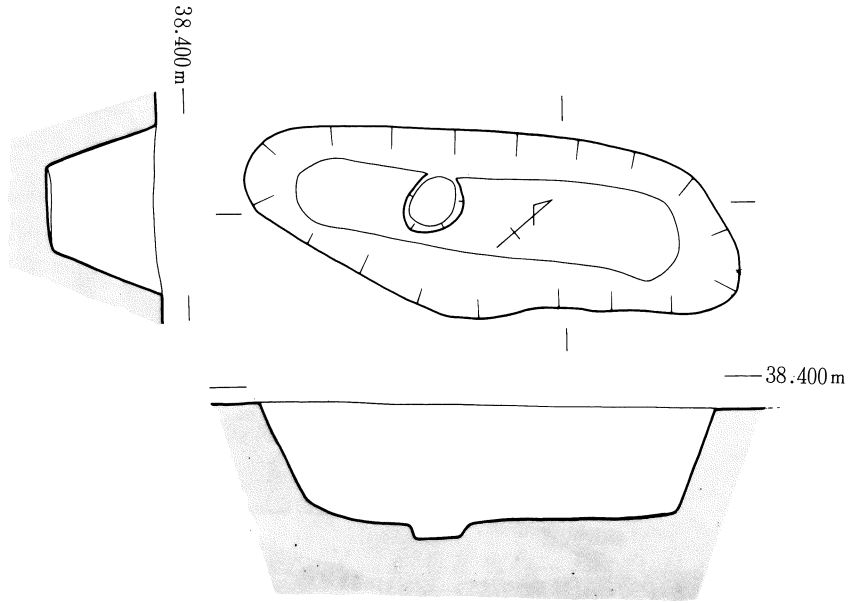
第71图 14号土坑实测图



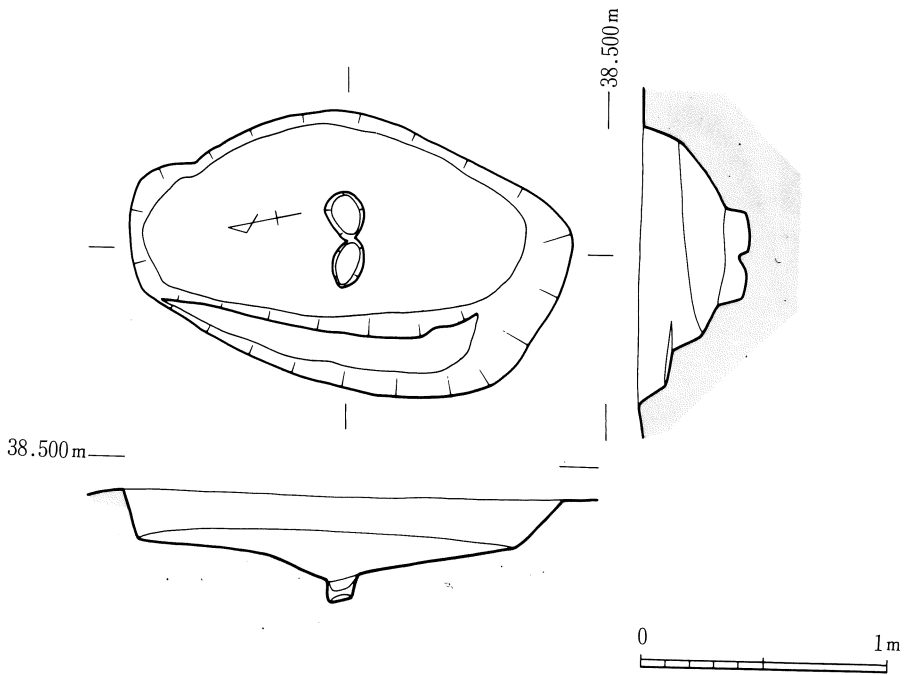
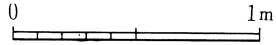
第72図 15号土坑実測図(1/30)



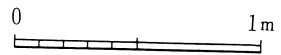
第73図 16号土坑実測図(1/30)



第74图 17号土坑实测图(1/30)



第75图 18号土坑实测图(1/30)



打製石鏃（第77図）

1（12号土壙墓より出土）は無茎で、わずかにえぐりが入っている。剝離については、片面に主要剝離が残り、周辺だけに加工を施している。全体的に作りが荒い。最大長2.3cm、最大幅2.3cm、重さ3.0gである。石材はサヌカイトである。

2（12号土壙墓より出土）は、先端は鋭利で、基部はえぐりが深い。加工は、両面全体に丁寧に行われている。最大長3.0cm、最大幅1.8cm、重さ1.0gである。石材は姫島産の黒曜石である。

3（5号石蓋土壙墓より出土）は、基部は、えぐりが浅く片面に主要剝離面が残っている。また全体的に作りが荒い。最大長1.7cm、最大幅1.6+αcm、重さ0.6g、石材は角閃安山岩である。

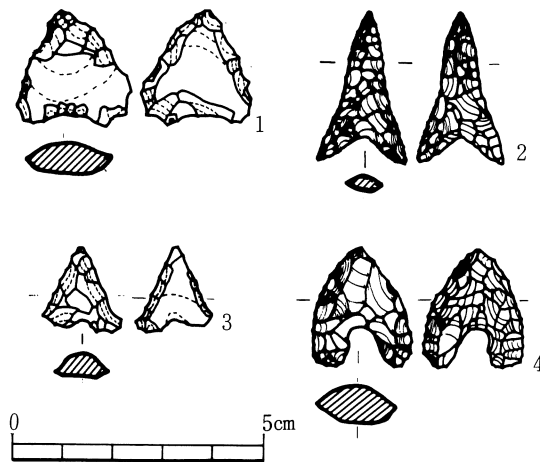
4（4号土坑より出土）は、両面全体に加工が施され、形態としては、鋤先鏃といわれるものである。基部はえぐりが深く作りが全体的に雑である。最大長2.3cm、最大幅2.0cm、重さ1.8gである。石材は姫島産黒曜石である。

以上4点の石鏃は、それぞれの土壙墓、土坑の覆土中から流れ込みの形で検出された。

また、時期については、2、4はその形態より縄文の早期から前期にかけての可能性がある。これは、付近の16号土坑覆土中より手向山式土器（第78図）の破片が出土していることから肯定される。



第76図 14号土坑出土土器実測図（1/3）



第77図 勸助野地遺跡出土石鏃実測図(1/2)
1・2 12号土壙墓 3 5号石蓋土壙墓 4 4号土坑

10) 火葬墓 (第78図)

火葬墓は今回5基出土した。ただし1基は高圧線建設のために破壊されており、原位置は保っていない。骨蔵器は須恵器製4基、土師器製1基である。埋葬方法は、素掘りの土壌内に骨蔵器を正置し、埋土には炭化物を若干含む土を用いている。埋葬時期は、骨蔵器の形態からみて8世紀前半～9世紀初頭ごろと推測される。

1号火葬墓 (第79図) 調査区のほぼ中央、台地の西北端に位置する。石蓋土壙墓、木棺墓などの遺構検出時に確認されたもので、発掘前より墳丘や墓標などの施設は認められない。骨蔵器上半部は開墾により破壊されており、表土直下に検出された。

骨蔵器は、径125cm、深さ50cmの円形墓壙内に埋置し、骨蔵器を取り巻くように河床採取の小砂利をつめ込んでいる。埋土には暗褐色土が用いられており、木炭少片が若干見られる。

骨蔵器内には、蓋部の破片、火葬骨と若干の木炭が見られた。副葬器は、骨蔵器、墓壙内ともに認められなかった。

2号火葬墓 (第80図) 調査区の北側、台地の西北端部に位置する。1号火葬墓の東側4.5mの所で発見された。発掘前には墳丘や墓標などの施設は認められない。骨蔵器の上半分は若干開墾により破壊されており、表土直下で検出された。骨蔵器は径52cm、深さ17cmの比較的大きな円形墓壙内に埋置されており、埋置部分が若干掘り込まれている。埋土には黒褐色土が用いられており、埋土中には木炭小片が若干認められた。

骨蔵器内には、須恵器製の蓋がかぶせてあり、内部に火葬骨が認められた。しかしながら副葬品は、骨蔵器、墓壙内ともに認められなかった。

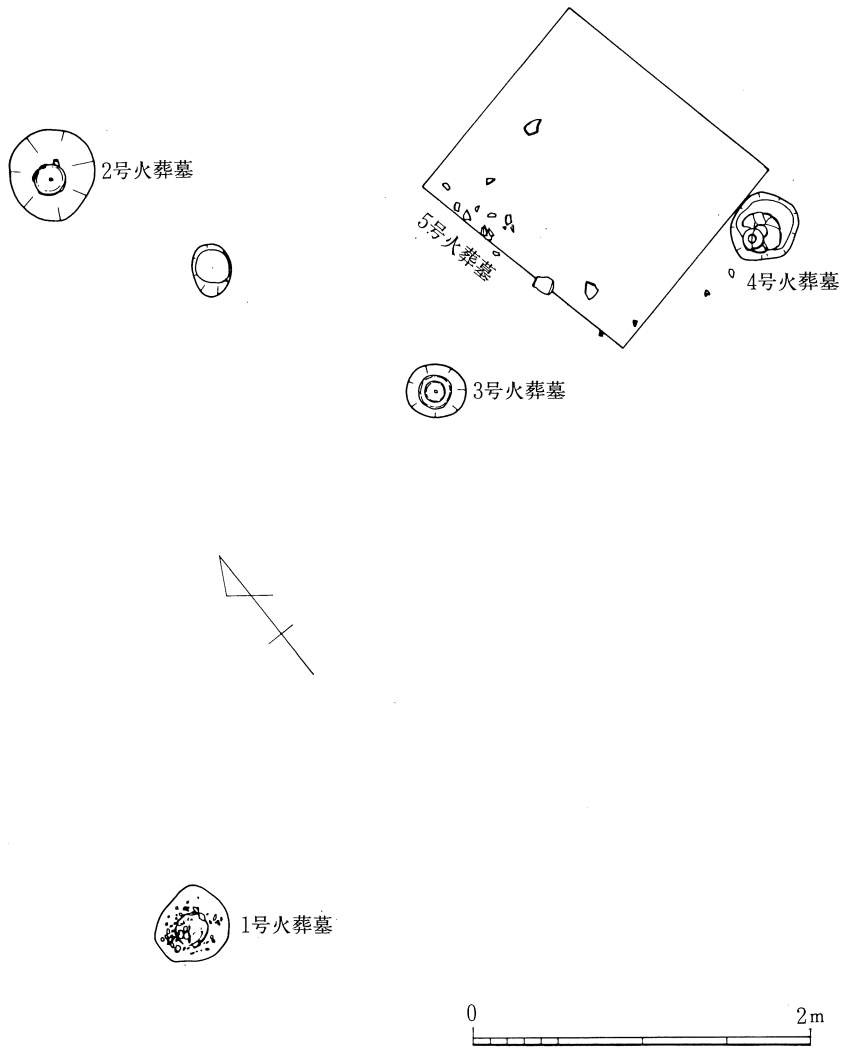
3号火葬墓 (第81図) 2号火葬墓の南側3mの所に位置する。2号火葬墓同様墳丘や墓標などの施設は認められない。骨蔵器は径35cm、深さ25cmの円形墓壙内に埋置されており、埋土には黄褐色土が用いられている。表土直下で検出された。

骨蔵器は、須恵器製の蓋で被っており、内部に火葬骨が認められた。しかしながら副葬品は、骨蔵器、墓壙内ともに認められなかった。

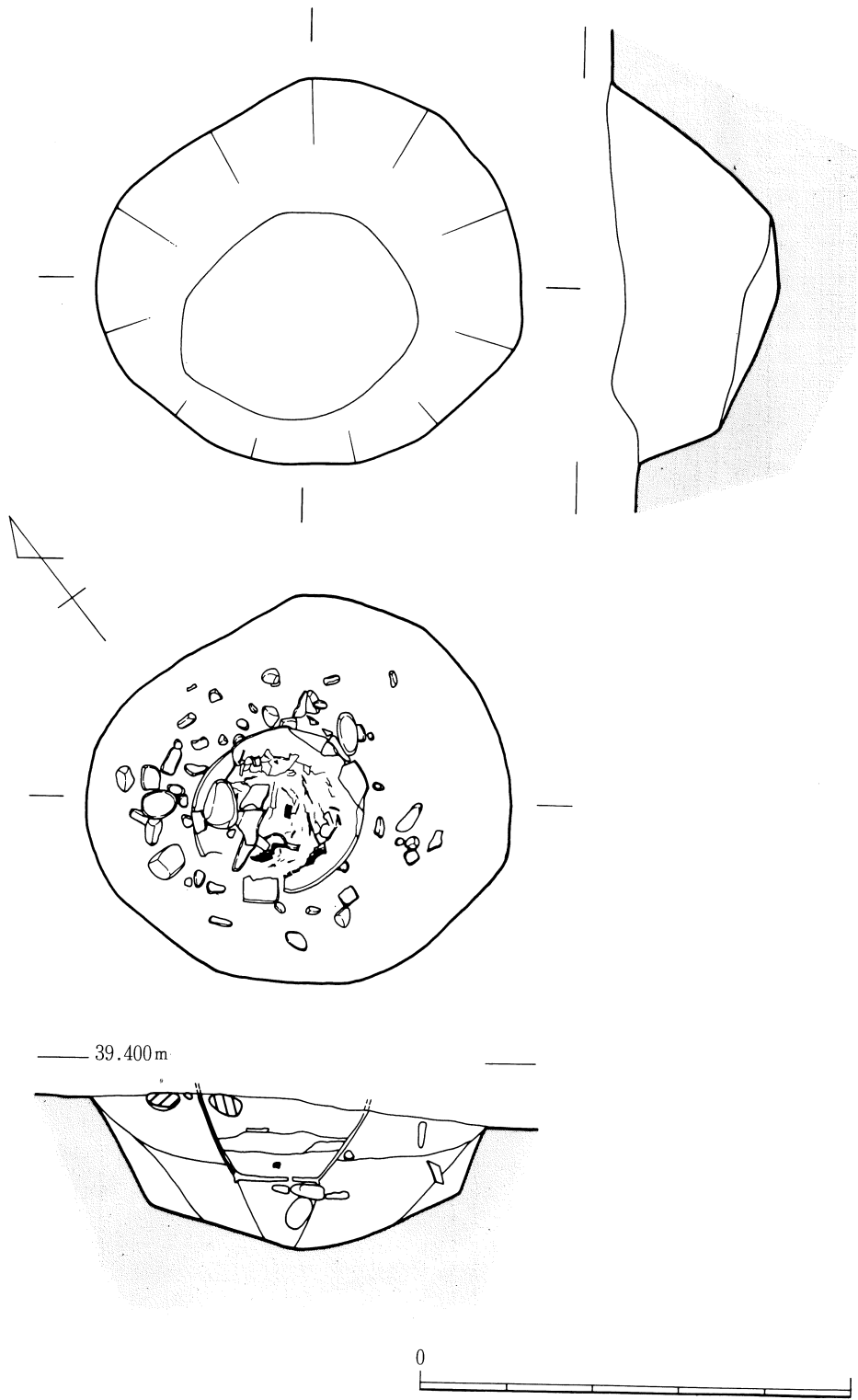
4号火葬墓 (第82図) 2号火葬墓の南東側5mの3号方形墳周溝内に位置する。出土状況などは3号火葬墓とほぼ同様である。骨蔵器は、径40cm、深さ18cmの円形墓壙内に埋置されており、埋土には暗茶褐色土が用いられている。埋土中には木炭小片が若干認められた。

骨蔵器は、須恵器製の蓋を被った状態で検出され、内部に火葬骨が認められた。

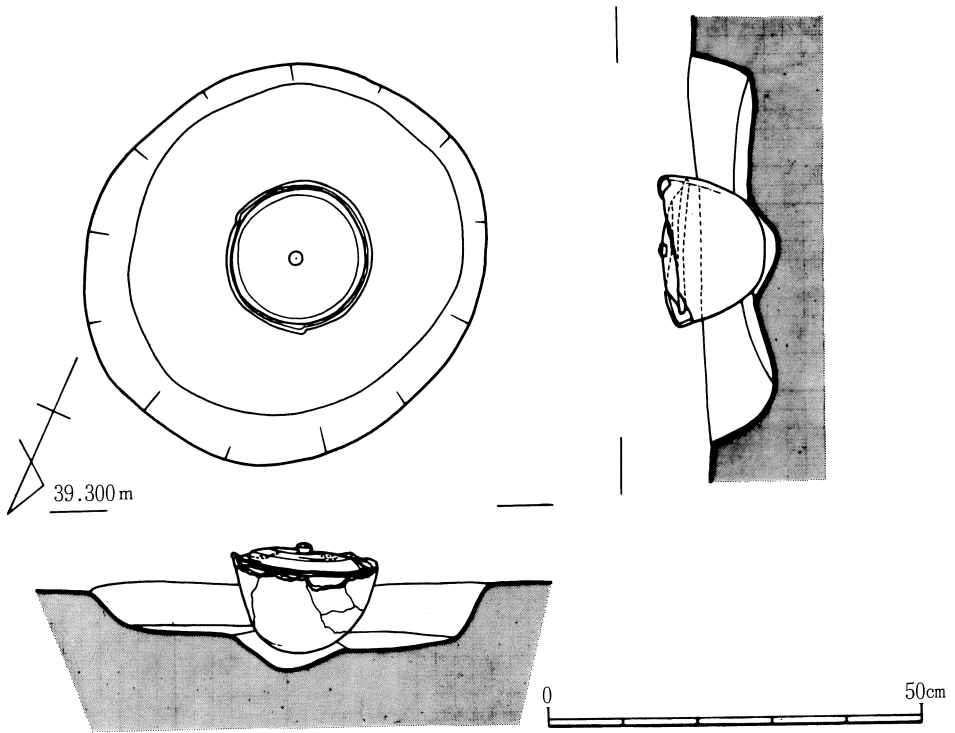
5号火葬墓 2号火葬墓と4号火葬墓のほぼ中間に位置すると思われるが、高圧線を建設する際に破壊をうけており、原位置を保っていない。



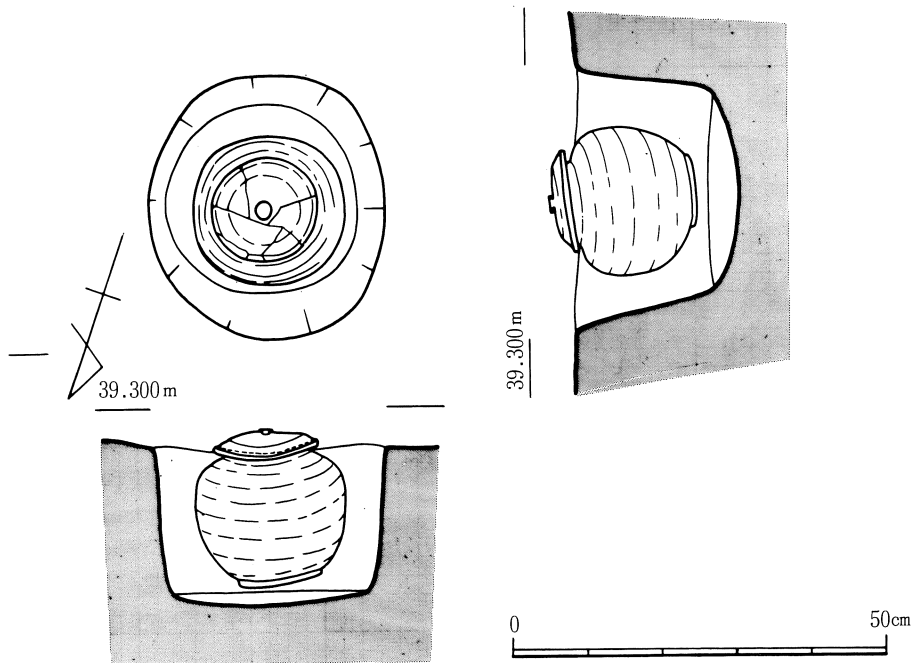
第78図 勘助野地遺跡火葬墓群分布図



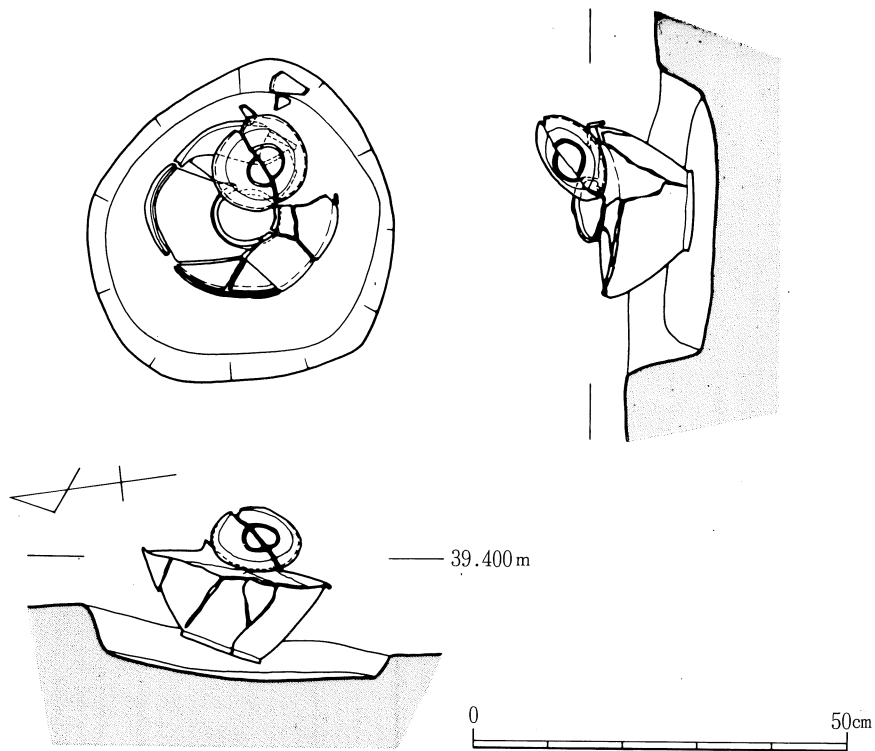
第79图 1号火葬墓实测图(1/8)



第80图 2号火葬墓実測図(1/10)



第81图 3号火葬墓実測図(1/10)



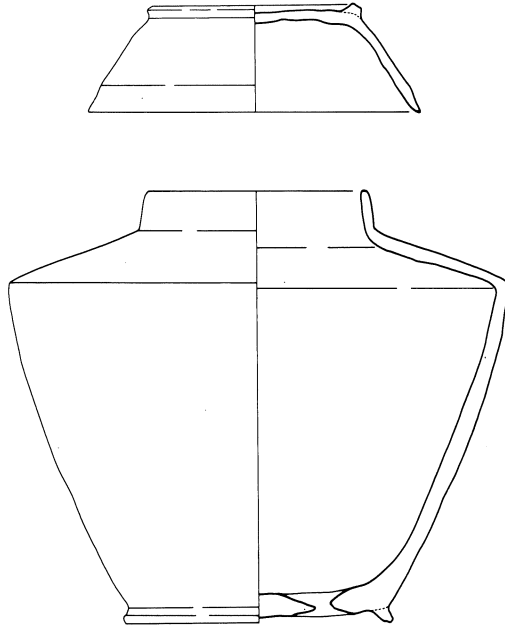
第82図 4号火葬墓実測図(1/10)

骨蔵器

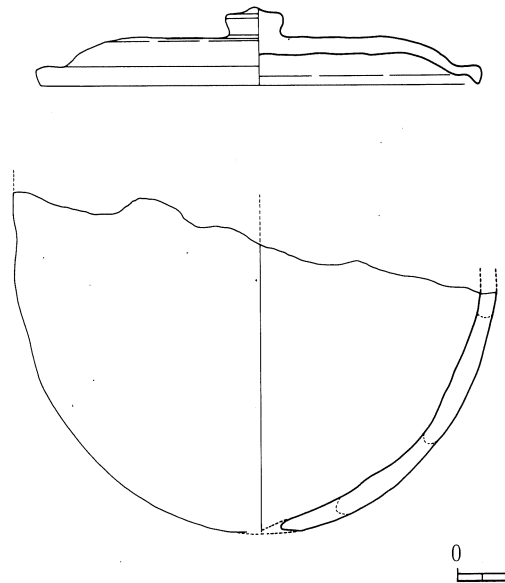
1号骨蔵器 (第83図) 骨蔵器は、上半部がほとんど破損しているが、須恵器製の肩が強く張る短頸壺形土器で、高台が付くものである。器高17.4cm、口径8.8cm、底径10.8cm、最大胴部は底面より13.8cmで径10cm、高台の高さ0.5cmを測る。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈し、硬質である。蓋は小片が検出されたのみである。高台付碗の転用と考えられる。復元口径13.4cmを測る。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈し、硬質である。

2号骨蔵器 (第84図) 骨蔵器は、土師器甕を利用したものである。甕の胴部下半を打ち欠いており、現在径19.5cm、器高14.5cmである。底部は丸底で焼成後の穿孔が認められる。調整は外面が丁寧なヘラナデ、内面が指による丁寧なナデである。部分的に指頭圧痕が見られる。

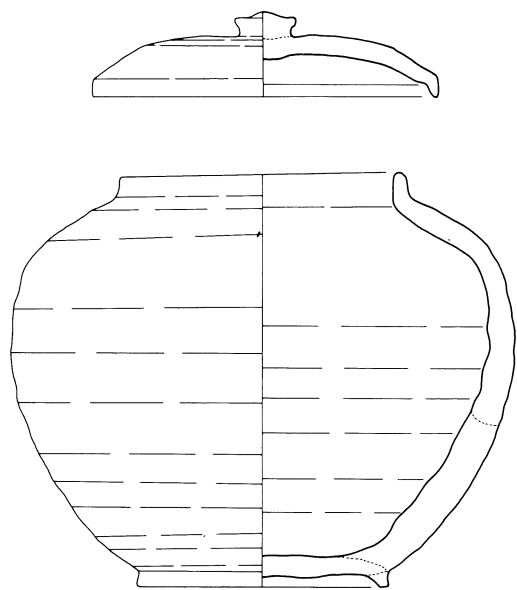
蓋は須恵器碗蓋を転用したもので、口径17.5cm、器高は3.1cmである。形態は扁平な体部からくちばし状にのびる口縁部となり、やや扁平な宝珠つまみがついている。焼成は余り良くなく、内外面とも淡灰色を呈し、やや軟質の土器である。



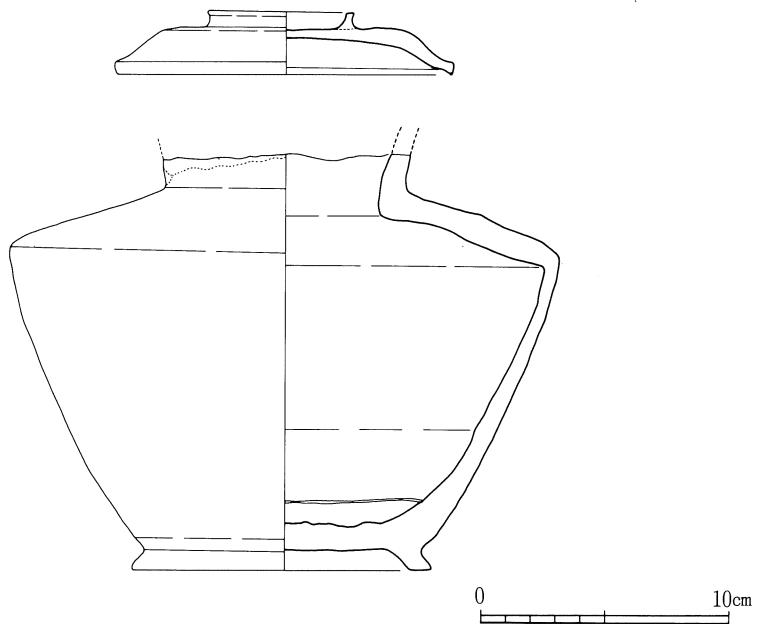
第83図 1号火葬墓骨藏器実測図(1/3)



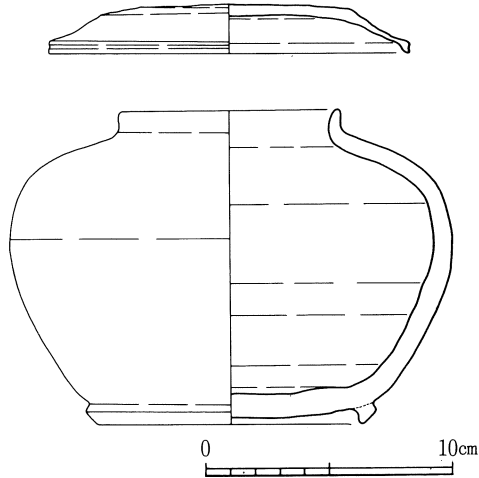
第84図 2号火葬墓骨藏器実測図(1/3)



等85図 3号火葬墓骨蔵器实测图(1/3)



第86图 4号火葬墓骨蔵器实测图(1/3)



第87図 5号火葬墓骨蔵器実測図(1/3)

3号骨蔵器 (第85図) 骨蔵器は、須恵器製の短頸壺で高台がつくいわゆる薬壺と呼ばれる形態である。器高16.6cm、口径11.5cm、高台径10.1cmで高台の高さ0.6cm、胴部最大径はほぼ中央で20.4cmである。焼成はあまり良くなく、内外面ともに淡黄灰色を呈し、やや軟質である。

蓋は須恵器碗蓋を転用したもので、口径14.0cm、器高3.4cmである。やや浅めの体部から直線的に折れる口縁部をもつもので、口縁断面形は三角形を呈す。頂部にやや扁平な宝珠つまみが付つ。焼成は余りよくなく、内外面ともに淡黄灰色を呈しやや軟質のものである。

4号骨蔵器 (第86図) 骨蔵器は、須恵器製の肩部が強く張る長頸瓶形土器で、高台が付くものであり、頸部上半を打ち欠いたものである。現存器高16.7cm、頸部径10.0cm、高台径12.0cm、高台の高さ0.8cm、胴部最大径は頸部より4cm下方で、22.3cmとなっている。焼成は良好で内外面ともに灰黒色を呈し硬質である。

蓋は須恵器碗蓋を転用したもので、口径13.6cm、器高は2.6cmである。形態は扁平な体部からくちばし状にのびる口縁部となり、口縁部はわずかに下方につまみ出されている。つまみは、いわゆる輪状つまみとなっており、直径6.0cmの高台状の凸帯が直線的に上方にのびているのが特徴である。頂部は糸切りの痕跡が認められる。焼成は良好で、硬質の土器である。

5号骨蔵器 (第87図) 骨蔵器は3号火葬墓と同様須恵器製の短頸壺である。器高12.7cm、口径9.0cm、高台径10.8cmで高台の高さ0.3cm、最大径は胴部ほぼ中央で18.0cmである。焼成は良好で内外面灰色を呈し硬質である。

蓋は須恵器碗蓋を転用したもので、口径14.6cm、器高は2.0cmである。頂部は扁平化しており口縁端部はわずかに下方につまみ出されている。頂部が欠けているために、宝珠つまみが付く可能性もある。焼成は良好で、内外面灰色を呈し、硬質である。

小 結

勘助野地火葬墓の様相 勘助野地遺跡では、5基の火葬墓が検出された。調査範囲を考慮に入れるとまだ数基の存在を推定することもできるが、ここでは検出された5基の火葬墓について、時期と特徴についてのべてみる。

5基の火葬墓はすべて素掘りの小土壙に直接骨蔵器を納めたものである。骨蔵器はすべて蓋が他の器種からの転用であり、壙および壙蓋を使用していることから、時期比定に有効である。

5基の火葬墓のうち最も古いのは3号火葬墓である。その骨蔵器の蓋は小田編年のⅦ期に相当するもので、8世紀前半代に比定されている。次に2号火葬墓がつづく。この2号の骨蔵器は蓋に特徴的なくちばし状口縁があり、この技法は、中村浩氏の編年によればⅣ—3段階で初めて出現する。同種のものが平城宮の天平年間の木簡と共伴していることから、8世紀中頃～後半に比定されている。このことから2号火葬墓は、8世紀中頃前後のものと考えられる。

次に1・4・5号火葬墓が出現する。4・5号火葬墓の骨蔵器の蓋はともに口縁端部がわずかにつまみ出されているのが特徴である。

このようにみてくると、勘助野地遺跡の変遷は3—2 $\left\langle\begin{matrix} 1 \\ 4 \\ 5 \end{matrix}\right.$ の順でつくられたものと理解できる。

3. ま と め

1) 1号方形墳出土土師器について

九州における古式土師器の編年は、最近の発掘件数に比例して資料の増加の著しい北部九州、とりわけ福岡平野及び早良平野においてはほぼ確立した観がある。この地域の編年研究は、武末純一氏の論考を先駆にし、山陽新幹線関係の遺跡調査の成果を踏まえ、井上裕弘氏によりその大綱が示された。^{註(1)}その後、より良好な資料の増加により佐々木隆彦氏によって細かな検討がなされている。^{註(2)}氏はまた陶質土器、初期須恵器との共伴関係をもとらえその年代観を示している。^{註(3)}その後、井上裕弘氏は、福岡県御床松原遺跡の調査報告で、詳細な土師器の検討を行っている。^{註(4)}また近年、福岡市有田遺跡、同吉武高木遺跡などで初期須恵器と土師器の共伴例が増加し、絶対年代の有力な手がかりができてきた。^{註(5)}

筑後地域では、武末純一氏によって検討が加えられ、その後、橋口達也氏は、池の上・古寺墳墓群の陶質土器・初期須恵器の検討の中で、共伴する土師器の年代比定を行っている。^{註(6)}^{註(7)}

佐賀平野では、蒲原宏行氏等によって、初期須恵器・陶質土器の編年作業をする中で、佐々木氏の今光・松木編年および井上氏の御床松原編年との対称を行っている。^{註(8)}

豊前地域では、行橋市竹並遺跡の古式古墳群の調査で古式土師器の研究に端を発し、その後、宇佐市川部・高森古墳群の調査で資料の増大を得た。^{註(9)}このような中で、柳田康雄氏は、2世紀後半から4世紀後半までの詳細な編年案を提示している。^{註(10)}一方、大分県内では小柳和宏氏によって、3世紀後半前後の豊前・豊後の編年案が示され、当古墳出土の土師器をⅢA期に比定している。^{註(11)}また近年、行橋市下稗田遺跡・宇佐市別府遺跡などの住居跡や宇佐市糸口墳墓群などにおいて、陶器 TK208 前後に共伴する土師器が出土しており、この地域の古式土師器の編年案も充実しつつある。^{註(12)}^{註(13)}^{註(14)}^{註(15)}

以上のような北部九州及び東九州地域の古式土師器の編年案を参照しつつ、1号方形墳出土の土師器の検討を行って見る。^{註(16)}

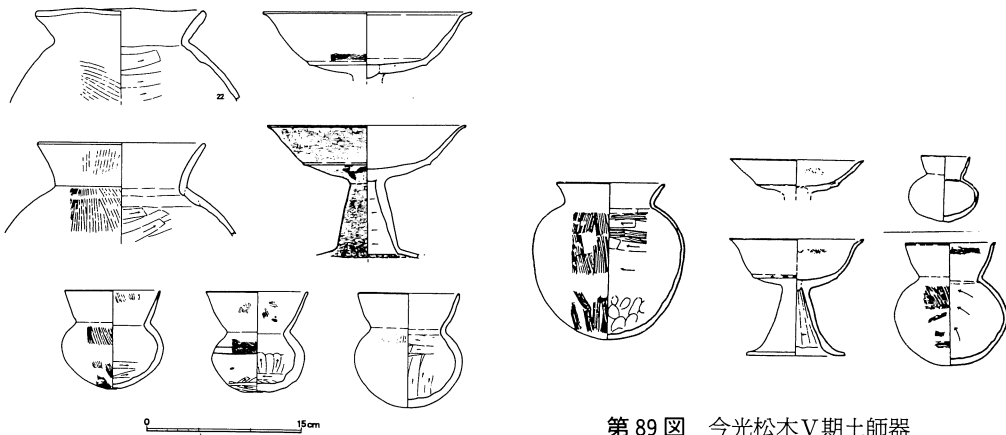
1号方形墳は、その周溝内より、高坏、小型壺、二重口緑壺、「茶臼山型」壺形埴輪、「単口縁」壺形埴輪が出土している。^{註(17)}壺形埴輪については後で検討するが、この土師器群の器種構成を見た場合、特徴的なことは小型丸底壺と小型直口壺が共伴することである。小型丸底壺は最大径が口縁部にあり、やや扁平な胴部を持つものである。これに口縁部が外傾しながら直線的にのびる小型直口壺が共伴する。小型丸底壺と直口壺の共伴例は、今光・松木編年のⅣ・Ⅴ期、御床松原編年のⅤ期に認められるものであり、それ以前には、小型丸底壺のみであり、それ以降には直口壺のみ出土する傾向が認められる。

次に高坏については、坏部はやや深く坏接合部に明確な稜を持ち口縁端部が外反し、脚部が「八」字状に開くA1類（第24図42）と、脚部が外に屈曲し内面に稜を持つA2類（第24図43～45）及び、坏部はやや深く、坏接合部の稜が不明瞭で丸く、口縁部が内湾気味に立ち上がり

端部が外反するB類に分けられる。元来、土師器の中では高坏は時間的屬性が最も強く、その変化が大きく認められ、編年には最も有効である。上記の高坏の特徴を見た場合、A類の特徴は、今光・松木IV期に認められ、B類の特徴は、今光・松木V期の高坏に認められる。なお御床松原V期は、この両類の高坏が含まれてる。以上のことから1号方形墳造営時期は、今光・松木IV～V期、御床松原V期とほぼ同時期と考えられる。ただし、今光・松木V期には、口縁部に最大径を持つ小型丸底壺は認められないところから、二種の高坏の出土は、主体部の数から考えても若干の時期差として考えることもできるが、出土・層位からの確認はできなかった。以上のことから勘助野地1号方墳の時期は、今光・松木IV期新相から同V期の古相とほぼ並行期であると考えられる。

最後に1号方墳の年代を考えて見る。福岡平野では、今光・松木V期の古相に比定される松木140街区祭祀遺構^{註18}からは、朝倉地方の窯で焼いたと考えられる池ノ上I式に属する陶質土器が、同じく今光・松木V期に比定される春日市赤井手43号住居跡^{註19}からは、TK73型式の樽形甗、ジョッキ形土器の把手片が出土しているところから、この時期を5世紀前半に比定できよう。ただし勘助野地1号方形墳の出土土器は、今光・松木IV期新相からV期にかけてのものであり、^{註20}当古墳が5世紀初頭から前半にかけて造営されたものと考えられる。

また、現在までのところ豊前南部地域では池ノ上I式の陶質土器およびTK73型式の須恵器の発見例はなくこの地域で普遍的に須恵器が出現するのはTK208以降と考えられる。ただし、宇佐市春日山古墳に代表されるような大型古墳では今後出土する可能性もあろう。(村上)



第88図 今光松木IV期土師器
(註3より一部改変)

第89図 今光松木V期土師器

2) 壺型埴輪の変遷

勘助野地1号墳の埴裾に樹立してあったと考えられる壺型埴輪は「茶臼山式壺」と通称される二重口縁壺と「朝顔型」に開く単口縁壺の二種がある。この種の壺型埴輪に関しては、近年各地の埋葬遺構からの出土例が報告されてきており、特に「茶臼山式壺」に関しては小口妙子、片岡宏二氏等によって畿内および北部九州地域での編年大綱が示されている。これを参考にしながら東九州の「茶臼山式壺」および「単口縁壺」の変遷を見てみる。

A 「茶臼山式壺」の変遷

茶臼山式壺（以下これを墳墓型二重口縁壺と呼ぶ）の系譜は畿内第V様式の壺に求められる。この種の壺において時間的変化を示す属性として寺沢薫氏は、1) 口縁部水平部分の外反度 2) 口縁部水平部分と外反部分の接合部外面の形状 3) 胴部形態 4) 口縁端部形態 5) 体部内部の調整技法を指摘している。この変化属性をもとに東九州における墳墓型二重口縁壺をみて見ると最も古式に属するものに(1)1次口縁の受部が直角にちかく外反し、2次口縁にかくれる形態から1次口縁の受部の外反度が弱まり2次口縁下に露出する形態への変化(2)二重口縁の接合部が垂下するもの→外方へ突出するもの→突出がなくなるものへの変化(3)体部最大径の上方から下方への移動(4)口縁端部が面取りを行ない外面に端面を持つもの→尖せるか丸く収めるものへの変化と「はねあげ口縁」といわれるつまみ上げによって小さな立ち上がりを形成するもの→明瞭な端面をもたせ上下に肥厚させる変化の二系統の存在(5)体部内面に粘土紐接合痕を残すものから、これをていねいにスリナデるものへの変化を指摘している。これらの変化属性が東九州において全て合致するとは考えられないが変化の方向はある程度理解できるものと考えられる。そこでこの変化属性をもとに東九州における墳墓型二重口縁壺をみて見ると最も古式に属するものは宇佐市川部・高森古墳群赤塚グループ5号方形周溝墓註④および大分市浜遺跡I区3号石棺供献土器群のものである。これは属性(1)~(5)において古相を示しており東九州における墳墓型二重口縁壺の最も古式のものと考えられる。また両者ともに高坏、器台などの小型精製土器と共伴する特徴を持つが属性の方向としては、浜遺跡→川部・高森5号方形周溝墓と考えられる。なお、畿内型の装飾をもつ墳墓型二重口縁壺として赤塚古墳周溝、安岐城下原古墳出土のものがあるが赤塚例は属性(1)、(4)が共通しておりほぼこの時期に収まるものと考えられるが、安岐例は壺型土器を考えるとより古相を示すが、器台の可能性も大きく現在のところ保留しておきたい。

次に、行橋市竹並A区2号方形墳、同H区2号方形墳、大分市浜遺跡I区D-O₂第1集石遺構、同2号石棺出土のものである。これは属性(1)~(5)において新相を示しており、特に属性(1)においては1次口縁部の外反度が弱まり、竹並H-2号墳例に至っては頸部と1次口縁部との境が不明瞭になりつつある傾向が認められる。この時期においても小型精製土器と共伴するが、単独あるいは「単口縁壺」と共伴する傾向が強くなる。属性の方向としては竹並A-1号

方形墳・浜Ⅰ区D—O₂集石遺構・浜2号石棺—竹並H—2号墳となるが、浜2号石棺と竹並H—2号墳の間には若干のヒアタスが考えられる。

墳墓型二重口縁壺の最も退化したものに、勘助野地1号方形墳がある。これは寺沢の属性分析にはないものである。属性(1)に関しては1次口縁が完全に退化し頸部から直接2次口縁につながる。(3)に関しては長胴化する(4)は口縁端部を尖せながら丸く収めている(5)に関しては体部内面に粗いケズリかユビによる粗いナデが認められる。

以上属性の変化をもとに東九州の墳墓型二重口縁壺を編年すると次のようになる。

Ⅰ期……浜Ⅰ区3号石棺・川部・高森赤塚グループ5号周溝墓

Ⅱa期……浜Ⅰ区D—O₂第1集石・2号石棺、竹並A—2号墳

Ⅱb期……竹並H—2号墳

Ⅲ期……勘助野地1号墳

となる。

次に北部九州および畿内地方の墳墓出土資料と比較するとⅠ期に相当するものに福岡県峠山1号墳、同藤崎1・7号方形周溝墓・大願寺古墳、大阪加美3・4・14号方形周溝墓、奈良箸墓古墳出土例などにそれぞれ相当するものである。小口編年Ⅱ期に相当する。

Ⅱa期に相当するものに奈良桜井茶臼山古墳、Ⅱb期に相当するものに三国の鼻1号墳、池ノ上3号墳^{註28}があげられる。さらに胴部形態等から金立銚子塚・老司古墳が新相を示す。特に両古墳出土例は属性(3)において長胴化するという特徴が認められⅡc期としてとらえられよう。この期は小口編年のⅢ期にほぼ相当するものであるが、小口編年ではⅣ期として大阪御旅山古墳と金立銚子塚あるいは老司古墳出土例を並行関係に置いているが、御旅山出土例は1次口縁部を形成しない特徴をもち、これは勘助野1号墳に見られるような後出する時期の特徴であり、金立銚子塚、老司古墳は一時期古いものとする。Ⅲ期に相当するものに前述した御旅山古墳、熊本長目塚古墳、勘助野地1号墳^{註29}があげられるが属性の方向としては御旅山古墳—勘助野地1号墳・長目塚と考えられる(第89図編年表参照)。

最後にⅠ～Ⅲ期の年代について若干考えてみよう。Ⅲ期とした勘助野地1号墳は、前述したように出土土師器から5世紀前半に比定することができることからⅢ期を5世紀初頭から前半に位置づけられる。Ⅱ期についてはa・b・cに区分できることからやや長い時期が想定される。この内、Ⅱc期と位置づけた老司古墳と同型の壺型埴輪が嘉穂郡穂波町沖出古墳より出土しており、沖出古墳からは舟型石棺、碧玉製腕装り等の出土があり4世紀後半～末にさかのぼる可能性がある。またⅡa期に比定される桜井茶臼山古墳は4世紀前半～中頃前後に考えられておりⅡ期を4世紀前半～末に比定することができよう。さらにⅠ期を箸墓古墳等から考えて3世紀末～前半に比定して大過ないものと思われる。

B 「単口縁壺」の変遷

朝顔型壺の出現は、墳墓型二重口縁壺より若干遅れている。壺型埴輪編年Ⅰ期後半あるいはⅡa期に比定される峠山1号墳において小型精製土器、墳墓型二重口縁壺と共伴して出土している。これは胴部下半を欠損するものであるが、口縁部は朝顔型に開き口縁端部をつまみ上げる特徴を持つ。調整は内外面ともハケによる調整である。これよりやや新しいと考えられるものに竹並A-8号墳例がある。これは、峠山例に比べ口縁端部のつまみ上げの特徴は消失するものの胴部は球形を呈し内外面の調整は同一である。胴部下半に円孔状の焼成後穿孔がある。また当例では主体部である箱式石棺の足部付近に供献されており墳墓型二重口縁壺とは、その使用方法は若干異なる部分が認められる。

次に壺型埴輪編年Ⅱb期に相当するものに三国ヶ鼻1号墳例、池ノ上1号墳、同3号墳例がある。これは器形が前期のものに比べ若干長胴化し、胴部内面にヘラケズリが施される。池ノ上例では、底部に焼成後穿孔が行なわれている。また、池ノ上1号墳では小型精製土器と共伴し、三国ヶ鼻・池ノ上3号墳例では墳墓型二重口縁壺と共伴している。時期的には、池ノ上1号墳・三国ヶ鼻1号墳→池ノ上3号墳の属性変化は認められるがほぼ同時期と考えられる。

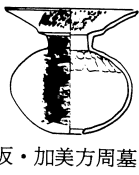
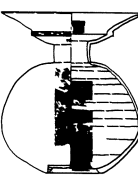

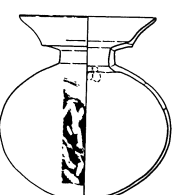

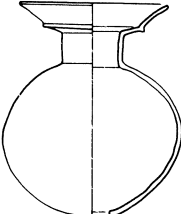
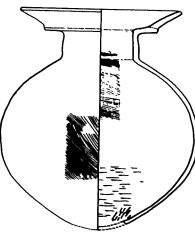
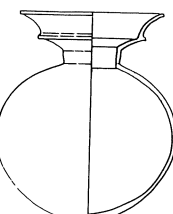
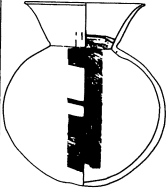
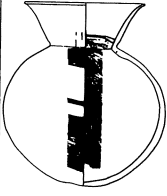
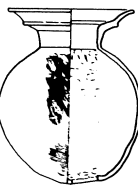
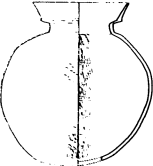
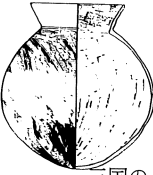
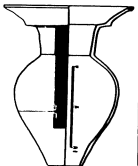
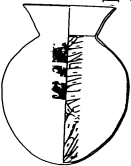
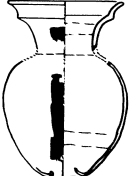
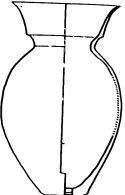
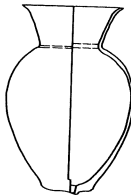
Ⅱc期に相当するものに老司古墳例がある。これはⅡb期に比べさらに長胴化の傾向が著しくなり底部も焼成前穿孔となる。さらにⅢ期になると口縁部が長くなり、胴部内面調整に円筒埴輪等に見られる指による荒いナデ（一見ケズリ風）が認められたり、熊本県長目塚例に見られるように幅広の粘土帯による巻上げが口縁部に見られるように円筒埴輪の製作技法の影響を強く受けるようになる。この時期をもって壺形埴輪は終焉をむかえるのである。

また、墳墓型二重口縁壺はその成立の頭初から底部焼成前穿孔があり、製作時より古墳の墳丘を飾る器として成立しているのに対して朝顔型壺はⅡc期まで底部焼成前穿孔はなく竹並例が示すように供献用土器としての機能を有していたものと考えられる。三国ヶ鼻の例においても朝顔型壺が一例のみ出土していることもこれを裏づける。池ノ上3号墳例以降に墳墓型二重口縁壺あるいは円筒埴輪とともに墳丘を飾る器となる。ただし、主流は墳墓型二重口縁壺、あるいは円筒埴輪であり朝顔型壺の出土量は少なく副次的なものであったと考えられる。（第85図参照）
（村上）

3) 副葬品の鉄器について

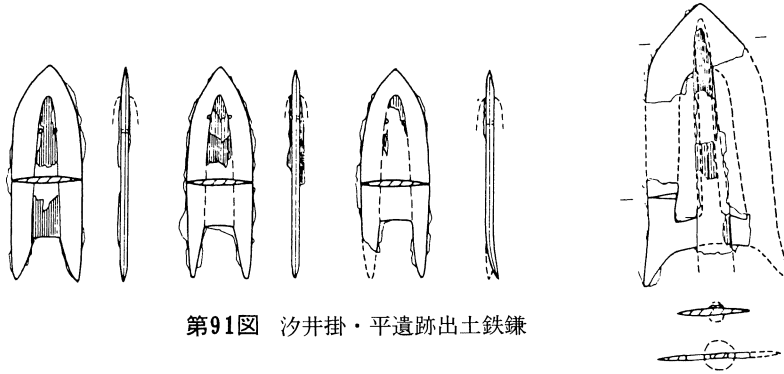
勘助野地遺跡では、1号墳1号主体（箱式石棺）より鉄剣、鉄鎌、鉄鋤先、鹿装刀子、蕨手刀子が、同2号主体（組合式木棺）より鉄鎌が、7号土墳墓より鉄斧、柳葉形鉄鋸が、3号石蓋土墳墓より有透孔長、三角形式鉄鋸、鉋がそれぞれ出土している。全体的に量は少なく鉄器の副葬された主体部は一定程度選ばれた墓であることが考えられよう。

さて、これらの鉄器のうち最も古い時期に位置づけられるものに7号土墳墓出土の鉄斧、柳

器種	地域	畿内	北部九州	二重口縁壺および同壺型埴輪		単口縁壺
				東九州		九州
				豊前	豊後	
I		 大阪・加美方周墓	 津古生掛古墳	 川部・高森5号周墓	 浜1区3号石棺	
II a		 奈良・桜井茶白山古墳	 竹並A-2号方形墳	 浜D-O ₂ 第1集石	 竹並A-8号墳	峠山1号墳 
II b		 三国の鼻1号墳	 竹並H-2号墳		 三国の鼻1号墳	
II c		 老司古墳			 池ノ上3号墳	
III		 大阪・御旅山古墳		 勘助野地1号方墳		 勘助野地1号方墳

縮尺不統一

第90図 壺型埴輪編年表



第91図 汐井掛・平遺跡出土鉄鎌

葉形鉄鎌および3号石蓋土墳墓出土の有透孔長三角形式鉄鎌、鉈がある。このうち有透孔長三角形式鉄鎌は、管見の限りでは汐井掛遺跡D-162木棺墓出土例が一例のみであり、汐井掛例に比べ、本例は、大きさがやや小型し、腸挟りが台形に近く深いのが特徴である。この腸挟りの形状および大きさに近似するものに京都郡豊津町平箱式石棺墓出土の無茎長三角形式鉄鎌がある。これは有茎鎌、夔鳳鏡片と共伴しており、両遺跡を調査した児玉氏は汐井掛例→平例の順に考えている。時期は豊後における鏡片廃棄の時期を考慮し、弥生後期終末前後と推測されるが、古墳時代に下がる可能性もあるとしている。近年県下の鏡片廃棄の時期は布留式古段階まで下がる例もあり、平例も古墳時代前期（4世紀代）に比定される可能性は大きい。したがって3号石蓋土墳墓も4世紀代に比定されうるものと考えられる。なお、共伴した鉈については古瀬清秀氏の研究に従えばB-II類にあたり弥生時代終末から古墳時代前期のもので先の年代を裏づける証左となろう。次に7号土墳墓出土の大型の柳葉型有茎鉄鎌は、汐井掛D-162号木棺墓、京都椿井大塚山古墳等で出土しており、7号土墳墓も4世紀代に比定しうるものである。

次に1号墳1号主体出土鉄器のうち鉄鎌は都出比呂志氏の研究によれば曲刃鎌B-2類に分類でき5世紀前半代に比定される。また鳩尾状の柄を持つ蕨手刀子も類例が少なく、管見の範囲では、遠賀郡福岡町手光3号墳、京都郡豊津町惣社古墳、宇佐市糸口古墳、大分市野間10号墳など東九州一帯に分布する特徴を示す。時期は手光3号墳、糸口古墳、野間10号墳が5世紀前半、惣社古墳は4世紀後半代に位置づけており、勘助野地1号墳出土の土師器・壺型埴輪勘助野地と同1号主体部出土の鉄器との年代観は矛盾しない。（村上）

4) 副葬品の玉類について

当遺跡では、1号墳1号主体より水晶製勾玉、同算盤玉、ガラス製管玉、同小玉が、3号主体よりガラス製小玉が、5号土壙墓より軟質の碧玉製勾玉、管玉が出土している。このうち水晶玉については福岡県下では、副島邦弘^{註40}、児玉真一氏の研究がある。これによると福岡県下では弥生時代後期末から古墳時代初頭^{註41}に出土している。大分県下では大分市浜遺跡2号石棺で出土しており4世紀中頃～後半代のものであり当例より若干古い年代を示しており当例は、若干の伝世を考えるべきであろうか。次に軟質の碧玉製玉類に関しては、福岡県沖ノ島祭祀遺跡^{註41}において4世紀後半～5世紀初頭にかけて硬質の碧玉から軟質の碧玉へ変化する傾向が見られるところから5号土壙墓も4世紀後半～5世紀初頭のものと考えられる。(村上)

5) 勘助野地墳墓群の変遷とその性格

勘助野地墳墓群は、前述したように次の3グループに空間的に分離することができよう。すなわち、1号方形墳+1～2号石蓋土壙墓+1～2号土壙墓のグループ(第1グループ)、2号方形墳+1～2号土壙墓のグループ(第2グループ)、3号方形墳+3～5号石蓋土壙墓+12号土壙墓(第3グループ)となる。この空間的グルーピングが則時間的同時性を満たすかどうかは一明な部分が多いが、2号方形墳では試掘調査時に周溝より4世紀代に比定される特殊器台の少片が出土しており、また前述したように第2グループに属す、3号木蓋土壙墓、5号土壙墓より4世紀代の柳葉形鉄鏃、碧玉製玉類が出土しており、この空間的グルーピングがある程度の時間的整合性を持つものと考えられる。

このような3つのグループのうち最も早く出現するのが、丘陵の頂部に位置する第2・3グループである。この両者の前後関係については、全面発掘でないので決定し難いが、第3グループの3号石蓋土壙墓出土鉄器が若干古くまで遡る可能性はある。なお、周辺の土壙墓群では、第2グループが木棺墓+土壙墓(木蓋を含む)と構成されるのに対して第3グループでは石蓋土壙墓3+土壙墓1というように集団間で墓様式に差が生じていることに気づく。これに続き5世紀初頭から前半にかけて1号方形墳を中心とした第1グループが出現する。第1グループは1辺約14m前後の方形墳+石蓋土壙墓2基+土壙墓2基で構成されており方形墳は中心主体を箱式石棺、副主体を石蓋土壙墓、組合式木棺としているところから当墳墓群では、箱式石棺と石蓋土壙墓・木棺墓・土壙墓間においてその被葬者間の階層差が明確に著われていることが理解できる。すなわち、3つに分離されたグループの一単位により強力な個人を有する特定近類者集団の墳墓とすることができる。さらに第1グループでは強力な特定個人(石棺の規模あるいは副葬品に鉄鏃が含まれないこと^{註42}から大人の女性の可能性が高い)は箱式石棺、この特定個人と強い血縁関係を持つ子供は石蓋土壙墓、何らかの血縁関係を持つ個人(木棺の規模・鉄鏃の副葬から大人の男性の可能性が高い)は木棺墓、一般共同体成員は、石蓋土壙墓、土

墳墓というようにまさに特定個人との関係で墓の様式が決定されるような強力なヒエラルヒーを認めることができよう。

さて、この種の中・小規模墳墓については、九州地域では弥生時代終末頃より顕在化してくる。この種の墳墓の性格について福岡市宮の前墳丘墓の調査者の一人であった下条信行氏は、その報告書の中で、共同群集墓→特定近親者集団墓→突出個人を有する特定近親者集団墓→（一墳多棺）という発展段階を設定し、宮ノ前C地点墳丘墓をその最終段階と位置づけた。その後、氏はさらに論を進め、弥生終末期の墳墓を特定個人を含む近親者集団墓（宮ノ前、名子道2号、平塚古墳など）をA型とし、A型を支える共同体成員の集団墓（八並、野方、中原、日佐原など）をB型とし、A・B両型は同時存在する階層的な重層関係にあると指摘している。^{註43}

小田富士雄氏は、このような指摘を考慮した上で、北部九州を中心にして西日本地域の弥生終末期から古墳時代前期にわたる発生期古墳の地域相を詳細に検討している。氏は、特定家族とその近親者の墳墓の段階をI期とし、特定個人墓は出現するが、その家族あるいは近親者が墳墓の中心部を離れた周縁区域に埋葬される段階をII期、完全な特定個人墓の段階をIII期、特定個人墓がより強力な首長墓的性格を備えた段階をIV期とする変遷をたどる。氏はさらに墳墓祭祀の「群」から「個」への変化を指摘しこの見解を補強している。^{註44}

これらの見解をもとに豊前南部の弥生時代終末から古墳時代前期までのこの種の墳墓の変化を見てみよう。まず、弥生時代終末には宇佐市京徳遺跡がある。この遺跡は、詳細な報告ではないが、標高20m前後の低位段丘の西端傾斜地に石蓋土壙墓36基、土壙墓11基の計47基が検出された。その中には小児用の小型墓も含まれるが、甕棺墓・石棺墓は見られない。調査範囲には祭祀遺構等は存在しないが、石蓋及び墓壇内に土器を埋置した例が3基認められている。ここでは墓の様相あるいは副葬品から突出した特定集団あるいは個人は認められないが、特定個人に対する祭祀が行なわれている。続いて京徳遺跡とはほぼ同時期と考えられるものに宇佐市本丸遺跡がある。これは石蓋土壙墓10基、土壙墓3基、割竹型木棺墓1基、甕棺墓1基の計15基が、標高40mの平地を見降す丘陵先端部に営まれており、そのうちの1基の石蓋土壙墓から舶載雲雷文内行花文鏡が出土している。ここでは突出した集団を認めることができ、副葬品から突出した特定個人の萌芽は認められるが、集団墓を形成する点あるいは墓形式に差が認められないことなどからこの段階（弥生時代終末前後）まで突出した個人の出現はないが、突出した特定集団は認められる。

古墳時代初頭前後（土器編年では庄内新段階～布留古段階）になると宇佐市川部・高森古墳群中に方形溝墓群が出現する。赤塚グループ1号方形周溝墓は一辺10.8mを測り、中央に長さ1.8m幅0.5mの箱式石棺があり、棺内より熟年女性人骨一体、舶載禽文鏡・碧玉製管玉・鉄剣・ガラス玉が検出された。周溝内より土師器椀形土器も発見されている。この方形周溝墓は、1979年の圃場整備事業中に発見されたもので、筆者は発見の現場に立ち会ったがその折に周溝

内より石棺材片が多数認められ、石蓋土墳墓あるいは石棺の存在が考えられる。これらのことからこの時期より突出した特定個人（首長的性格を持つ）とその近親者が認められるようになる。なお、この中心主体である箱式石棺は、弥生時代以来の伝統的墓制と考えられているが、豊前南部地域に限って考えれば規格的な箱式石棺は（現在のところ）前述した弥生終末期の墓制には認められず、方形墳（方形周溝墓）あるいは前方後円墳の成立をもって箱式石棺が主体部の墓制として採用されるものとする。一方、これとほぼ同時期と考えられる集団墓と考えられる集団墓に下毛郡三光村岡崎遺跡^{註60}がある。これは鉄鍬、鉄鋤先の出土からほぼ古墳時代初頭に位置づけられるが、ここでは石蓋土墳墓2基、箱式石棺1基で構成される集団墓である。副葬品は箱式石棺にのみ農具のみみられ、特定個人とその近親集団としての墓制がこの段階まで残っている。つまり下条氏の指摘するようにA類型とB類型は重層構造をとりながら豊前南部地域では古墳時代初頭まで継続している。

最後に勘助野地墳墓群の性格について考えてみよう。この種の墳墓の性格については19年に恵子若山遺跡において高橋徹氏が指摘したように小地域を統括する在地首長とすることができ、葬送儀礼（壺形埴輪等を墳丘にめぐらす）から考えて畿内政権の末端組織を荷なう官僚とその近親者とすることができよう。（村上）

- 註1) 武末純一「古文化談叢」一第5集—1978年九州古文化研究会
- (2) 井上裕弘他「山陽新幹線埋蔵文化財調査報告第7集」一下巻—福岡県教育委員会1978年
- (3) 佐々木隆彦編「今光・地余遺跡」1980年東急不動産株式会社 佐々木隆彦編「松木遺跡Ⅰ」一下巻—那珂川町教育委員会1984年
- (4) 註(3)に同じ
- (5) 井上裕弘「御床松原遺跡」志摩町教育委員会1983年
- (6) 酒井仁夫・武末純一「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告」XIX 福岡県教育委員会1977年—
- (7) 橋口達也「池の上墳墓群」甘木市教育委員会1979年
 同 「古寺墳墓群Ⅰ」 ” 1982年
 同 「古寺墳墓群Ⅱ」 ” 1983年
- (8) 蒲原宏行・多多良友博・藤井伸幸一「古文化談叢」一第15集—九州古文化研究会1985年
- (9) 佐田茂他「竹並遺跡」竹並遺跡調査会1979年
- (10) 真野一夫『えとのす』29 1985年
- (11) 柳田康雄「一森貞次郎古稀記念—古文化論集」下巻 森貞次郎古稀記念論集刊行会1982年
- (12) 玉永光洋・小柳和宏「楠野遺跡」大分県教育委員会1983年
- (13) 昭和62年に宇佐市教育委員会によって調査された堅穴住居址で、東側にカマドを持つ住居跡で、TK208の須恵器とともに土師器も多数出土している。宇佐市教委小倉正五氏御教示
- (14) 長嶺正秀他「下稗田遺跡」下稗田遺跡調査会
- (15) 佐藤良二郎「糸口墳墓群について」第50回古文化研究会発表要旨
- (16) 5世紀代の土師器については、山口市西遺跡においてTK216およびTK208の須恵器と共伴する土師器の良好なセットが認められる。この報文も参考にさせていただいた。
 菅波正人「西遺跡」1986年山口市教育委員会
- (17) 壺形埴輪には、口縁部が二重口縁になるものと単口縁になるものに二種がありここでは、二重口縁

→「茶白山型」、単口縁→「朝顔型」として仮称する。

- (18) 澤田康夫「松木遺跡Ⅰ」—上巻— 那珂川町教育委員会1984年
- (19) 橋口達也「古寺墳墓群Ⅱ」1982年 甘木市教育委員会1982年
- (20) 須恵器の開始の年代については、田辺昭三氏は、5世紀前半、都出比呂志氏は「前期古墳の新古と年代論」の中で、埼玉県稲荷山古墳出土の銚劍銘にある辛亥年を A. D. 471年とし、稲荷山古墳出土の須恵器をTK47型式並行とし、それ以前にTK73~TK23までに4型式あること、TK209とTK217の間に A. D. 600年の年代をあてはめ、TK47との間にMT15~TK209までの4型式を設定した時、1型式20~25年としてTK47からTK73までを逆算するとTK73は A. D. 400年前後あるいは5世紀前葉におけるとしている。
- 白石太一郎氏は、稲荷山古墳の須恵器を銚劍銘と共伴した馬具などの形態からMT15型式の古い段階として、MT15以前にTK73~TK47の5型式を設定しMT15の初現年代を5世紀末におき、須恵器の初現年代を4世紀末~5世紀初頭としている。
- 田辺 昭三「須恵器大成」角川書店 1981年
 都出比呂志「考古学雑誌」日本考古学会 1982年
- 白石太一郎「岩波講座 日本考古学Ⅰ」1985年 岩波書店
 関川 尚功「樞原考古学論考」10 1984年 樞原考古学研究所
- (21) 片岡宏二・小口妙子『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市教委 1985
- (22) 寺沢薫『矢部遺跡』奈良県教委 1987
- (23) 真野和夫「赤塚古墳とその周辺」『エトノス』29 1985
- (24) 真野・渋谷忠章他『浜遺跡』大分県教委 1980
- (25) 玉永光洋・小林昭彦他『安岐城跡』大分県教委 1988
- (26) 佐田茂他『竹並遺跡』竹並遺跡調査会 1979
- (27) 註(24)に同じ
- (28) 註(21)に同じ
- (29) 橋口達也『池ノ上墳墓群Ⅰ』朝倉町教委 1983
- (30) 森山栄一「阿蘇谷の埴輪」エトノス22号 1983
- (31) 福岡県教育委員会新原正典氏の御教示による。昭和63年度7月23日に行なわれた筑豊教育事務所管内文化財指導者講習会発表要旨
- (32) 児玉真一『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財報告書第2集』1980
- (33) 児玉真一「福岡県京都郡豊津町平遺跡発見の箱式石棺墓と副葬品」『九州考古学』No. 55 1980
- (34) 古瀬清秀「古墳出土の銚の形態的変遷とその役割」『考古論集』1977
- (35) 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』51 1967
- (36) 伊崎俊秋・宮小路賀宏『手光古墳群Ⅰ』福岡町教委 1981
- (37) 松岡史「惣社古墳」『辛木遺跡』1980
- (38) 宇佐市教委 小倉正五・佐藤良二郎両氏の御教示による。
- (39) 賀川光夫・小田富士雄『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚』大分県教委 1965
- (40) 副島邦弘『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII』福岡県教委 1977
- (41) 岡崎敬他「沖ノ島」沖ノ島遺跡刊行会 1980
- (42) 森浩一編『日本の古代12、女性の力』中央公論社 1987の中で、前期古墳の中で、女性を埋葬した古墳で、刀剣類の副葬は一般的だが甲冑と鉄鏃、銅鏃を副葬したものは見られないという共通性があるという指摘があり、注目すべきものである。
- (43) 下条信行『宮ノ前遺跡(A~D地点)』福岡県労住協組合 1971
- (44) 同「北部九州の弥生時代終末前後の墳墓」『古文化談叢』4 1978
- (45) 小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相—総括にかえて—」『古文化談叢』4 1978

- (46) 小田富士雄「弥生時代北部九州の墳墓祭祀」『古文化談叢』10 1978
- (47) 小倉正五「宇佐の弥生時代墳墓」『えとのす』29 1985
- (48) 小倉正五「弥生人の豪華なペンダント」『エトノス』29 1985
- (49) ここでは、方形周溝墓という名称を調査担当者の名称をそのまま使用した。
- (50) 渋谷忠章他『宇佐市川部・高森地区避距緊急発掘調査概報』Ⅱ 1979
真野和夫『赤塚古墳とその周辺』『エトノス』29 1985
- (51) 1984年大分県文化課玉永光洋氏の調査によるものである。詳細な報告は別にゆずる。
- (52) 高倉洋彰・高橋徹『恵子若山遺跡』恵子遺跡調査会 1975

この小文をまとめるにあたっては、高橋徹、吉田寛、田中裕介氏の御教示と激励をいただいた。また、小柳和宏氏とは有益な対論も行われた。深く感謝する。



1号方形墳（東側より）



1号方形墳（西側より）



1号方形墳西側周溝



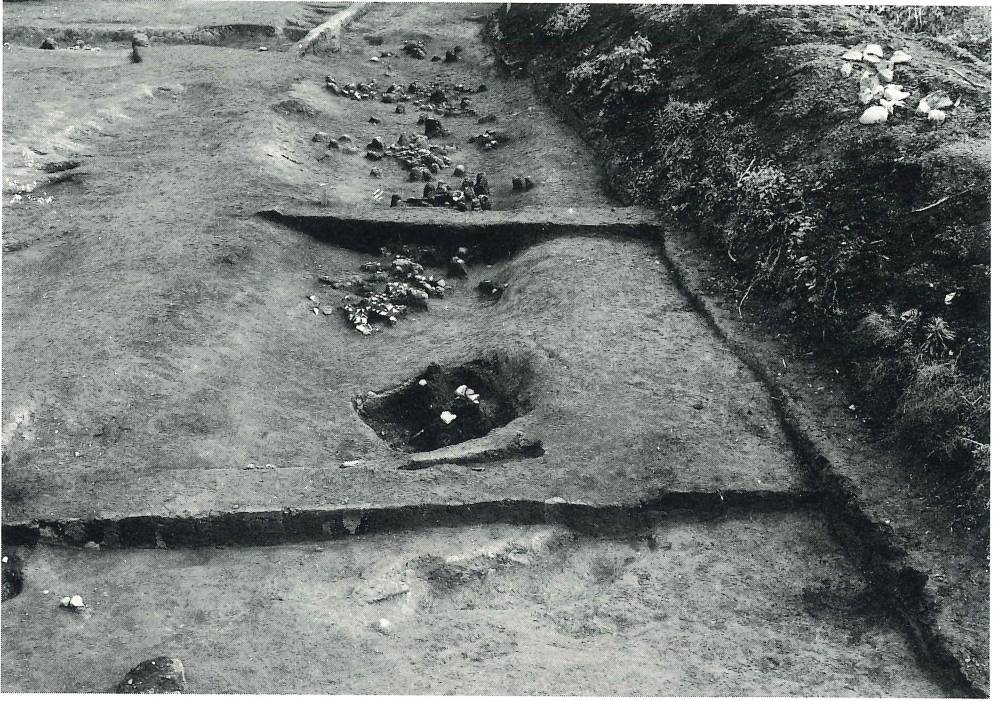
1号方形墳南側周溝



南側周溝土層および棺材叩き石出土状態



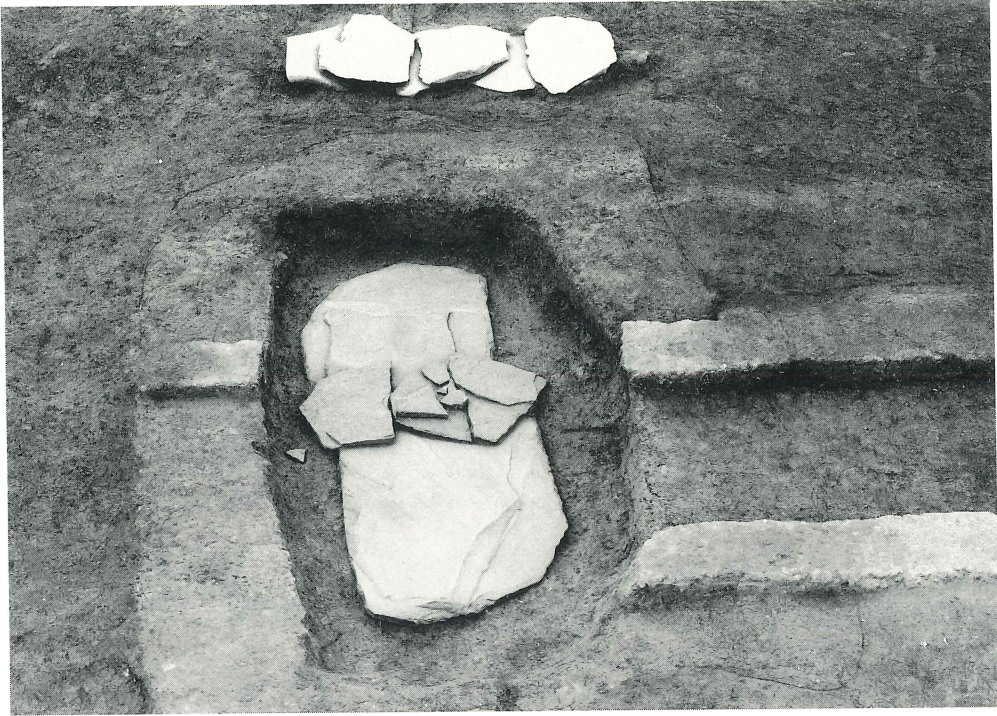
北側周溝土層



1号方形墳東側周溝



1号方形墳北側周溝



1号主体部（東側より）



1号主体部目貼り状態



1号主体部遺物出土状態



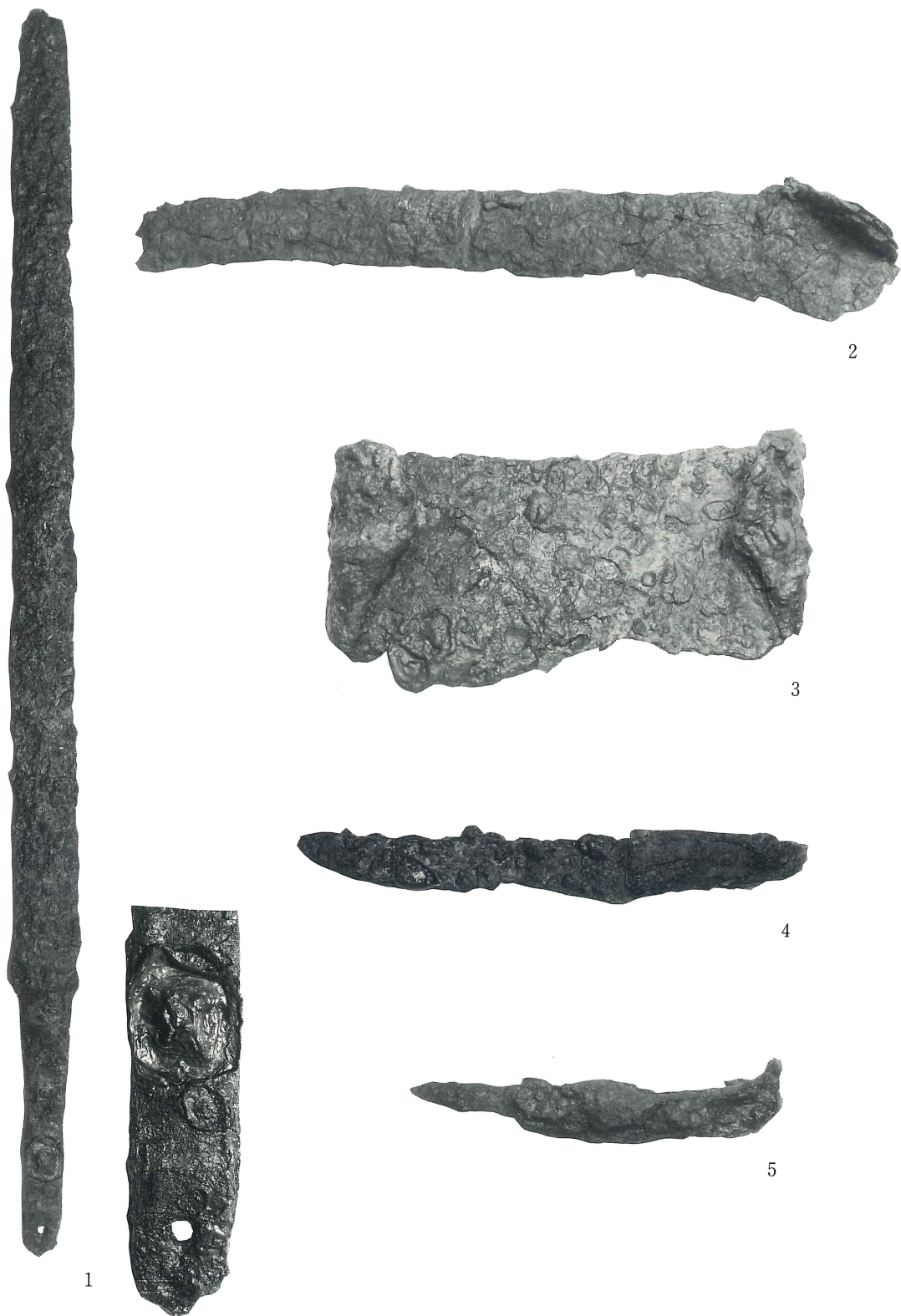
1号主体部玉類・鉄剣出土状態



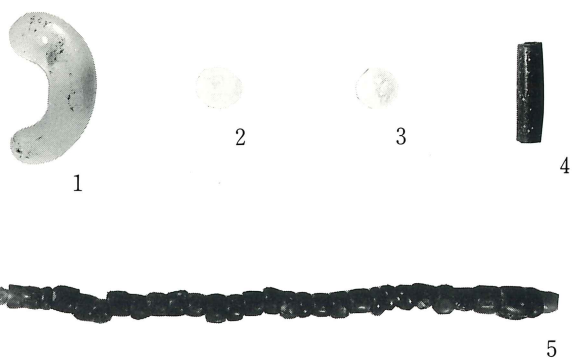
1号主体部鉄鋤・鉄鎌出土状態



1号主体部櫛棺外出土状態

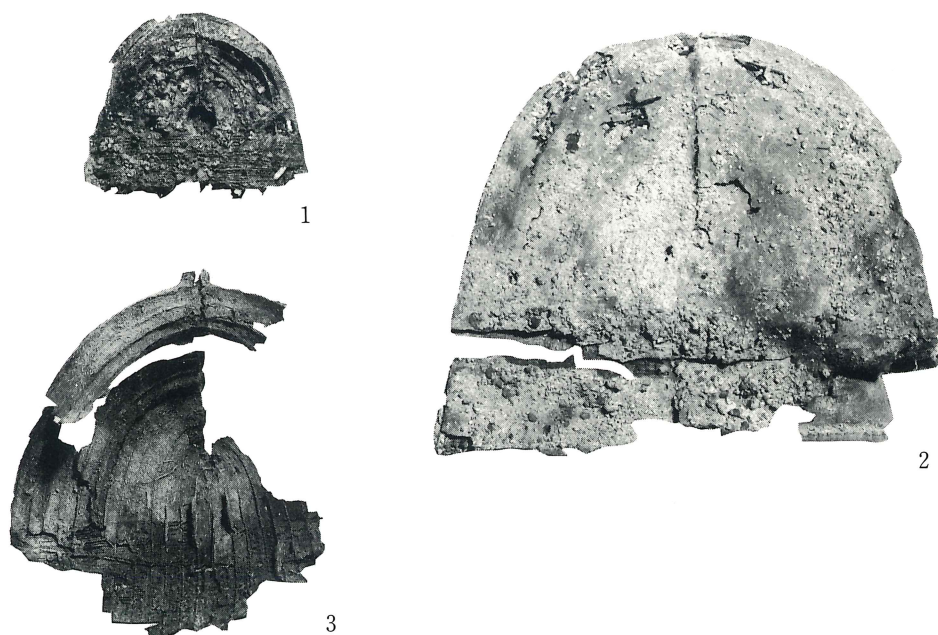


1号主体部出土鉄器 1 鉄剣 2 鉄鎌 3 鉄鋤 4 鹿角装刀子 5 蕨手刀子



1号主体部出土玉類

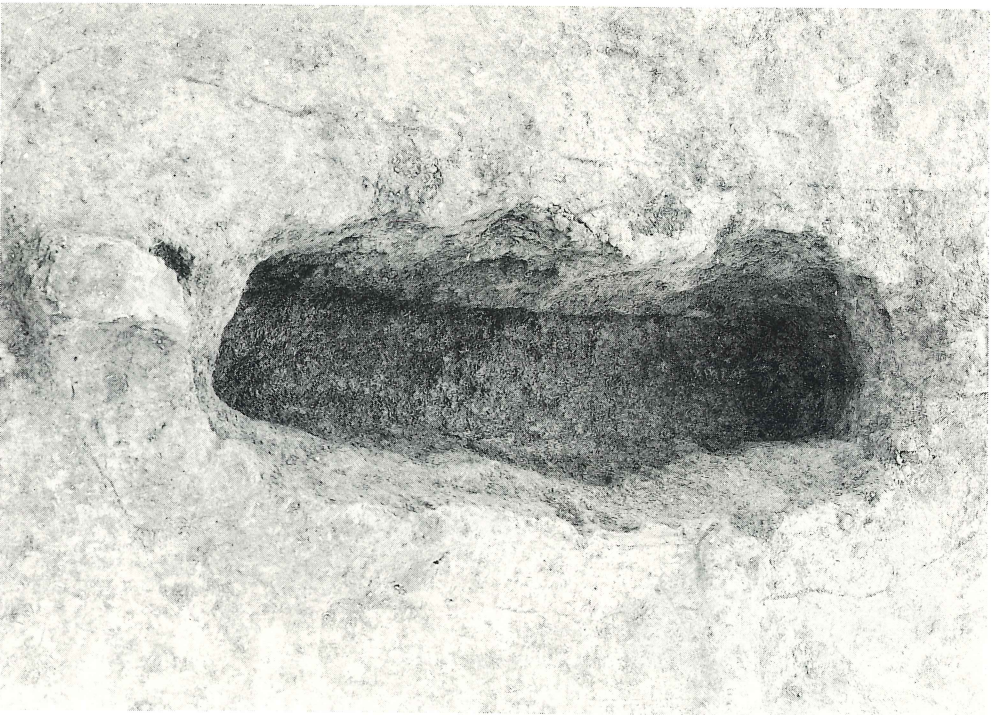
- A群 1 水晶製勾玉 2 同算盤玉 3 同丸玉 4 ガラス製勾玉 5 ガラス小玉
 B群 6 水晶製勾玉 7 ガラス小玉



1号主体部出土櫛 1 棺外出土 2、3 棺内出土



2号主体部（西側より）



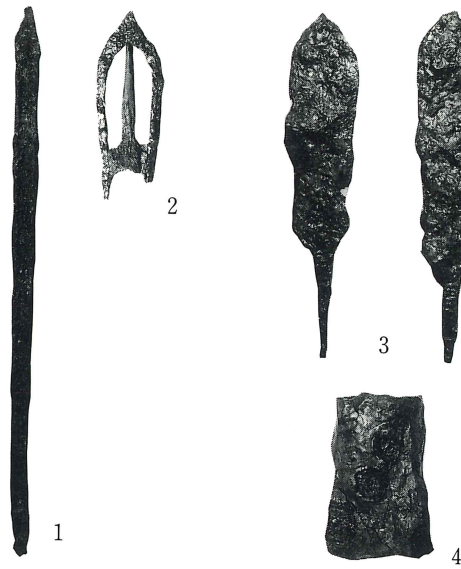
2号主体部石蓋徐去後（西側より）



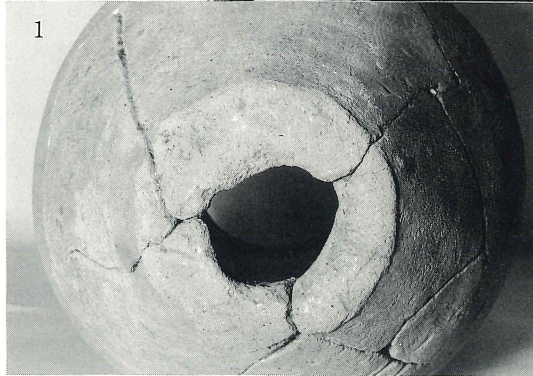
3号主体部（北側より）



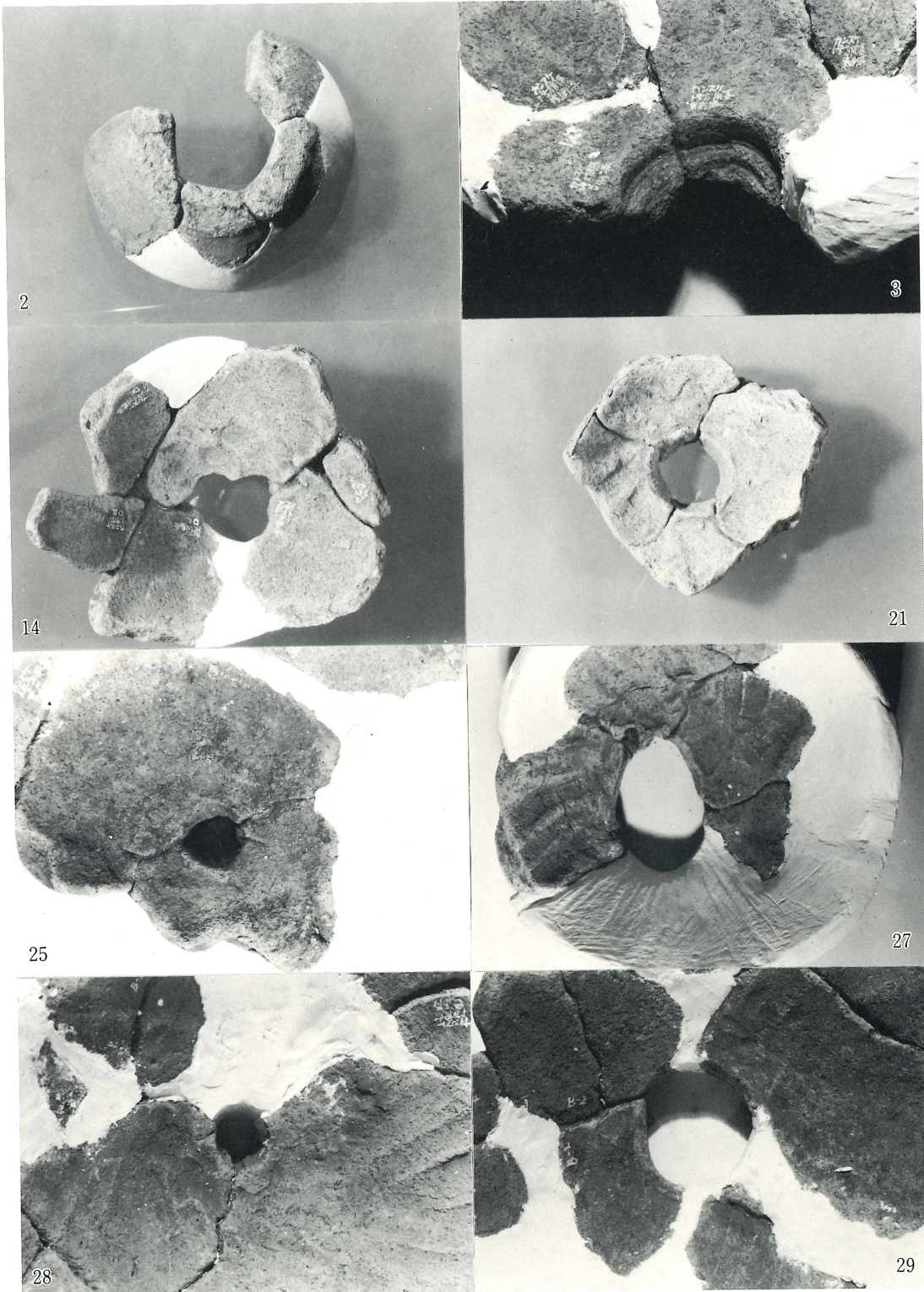
土壙墓・石蓋土壙墓群調査風景（西側より）



3号石蓋土墳墓出土鉄器
 1鉄鉋 2鉄鋸 3鉄鋸 4鉄斧
 7号土墳墓出土鉄器



壺形埴輪 調整技法



壺形埴輪底部穿孔の各種



1



13



15

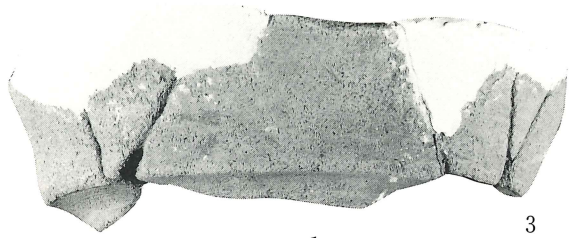


20

壺形埴輪①

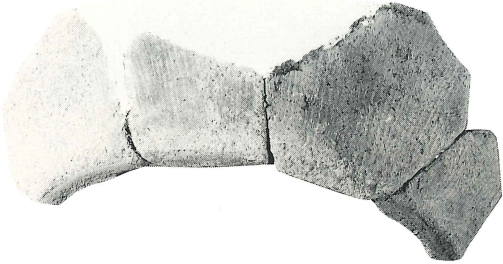


2

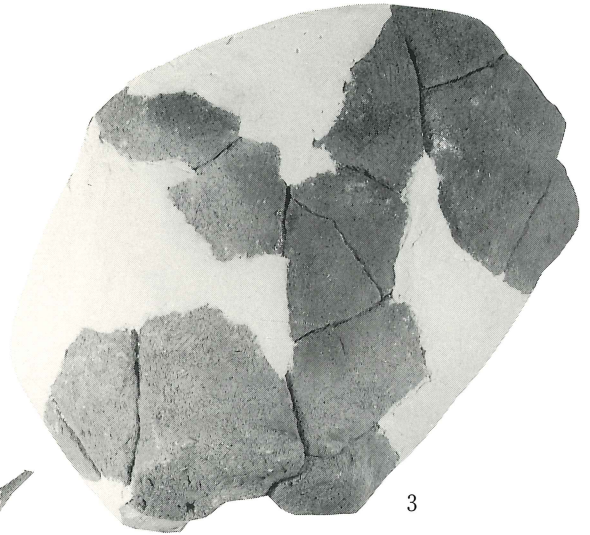


1

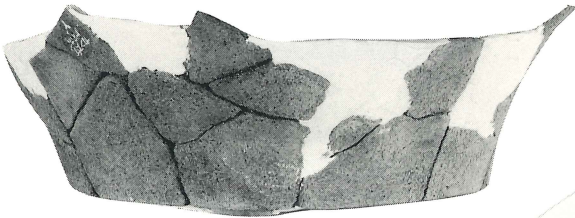
3



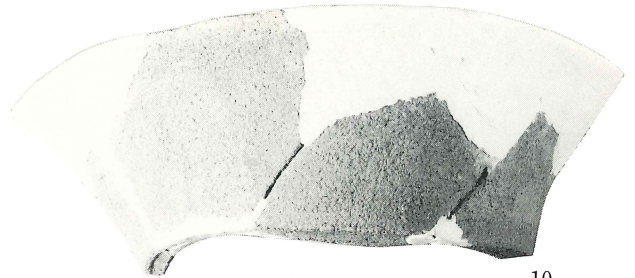
7



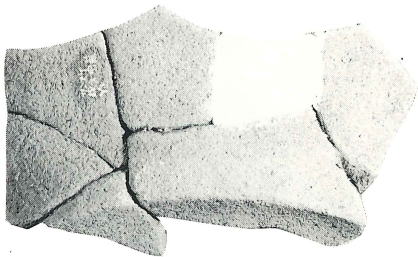
3



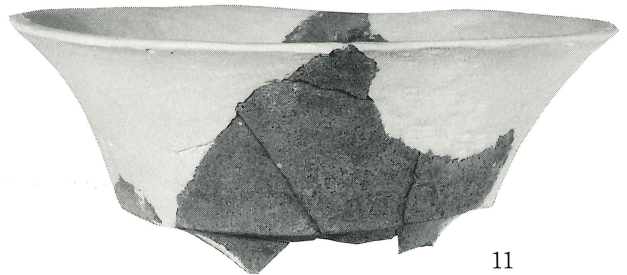
8



10



9

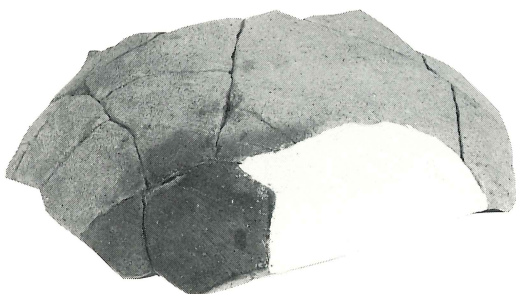


11

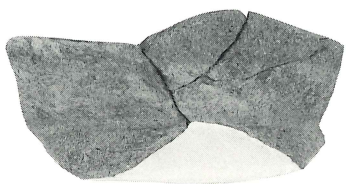
壺形埴輪②



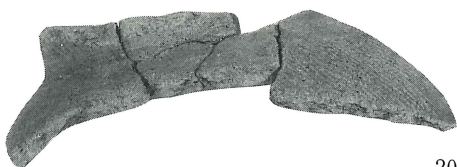
14



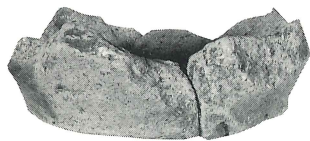
17



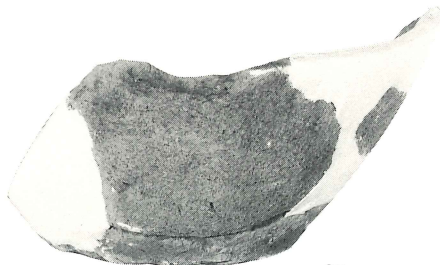
17



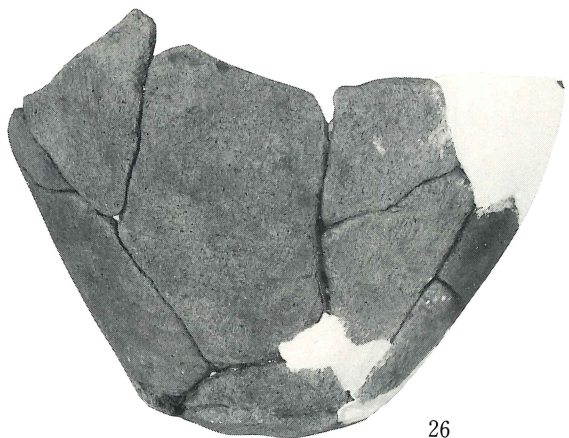
20



21



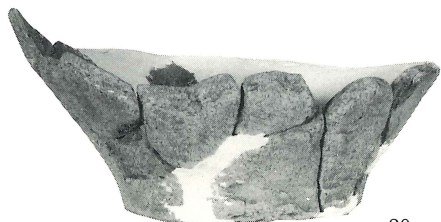
25



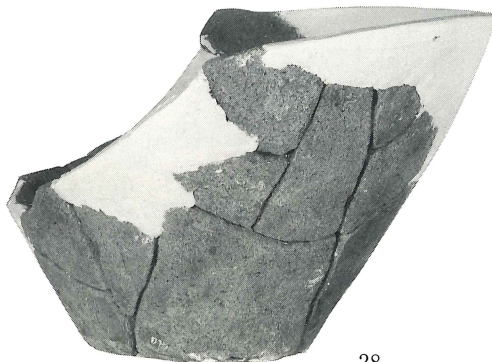
26



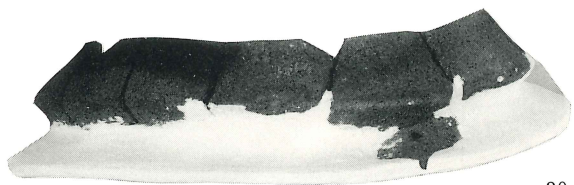
27



29



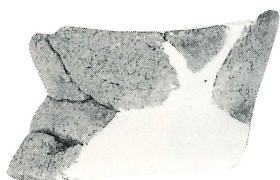
28



30



31



32



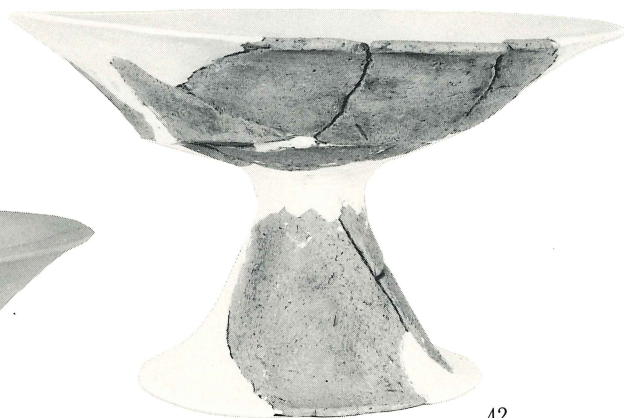
33



34



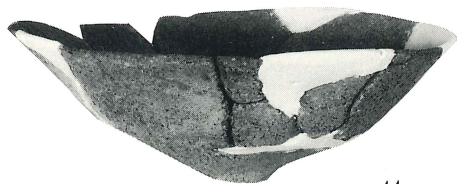
40



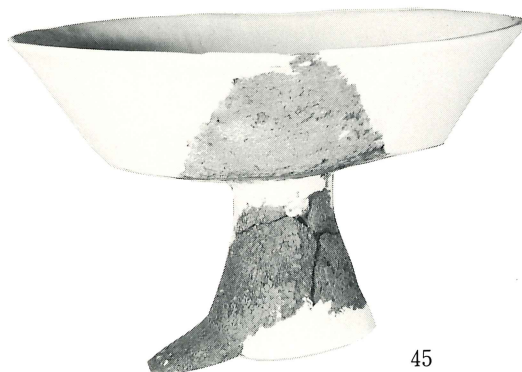
42



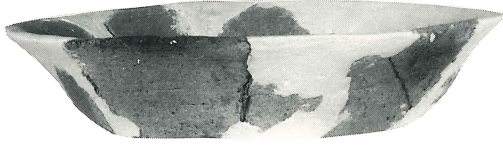
43



44



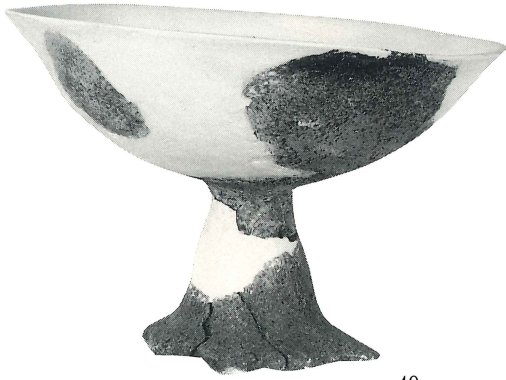
45



46



47



49



60

周溝出土土師器②



4～9号土墳墓（西側より）



4号・5号土墳墓（南側より）



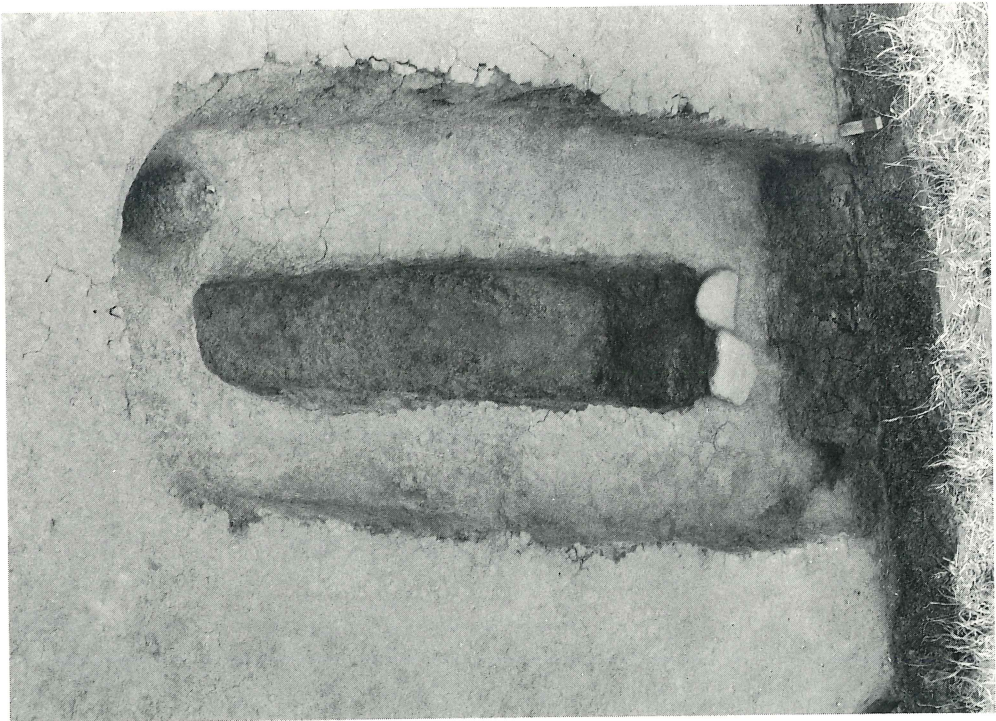
5号土壙墓（南側より）



5号土壙墓玉類出土状態



6号土墳墓



12号土墳墓



7号土墳墓



7号土墳墓鉄器出土状態



13号土壙墓



14号組合せ木棺墓



1·2号石蓋土墳墓



3·4·5号石蓋土墳墓



1号土墳墓



1号石蓋土墳墓石蓋徐去後



2号石蓋土墳墓



2号石蓋土墳墓石蓋徐去後



3号石蓋土墳墓



3号石蓋土墳墓石蓋徐去後



4号石蓋土壙墓



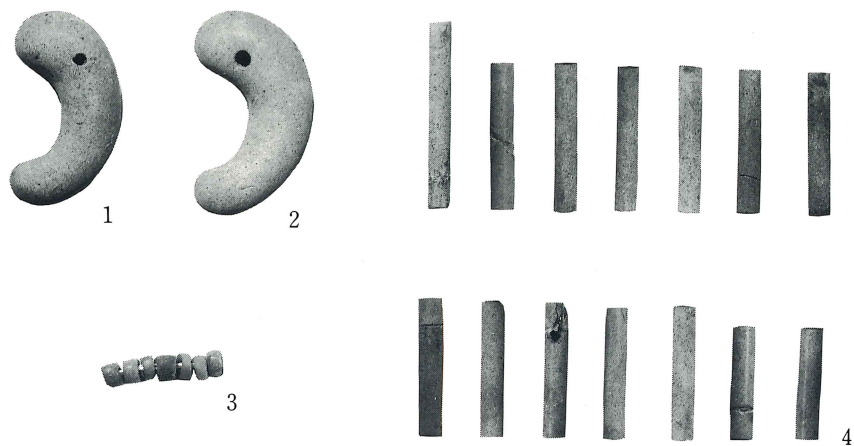
4号石蓋土壙墓石蓋徐去後



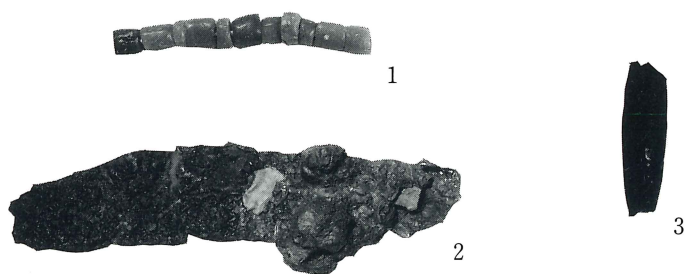
5号石蓋土墳墓



石蓋徐去後



5号土壙墓出土玉類 1・2 軟玉製勾玉 3 ガラス小玉 4 軟玉製管玉



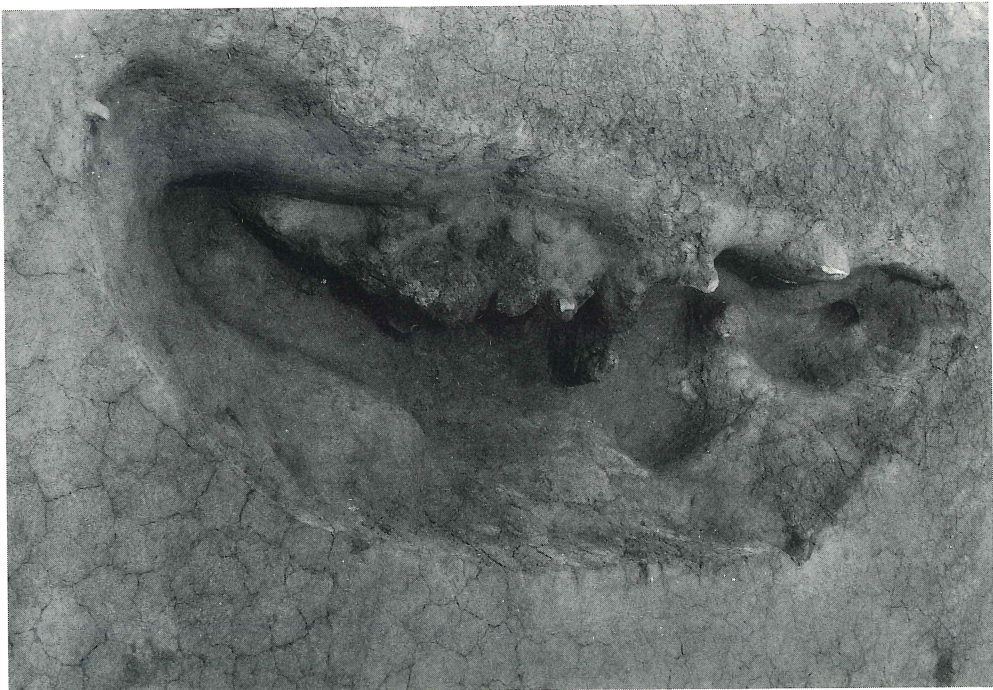
3号主体部出土鉄器・玉類 1 ガラス小玉 2 鉄鎌 3 鉄鋸片



1 周溝内出土叩石 2 同棺材片



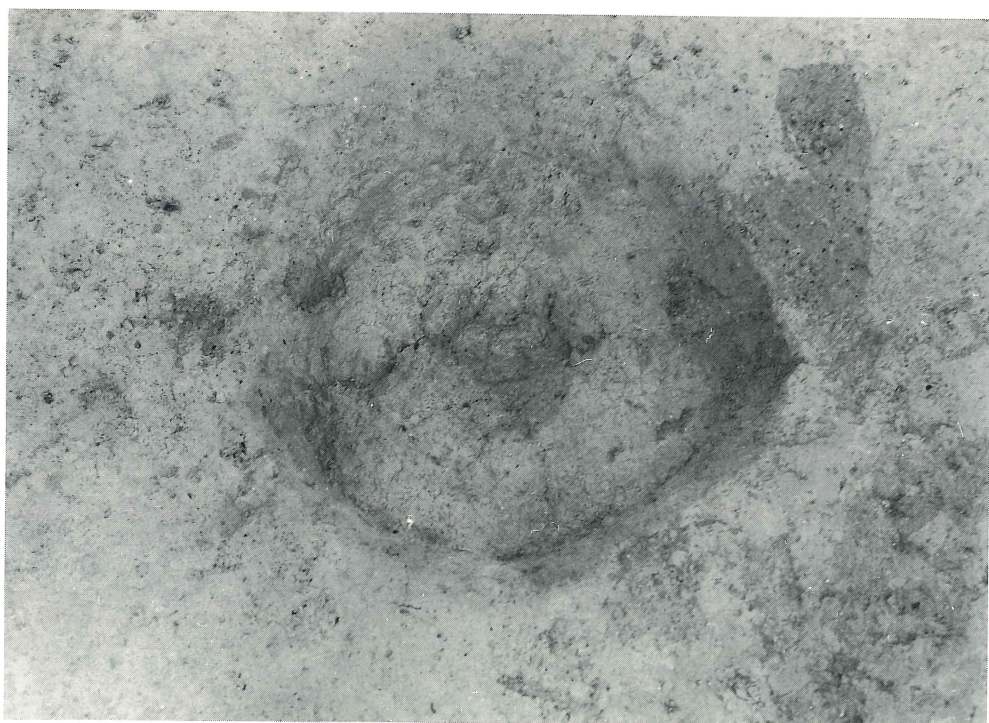
4号土坑



14号土坑



1号火葬墓



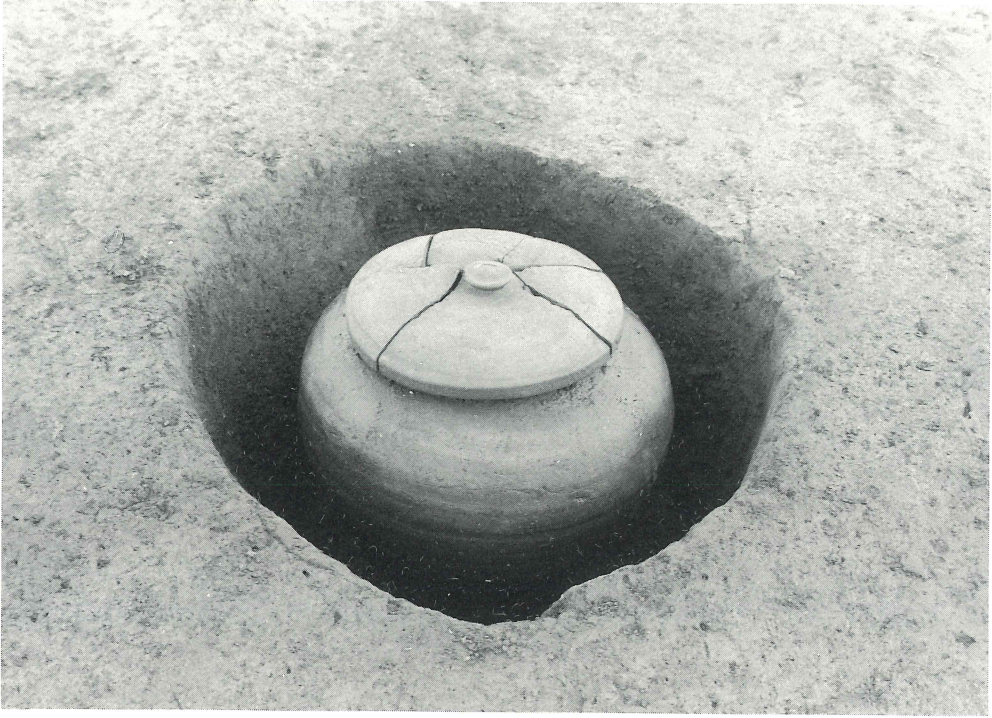
同墓墳
156



2号火葬墓



同葬骨出土状態



3号火葬墓



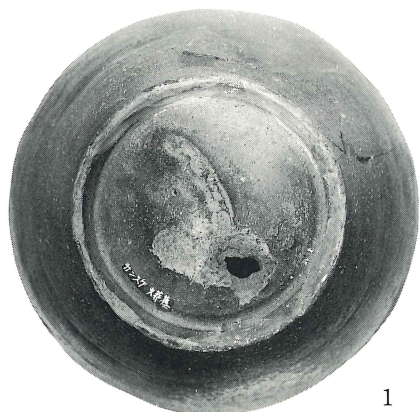
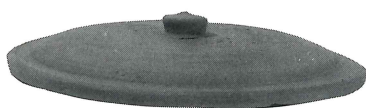
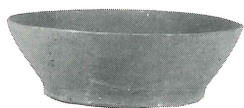
同蓋徐去後
158



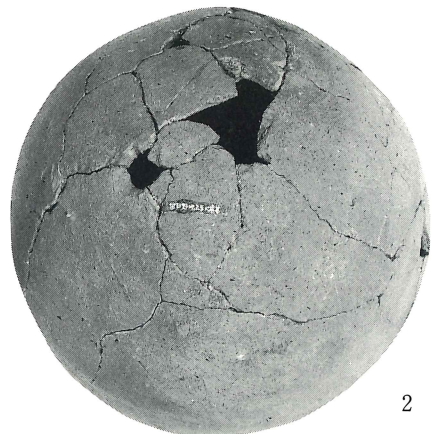
4号火葬墓



5号火葬墓



1



2

火葬墓骨藏器 1. 1号火葬墓骨藏器 2. 2号火葬墓骨藏器



3. 3号火葬墓骨蔵器 4. 4号火葬墓骨蔵器 5. 5号火葬墓骨蔵器